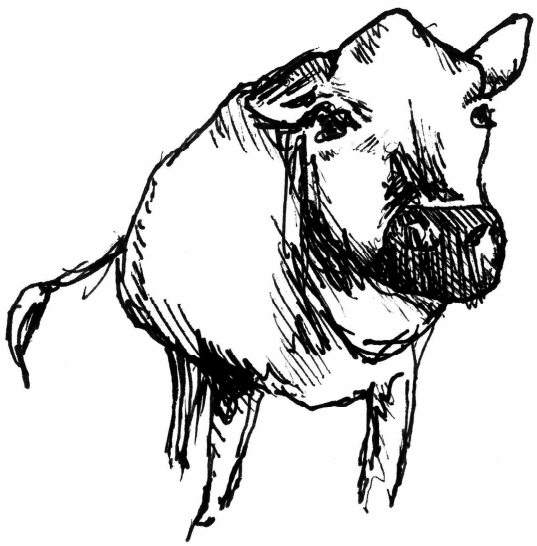
X 「独立時報」に発表された文章



［ PDF版増補１ ］

10 章は、『真理と信仰』に収録されていない鈴木の著作集です。すべて「独立時報」に掲載された文章ですが、10-1 には『真理と信仰』の刊行前に発表されていたもの、10-2 には『真理と信仰』刊行後に発表されたものを収録しています。なお、独立時報の 4 号、5 号は残存しないため、同号からの文書は掲載されていません。

『真理と信仰』未収録著作集　目次

10-1-1　学制(がくせい) 80 年［時報 6 号 1953 年］　447
10-1-2　修学旅行所感［時報 7 号 1953 年］　448
10-1-3　農家二・三男の問題［時報 11 号 1954 年］　450
10-1-4　理想達成の途(みち)―創立記念式に際して［時報 14 号 1954 年］　451
10-1-5　クリスマスを迎(むか)えて［時報 20 号 1956 年］　452
10-1-6　クリスマスの所感［時報 24 号 1957 年］　454
10-1-7　卒業生を送る［時報 25 号 1957 年］　455
10-1-8　クリスマスを迎(むか)えて（1960 年）［時報 39 号 1961 年］　456
10-1-9　新年感想［同上］　458
10-1-10　クリスマスを迎(むか)えて［時報 42 号 1962 年］　460
10-1-11　入学式の辞［時報 43 号 1962 年］　461
10-1-12　第 14 回創立記念式［時報 44 号 1962 年］　462
10-1-13　クリスマス所感［時報 45 号 1963 年］　463
10-1-14　創立満 15 年［時報 46 号 1964 年］　465
10-1-15　エホバを恐れることは知識の始めである［時報 47 号 1964 年］　466
10-1-16　真理を愛し、求めよ－第 14 期生卒業式式辞［同上］　467
10-1-17　第 16 回卒業式の辞［時報 52 号 1966 年］　468
10-1-18　第 17 回卒業式の辞［時報 55 号 1967 年］　471
10-1-19　第 19 回創立記念式［時報 56 号 1967 年］　473
10-1-20　18 回卒業式の辞［時報 57 号 1967 年］　475
10-1-21　第 20 回創立記念式［時報 59 号 1969 年］　477
10-1-22　23 期入学式の辞［時報 61 号 1970 年］　479
10-1-23　第 21 回卒業式［時報 62 号 1971 年］　481
10-1-24　第 24 回創立記念式々辞［時報 63 号 1972 年］　484
10-1-25　第 29 回創立記念式辞［時報 72 号 1977 年］　486
10-1-26　第 28 回卒業式々辞［時報 73 号 1978 年］　488

10-2-1　宇宙完成の大経綸（だいけいりん）
エペソ書 3 章 1-13 節研究［時報 75 号 1978 年］　490
10-2-2　第 29 回卒業式式辞［時報 76 号 1979 年］　496
10-2-3　恐竜と人類［時報 77 号 1979 年］　498
10-2-4　畏神不恐人［時報 78 号 1980 年］　500
10-2-5　憲法を護（まも）る戦い［時報 79 号 1981 年］　501
10-2-6　31 回卒業式の辞［時報 80 号 1981 年］　504
10-2-7　卒業生に告ぐ［同上］　506
10-2-8　忠雄（ただお）先生告別の辞［時報 81 号 1981 年］　507
10-2-9　34 回創立記念式［時報 82 号 1982 年］　510
10-2-10　憲法を護（まも）る裁判の報告［時報 83 号 1982 年］　512
10-2-11　信仰と行為［同上］　513
10-2-12　33 回卒業式の辞［時報 84 号 1983 年］　520
10-2-13　神に依（よ）り頼む
—鈴木弼美（すけよし）・ひろ伝道教育 50 年—［時報 85 号 1984 年］　522
10-2-14　34 回卒業式の辞［時報 86 号 1984 年］　527
10-2-15　第 6 回夏の学校開校式講話［時報 87 号 1984 年］　530
10-2-16　無教会信仰の確立
—石原兵永（ひょうえい）先生告別式にて述ぶ—［時報 88 号 1985 年］　533
10-2-17　弔辞—政池（まさいけ）先生告別式にて述ぶ—［時報 89 号 1985 年］　535
10-2-18　宋斗用兄（ソンドゥヨンけい）を憶う［時報 91 号 1986 年］　537
10-2-19　第 38 回卒業式の辞［時報 94 号 1988 年］　539
10-2-20　ネパール紀行［時報 98 号 1990 年］　543

「独立時報」第 6 号 1953 年

10-1-1　学制80年

この 5 月 13 日東京で学制[1]80 年記念が行われました。1872 年に（従って実は今年満 81 年）新しい学制が発足して以来日本の教育は外形的には大きな進歩を遂げました。教育の普及という事は、世界に誇ってもよい事であります。敗戦以来、すべての事にひけめを感じている日本人が、アメリカの兵隊の中に、文盲[2]の者のあるのを知って教育の普及はアメリカに優っていると、わずかに自らを慰めて居ります。しかし、教育の質のことを考えますと、普及していることが却って恥ずかしいことを示しております。即ち普及しているにも拘わらず、効果が少ないということであります。誰が考えてもアメリカの教育の方が全般的に見て優れていることは明らかであります。日本の教育は一応文盲者がないようにはしてくれましたが、国民に真の自覚を与えてもくれず、高い文化を築き上げることも出来ませんでした。日本の教育の欠点は形式的に扱われ易いので、これは仲々困難のようであります。新教育ということがよく唱えられましたが、それさえ形式的におちいっているような有様です。教育者が官公吏である間は、日本においては真の教育は行われ難いのであります。なおもう一つの重要な欠点は宗教教育を除外したことであります。人間形成にもっとも重要なものを欠いてよい教育が出来るはずがありません。ペスタロッチが盛んに研究されていますが、ペスタロッチの信仰がわからなければ、その教育の理論もわかりません。ただ表面を少しまねただけであります。今日の日本の破綻の最大の原因は西洋文明を取り入れるのに、その根本であるキリスト教を除外したことであります。これらの欠点をまぬがれて正しい教育が行われる為には、どうしてもよい私立学校の発達が必要であります。特に真のキリスト教の信仰の上に学校が沢山出来なければなりません。80 年の日本の教育の跡をかえりみて我々の学校の任務の重大なるを感じます。職員、生徒は神に依り頼みて一層の努力を致しましょう。

「独立時報」第 7 号 1953 年

10-1-2　修学旅行所感

「神の恩恵による」

諸君の労働の結果によって修学旅行を行うことが出来ました[3]。このことは旅行の喜びを一層大きくすることと思います。

そしてこれは非常に貴いことであります。良いことを自ら額に汗して得るということは誠に喜ばしいことであります。

しかしこれをもって諸君の力だけでこの旅行が決行できたと思ってはなりません。父兄より一切の費用を貰って旅行する場合よりも一層多くの人々の恩恵によっているのでありまして誠に「しかるに我が今の如くなるは神の恩恵によるなり[4]」であります。まず父兄の心づくしに依ることはいうまでもありません。営林署では特別の便宜をはかって仕事を与えて下さいました。学校でも多くの犠牲を払って旅行が出来るように努力いたしました。最も大きな事は旅行の行く先々で多くの愛を示して下さったことであります。近江八幡で朝着いた私共を待っていた朝風呂に始まり津山において、伊吹島において、姫路において、富士や東京において人々の愛の〇〇を実感いたしました。数えつくせない多くの人々の好意、愛によってこの旅行が出来たのでありました、諸君はこのことを忘れてはなりません。この旅行により多くの方々の愛を知りこれを通して神の恩恵を悟ることが出来るならばこれは旅行の最大の収穫であります。

「世の中を知ること」

今度私共がグルッと回った面積は本州の半分でありました。広く世の中を見ることが出来ました。最も古い正倉院から最新の空のホテルといわれている成層圏旅客機まで見て参りました。私共の村よりも淋しい所を数時間に亘って汽車で通りましたし、よくもこんなに人がおれるものだと驚く程の大都会を見て参りました。伊吹島においては私共の村におっては想像も出来ない漁村の生活を見ることが出来ました。広い世の中を見るということは大切なことでありまして私共をそれだけ大きくするのであります。各種の所を見て私共の村の真の価値を知ることが出来ます。

世の中が互いに相寄り助け合って成り立っていることを知ることが出来ます。沢山の犠牲によって行われましたがそれらを償いて余りあります。諸君がこの度の経験を整理し活かし、諸君の人格形成に充分役立てんことを望みます。

「神の護り」

20 名のものが 12 日間に亘(わた)り 2,500 キロになる旅行を致(いた)しましたにも拘(かか)わらず一同元気で帰着することが出来ました。各自が二、三個の荷物を持って何十回となく乗り物を乗り降りいたしましたがほとんど間違いもなく過ごすことができました。これは考えてみると不思議なことであります。「二羽の雀(すずめ)は一銭にて売るにあらずや。然(しか)るに汝(なんじ)らの天の父のゆるしなくばその一羽も地に落ちることなからん。汝(なんじ)らの頭の毛をまで数えらる[5]」と聖書にありますが私共の頭の毛まで知っていらっしゃる神様がつまらない雀(すずめ)さえ護(まも)って下さる大きな愛を（判読不明）

「独立時報」第 11 号 1954 年

10-1-3　農家二、三男の問題

30 年近く前のことであったがアメリカから来たチョコレートの缶に「大理石とのみとだけではミケランジェロの彫刻は出来ない」と書いてあった。その意味はココアと牛乳と砂糖などの材料だけいくら揃っても上等なチョコレートは出来ない。なおその上に優れた技術が必要である。このチョコレートはミケランジェロの芸術にも匹敵する位の優れた技術をもって作られたということでさすがはアメリカ人で同じ広告の文句でも違っていると感心したことがあった。材料に高度の技術を加えることによって非常に価値の高い物を作ることが出来る。科学の力によってつまらない材料から高価なものを作り出すことが出来る。石炭瓦斯の副産物で厄介視されておったコールタールからアニリン染料やその他有用な医薬品が作り出されることはよく知られたことである。近代の工業に電力が多量にいるものが沢山あり電力も原料のように考えられてきたが人間の精神力や技術も電力に劣らない工業資源であり、これは人間の脳髄の所産であるから無尽蔵である。領土の小さい資源の少ない日本でも日本人の努力次第でいくらでもこの資源を作り出していくことが出来る。日本の人口問題は深刻であって戦中はそのために相当に平和的な人々でさえ日本の侵略戦争を肯定しておった。戦争は如何なる理由によっても肯定され得ない本質的な悪であるがなおその上人口問題の解決を戦争によっては出来ない。ただ一次的に解決して他に転嫁するだけである。日本の産業に科学と技術をより高度に取り入れて精神的資源を活用して生産を高めることが人口問題解決の一つのよい方法である。神は人口問題についても御旨に叶ったよい解決法を必ず備えていてくださる。日本の農業は非常に遅れている。この遅れを取り返して生産力を高めるには科学と技術が必要である。百姓に学問はいらないなどという考えを拭い去らなければならない。日本の農業が遅れているだけそれだけこれを快復するために多くの人を要する。農村の二、三男は学問をして農村にとどまり農業の科学と技術を高めるために大いに働いて貰わなければならない。人が余って困るなどとは最も大きな誤りである。学問さえすれば農家の二、三男に大きな道が開かれる。一例を上げるならば飼料樹木の研究を盛んにし山林を飼料森化し畜産を盛んにすれば日本の農業生産力を大いに高めることが出来る。その他研究し開発しなければならないことは数えられない程ある。農家の二、三男にいくらでも仕事がある。日本の農村にもっと学問を盛んにしミケランジェロの芸術に匹敵する位の科学と技術を加えなければならない。このためにも我らの高等学校は役立つであろう。

「独立時報」第 14 号 1954 年

10-1-4　理想達成の途(みち)――創立記念式に際して

どこの学園にも理想はある。学校というものが営利を離れたものである以上はこれは当然である。しかしその理想の達成が難しいのである。今日(こんにち)理想の学園は大変少ない。理想達成の障害は種々(しゅじゅ)ある。経済的障害もその一つである。種々(しゅじゅ)の施設をしたくともすぐに経済的制約を受ける。しかしこれは小さな障害であって種々(しゅじゅ)の方法によって打ち勝つことが出来る。少しずつ実施していけば年月はかかっても心掛(がか)け次第(しだい)で大抵(たい)達成出来る。その他種々(しゅじゅ)あるが一番大きな障害は世と妥協(だきょう)し、この世の評判に捉(とら)われることである。現在日本の高等学校の最大の悩みは高等学校本来の教育と大学入学準備教育とを如何(いか)に調和するかということである。理想の教育はやりたいし、大学進学率をよくして学校の評判をよくしたいしと迷っている。特に東京あたりでは有名大学へ入れたいので父兄(ふけい)の方(ほう)から学校に準備教育を要望している状態である。そのために世の秀才といわれる生徒が入学準備のためにその精力を使い果たして入学後ほんとの学問が出来なくなり、日本の文化の上に大きな暗影(あんえい)を投げかけようとしている。当人より親の方(ほう)が有名大学へ入れたがり、東京大学へでも入れればそれで人生の全ての目的が達せられたかの如(ごと)く感ずる。現実の不満を将来の希望に転化しているのでパチンコや競馬が流行するのと同じ心理である。また日本の形式主義が禍(わざわい)している。実力によらないで出身学校によって差別をつけるところから有名大学へのみ入りたがる。そのために大学に入ってしまうと真剣な勉強をしなくなる。日本のインテリ(6)位インテリジェント(7)でないインテリはいない。

このために日本から高い文化が生まれない。これらの悪い習慣を打ち破って真の学問を行い高い文化を作る礎(いしずえ)となるのが我らの理想である。幸(さいわ)い学問への道は大いに開けた。何も一流といわれる大学へ入らなくとも心掛(がか)け次第(しだい)でいくらでも高い学問が出来る。それで世評(せひょう)に捉(とら)われないで一流大学へはいるために無駄(むだ)なことをせずにしっかり高等学校の勉強をし、何よりも人間を作ることを第一に心掛(がか)けて勉強していかなければならない。

職員も生徒も力を合わせてこの世と妥協(だきょう)しないで、世評(せひょう)に捉(とら)われないで信ずる道を前進していくならば必ず我らの理想は達成せられる。

「独立時報」第 20 号 1956 年

10-1-5　クリスマスを迎えて

本年は多くの希望をもって始まりました。

第一は石材採取が軌道に乗って、それによって経済的に学校が支えられるようになること。次は石造の校舎が出来て今のような窮屈な状態を抜け出すことが出来るであろうこと、また石造建築を木造建築位に安く作ることに成功して、その方面でも社会に貢献出来るであろうという風に多くの希望をもって出発いたしました。

しかし、種々の故障の故にほとんどどれも実現致しませんでした。駄目になったわけではありませんが遅れて今年中に出来ないようになったのであります。その意味では今年も失望の年として終わりそうであります。困難の中にあっても希望を失わないのが、信仰をもっているものの特質であります。また今年もこのあばらやで窮屈な中でクリスマスを迎えてやはり私共は大きな希望と感謝を持つことが出来ます。

今年の大きな出来事の第一は朝日新聞によって広く社会に紹介されたことであります[8]。余り有名になり社会からもてはやされることは望ましくありませんし、また私共が堕落して世におもねる危険もはらまれる訳でありまして注意をしなければなりませんが、よい面も沢山ありまして、この暗い世相の中で明るい気持を持てたと喜んで便りを下さる方が多くあります。これを機会に聖書の勉強を始めましたという方もあります。またこの記事により同労者を加えられ、他地方からの入学生が多くなりお断りするのに困った位でありました。生徒も 43 名になりその授業料だけで職員の最低生活は出来るようになりました。

津川石も山形市のある建築で外装に使ってくれまして、コンクリート造りの外装に大変よいことが立証されまして採石事業が大変有望になり喜んで居ります。

ことに喜ばしく思いますことは、静岡市の友人[9]と山形市の友人[10]が校舎改築基金募金運動を始めて下さいましたことでありまして、（山形市のは）山形県の有力な方が多数発起人に加わって下さいまして、活発に進められて居ります。それでたぶん来年 5 月頃には石造の校舎の建築が始められることと思います。特に喜ばしいことは発起人の方々が私共の独立の精神を理解して下さりこれを尊重して運動して下さっていることであります。

私共のこの小さな仕事が神と人とのお役に立つものであるなら必ず存続するという確信を持っておりますので、これまで寄付金募集等しないで参ったのであります。そしてこれまで必要なものは与えられて参りましたが、これが私共だけの力によって出来るというより、多くの人の愛によって出来るという方がはるかに貴く麗しいことであります。石材事業の進捗が予定より遅れましたことは、これにより私共だけの

力に多くの人の愛の協力によって出来るようにとの神の深い御旨(みむね)で御座(ござ)いましょう。

東京においても教友(きょうゆう)達が募金運動を始めて下さるとのことでありますが、その意味で喜んでこれらの愛を受け入れたく思います。こうして事業の進捗(しんちょく)が遅れたことが感謝の基(もと)になります。特に喜びにたえないことは集まる金額の問題ではなくこれだけ多くの人々が私共に好意を持って下さり、この学校がお役に立つものになるようにと願って下さることであります。私共神を信ずるものにとり祈(いのり)が如何(いか)に大きな力があるかということはよくわかっていることであります。この今にもつぶれそうな小さな学校が今日まで続いてきたのは実に主(しゅ)にある諸兄姉(きょうだい)の祈(いのり)に支えられてであります。

神を知らない方の多くの好意も無言の祈(いのり)となって私共を助けて下さいます。このことは金銭以上の貴(とうと)い支援であります。この祈(いのり)に支えられ、全能の神に護(まも)られ、私共はどんな困難の中にも希望と光明(こうみょう)とが与えられ喜んで前進することが出来ます。

1955 年のクリスマスを迎(むか)えるに当たりまして感謝と喜びをもって旧(ふる)い年を送り新しい年を迎(むか)えましょう。

「独立時報」第 24 号 1956 年

10-1-6　クリスマスの所感

今年の最大の出来事はスエズとハンガリーの戦争[11]である。しかもクリスマスを間近にしての事件である。地には平和と天使が歌った[12]にも拘わらず平和はなかなか来ないで戦争のみが多い、世界中のどこかで戦争のない年はないといっていいであろう。正義は微々として振るわないで、腐敗と堕落とが到る所に跋扈している。事の表面だけ見ると失望せざるを得ない。けれどもこれらの裏にも神の御腕ははっきりと現れている。正義は振るわないようであるが、実は大きな力となりつつある。スエズでもハンガリーでも無理な戦争を強行することが出来なくなった。イギリス、フランスの国内でさえ不義なるスエズ戦争に反対の声が強くなって遂に撤退しなければならなくなった。

共産主義者の間にもハンガリー戦争が不正であることが論ぜられてきた。ソ連でもハンガリーに対してこれ以上戦争を続けることが出来なくなるであろう。

実に「真理に逆らっては何をする力もなく、真理にしたがえば力がある」とあるとおりである。長い間正義が影をひそめ、不義が跋扈していたようであった。しかしこれは正義を待ち望んでいるものが長く感じたに過ぎないのである。スターリン主義のような圧政が 40 年も続き私共には長く長く感ぜられたが遂に時が来て亡びた。40 年は一瞬に過ぎないのである。神は着々として御旨を実行しつつあるのである。救主のお誕生がこれを最もよく実証している。徐々にではあるが着々として御旨は実行されつつある。正義は成りつつある。平和は来たりつつある。希望の春は近づきつつある。神様は御旨の一端を私共に示されて私どもに勇気をつけて下さる。しかし何よりも救主の御降誕が最大の希望のもとであり喜びの根拠である。「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった[13]。」この神の最大の愛がクリスマスによって実行されたのである。これによって最大の悪に、罪と死に打ち勝ったのである。他の小さな悪は亡びるに決まっている。戦争が少し位長びいても、悪しき政治家が少し位暴力を振るっても失望するには当たらない。

このように今年も感謝と希望と心からなる喜びとをもってクリスマスを迎えることが出来た、真にありがたいことである。

「独立時報」第 25 号 1957 年

10-1-7　卒業生を送る

今日 12 名の卒業生を社会に送り出すことになりまして誠に感謝にたえません。

諸君はここで真理を学んで参りました。これからは社会において真理に従って生活して行くのであります、そして社会が正しくなるように努力するのであります。諸君が真理に従って正しく生活することによって社会がよくなって参ります。諸君は社会の悪と戦って行かなければなりません。悪に負けてはなりません。悪に勝つことはむずかしいことのように考えられて居りますが、実は案外らくであります。悪に打ち勝つには忍耐さえして行けば必ず勝ちます。エペソ書 6 章 10 節以下の武装の所でも皆防御の武器ばかりであります。防御してこちらが倒れないで居りさえすれば悪はそれ自身で崩れて行きます。どんなに悪の力が強いようでも神に頼りすがって忍耐して行けば神が戦って下さいますので必ず勝つことが出来ます。そして神が確かに在すことを一層はっきりと悟ります。唯一の攻撃的武器は御霊の剣即ち聖書の言であります。聖書をよく読み好きなところを暗記していますと御言がわたしたちに力を与えてくれます。こんなようなことが聖書にあった位では力になりませんが、はっきり憶えて居りますとほんとに力になります。

諸君はこれまで酒を飲まないこと、煙草を吸わないこと、嘘を言わないことを守って参りました。卒業後まで諸君を束縛する考えはありませんがこれらを守り通すことは悪と戦うのに非常に有利であります。これらを守っていくだけで世の中をよくするのに大変役立ちます。酒を飲まなければ世間とつきあって行けないとか、酒を飲まない位のものは役に立たない等といいますがこれは全く誤りで本当の交友は酒を飲まない方がよくできますし、社会は酒を飲まない人の方を信用いたします。誘惑して酒を飲ませといて、飲んで失敗すると駄目だと捨ててしまいます。小さなことのようですがこれを譲ったら負ける第一歩であります。これを守り通すだけで世の中をよくするのに大変役立ちます。今の世は悪くなって居りますので負けないで当たり前の正しいことをしているだけでも大変な効果があります。

神の側につく、正義に組するものが 12 名社会に出るということは実に大きなことであります。社会がよくなり正義が行き渡る為に実に大きな力となります。

卒業生諸君、どうか神に頼り強く生きて下さい。

「独立時報」第 39 号 1961 年

10-1-8　クリスマスを迎えて（1960年）

イザヤ書 9 章内村先生『旧約十年』イザヤ書私訳より[14]

1　然れども苦しみの中にありし者には闇なかるべし。
前にはゼブルンの地、ナフタリの地を恥かしめ給いしも、
後には海の道とヨルダンの向こうの地と、
異邦のガリラヤとに栄を得しめ給えり。

2　暗きを歩める民は大いなる光りを見たり、
死蔭の地に住める者の上に光は輝けり。

3　汝、民をふやし、其喜びを増し給いたれば、
彼らは刈り入れ時に喜ぶが如くに又獲物を分かつときに喜ぶが如くに汝の前に喜べり

4　そは汝、彼らの負えるくびきと其肩の笞と、
しいたぐる者の杖とをミデアンの日に於ける如くに折り給いたればなり。

5　凡て乱れ戦う兵士のよろいと血に染みたる衣とは、
皆火の燃えぐさとなりて焼かるべし。

6　我らの為に一人のみどりごは生まれたり、
我らの為に独りの子は与えられたり。
まつりごとは其肩にあり、其名は「驚くべき謀計者[15]」「大能の神」
「とこしえの父」「平和の君」と称えらるべし。

7　其権威と平和とはいや増して限りなし、
ダビデの位と其国とを嗣ぎ、
これを治め、公道と正義とをもってこれを堅くして、世々限りなからん、
万軍のエホバの熱心此事をなし給うべし[16]。

訳者いう、イザヤ書第九章は余の最も愛する聖書の一章である、余は幾たびこれを復読した乎を知らない、而して常に慰められ、常に新たなるちからを加えらる、この一章の中にキリストの降臨がよく記されてある。さきにはゼブルンの地、ナフタリの地なるナザレの村に、あとには暗きに歩める我心に彼の臨み給いしことがしるされてある。これは聖誕節の唄であって、同時に我再生の歌である。余は全章を余の実験として読むことが出来る、余にとりてはまことに是れ福音以前の福音である。余はこの歓喜の声をもって此私訳を終える。

37 年前にこれを読んで大いなる感銘を受けたことが昨日の如くに思われる。救主の御降誕によっていやしめられた者が栄を得、暗黒の中にさまよっている者に光明が与えられる。憎しみ、争い、戦争がなくなり真の平和が来る。キリストは赤ん坊としてこの世に生まれ給うて、私達と同じように成長なさって救済の大事業を成就なさった。このキリストが私の罪を贖って下さったのである。何と喜ばしきことではないか。万軍のエホバの熱心この事をなし給うべしと、これは必ず成就することである。

この喜びのクリスマスを迎えて我らは歓喜に溢れるのである。この 1 年の間に多くのことが起こった。失敗もあり、困ったこともあった。しかし聖書にすべてのこと相働きて益となるとある如く、皆キリストを賜う程なる愛なる神の与え給うた恩恵であった。今年の出来事の最大なものは火災であるがこれも大きな恩恵であった。私共にもっとしっかりせよとの愛の笞であった。また多くの方から大きな愛を与えられた。今更の如く愛の力の大きいことを知らされた。神に頼る者にとっては悪しき事とてはない。神は必ずよきようにして下さる。それ故火災の時も将来に対する不安等は少しも感じなかった。ただ多くの方々に心配と迷惑をかけて申し訳ないと心配した。多くの方々の愛により立派に復興して喜びと感謝の中にクリスマスを迎えることが出来た。

「独立時報」第 39 号 1961 年

10-1-9 新年感想

新年がどうして目出たいのであろうか。日本で普通新年といえば 1 年のうちの最初の部分即ち正月というのと同じである。欧米では来るべき一ヶ年全部を新年という。ハッピーニューイーヤーといえば来るべき 1 年が幸福でありますようという意味である。今年は理想通りにやろうという希望が持てるからである。信仰のない所では年の始めだけが目出たい。未成年者は一年一年と成年に近づくから新年が目出たい。しかし壮年を過ぎると万事は理想通りには行かず、なおその上に死期が近づいてくる。一休和尚の話とかいう「門松は冥土の旅の一里塚 目出たくもあり目出たくもなし」という歌の通りである。一年の始めとか、人生の始めだけが目出たいと考え、はかない希望に託して目出たくないのに目出たいと考えるというのが一般である。しかし基督信徒の場合は真に目出たいのである。一年一年と天国に近づくのである。私達の理想は必ず実現する。万軍のエホバの熱心これを為し給うべし[17]である。それ故に新しい年を迎えることが目出たいのである。それで天国のことを想像してみよう。

黙示録 21 章に天国の様子が記されている。新しい天、新しい地とある。唯物論者は現在の天地が自然改造などによって次第によくなって理想の状態に達すると考えるがこれではよくなるといってもたかが知れている。唯物論者の理想は低い。これはどうしても聖書が教える如く世には終わりがあり、天変地異が起こって、現世とは違った高い物理的法則の行われる新天新地が創られなければならない。熱力学の第二法則はこの事を暗示する。

天国について一番大切なことは「見よ神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐい取って下さる[18]」とくどい程に書いてある如く、神我らと共にいますということである。神共にいまするならば他のことはどうでもよい。天国はそれだけ慕わしい所である。神自ら人の目の涙を全くぬぐいとって下さるという言がどれだけ多くの人を慰め力づけたことであろう。透明な碧玉で出来ているというような描写は不完全な人間の認識力で考え得る最善の表現であるので文字通りこの通りであるというのではないであろう。神の栄光が都を照らすから日月等の物理的光は要らないという、何とすばらしいことであろう。

人々は諸国民の光栄とほまれとをそこに携えて来る[19]とある。各個人はそれぞれの特長を発揮して天国を飾るのである。どんなに小さい人でも天国の重要な一部分であって他のもので代えることが出来ない。ここに人間の貴さの根拠がある。秋の満山紅葉の美しいのは一本一本の木が皆違い、一本の木でも葉がまた一つ一つ色の濃

さと形が違うからである。これが皆一様では少しも美しくない。そのように個性が貴いのである。神は人を罪を犯せば犯し得るような自由意志を持ったものに創り給うた。自由意志をもって悔い改めて天国の民となり初めて天国が完全な美わしい所となるのである。個性を益々発揮するのであるから現世における親子、夫婦、友人の関係が高められた形で天国においても存続するであろう。現世は天国の準備の世である。現世の生活がよければそれだけ天国がよくなる。現世は穢土[20]ではなくて、貴い準備の所である。

新しい年を迎える毎にそれだけ天国に近づくのである。それ故に新年が真に目出たいのである。

「独立時報」第 42 号 1962 年

10-1-10　クリスマスを迎えて

クリスマスは救い主の御降誕を祝う日である。私達を罪より救って下さる救い主である。罪より救って下さる方はイザヤ書 53 章に預言されている如く自ら苦しまれて、その犠牲によって救って下さる方である。屠り場につれて行かれる小羊の如き方である。黙示録に屠られたと見える小羊として現されている。このような方でなければ私たちを罪より救うことは出来ない。この救い主がこの地上に誕生されたのである。その故に人が罪より救われたのである。そして人のみでなく万物が亡びの状態から救われたのである。内村先生の文章に宇宙の祝日[21]というのがある。天と地とその中にあるすべてのものがその釈放、自由、完成を祝する日であるとある。これは十字架にかかり給うたキリストが誕生なさって初めて実現したのである。クリスマスに際して私達はこの事を忘れてはならない。クリスマスにイザヤ書 53 章を読む所はないかも知れないが実はここに示された如きキリストが誕生なさって初めてクリスマスが宇宙の祝日であり、天の軍勢が全宇宙に鳴りとどろく讃美の大合唱をとなえたに相応しい時である。

普通にクリスマスとして祝う 12 月 25 日に矢内原先生が天に召された。非常な病苦に悩まれた。重い十字架を負われた。矢内原先生のような方があんなに苦しまれたのはコロサイ書 1 章 24 節にある如くキリストのお苦しみのなお足りない所を補う為であり、矢内原先生はキリストの十字架の一端をになう光栄を与えられたのであることは先日の朝礼でも申したが矢内原先生が非常な苦しみにたえられた上になおこの世の人がクリスマスを祝う日に召されたことは宇宙の釈放、自由、完成がなま半かなことでは出来ないこと、神の御子の十字架のお苦しみが必要であることを新たに、明らかに、私達に知らしめる為であると信ずる。世の人が御降誕を祝するキリストは十字架にかかり給う方である。十字架にかかり給う方が救い主キリストであることを一層強く今年のクリスマスには思い浮かべたいと思う。

「独立時報」43 号 1962 年

10-1-11　入学式の辞

学校は真理を教え、真理に従って生きることを教える所である。学問とは真理を知ることである。真理を知り、真理に従って生きて初めて人生の目的を達する。学校は学問をする所というのはこの意味である。学校は真理を教えて真の人間形成に役立たしめる所である。今日学校が上級学校進学の予備校か職業紹介所の如くになってしまっている。これは明らかに学校の堕落である。

真の神を知らなかった孔子でさえも「朝に道を聞けば夕に死すとも可なり」といっている。道を聞くこと即ち真理を学ぶことが人生の目的であるという意味である。真理を知れば喜びがある。例えば三角形の内角の和が二直角に等しいということを証明出来ると喜ばしい。こういう真理を知る喜びの為に勉強して欲しい。勉強するのは有名学校に進学する為、よい就職口を与えられる為、あるいは試験によい点を取って誇る為にではない。真理を知る為に勉強するのである。

日本中の学校が全部進学の為、就職の為になってしまってもこの学校だけはそうであってはならない。就職準備教育は二年生の時から等といって書物を売りつけようとする金もうけ主義の出版者には嫌悪の情を感ずる。入学試験準備教育にのみ専念する学校には憤慨せざるを得ない。教育を商品化するのである。進学率の高いのをもって名門校とする社会も学校も何と愚かなものであろう。

人間は経済的事情に左右されないものを持っている。その貴い人格をもったものを唯食うことしか考えない犬や猫の如くにしてしまっている。人間に対する大きな冒涜である。現実に進学率がよければ良いではないかというかも知れない。しかし所謂名門校に入り大会社に就職して一体どんなよいことがあるのか。収入が次第に増して行って定年になって退職金を沢山とって隠居して死を待つ、ただそれだけである。それで果たして喜んで死んで行けるであろうか。それどころではなく多くの人は単に有名校に入りさえすればよいと考える。それから先どうなるかなどということは考えない。入りさえすれば何かよいことがあると考える。流行を追うて、夢中になって、少しも美しくない風をするのと同じである。

今の世の中ではもうけにならないような勉強をすることの方が賢い。進学の為でなく、就職の為でなく、試験の為でなく勉強して貰いたい。学問をする喜びを知って貰いたい。流行に流されるのでなく、どういう生き方をしたらよいか真剣に考えて欲しい。信仰は強制しないが、真実であり、真剣に人生のことを考えることは必ず行って欲しい。立派な人間になる為に勉強するのであることを忘れないで欲しい。これが入学にあたり諸君に願うことである。

「独立時報」第 44 号 1962 年

10-1-12　第14回創立記念式

神のお創りになったものに一つとして無駄なものはありません。それぞれ何かしら意義があるのであります。二羽一アサリオンで売られるようなつまらない存在と思われる雀でさえも神のお許しがなければ地に落ちないのであります。私共の髪の毛の数まで神はご存知であります。その神が私共を護っておって下さるのであります。雀でも私共人間でもそれぞれ神に護られるだけの価値をもって居ります。それ故に神に叛き罪を犯すことは髪の毛まで数えて居られる神の御前に恐ろしいことであります。しかしこれに反し神のお護りの下にあることは何と有難いことでありましょう。イエス様は山上の垂訓でも「空の鳥を見るがよい、まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしない。それなのにあなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりもはるかにすぐれた者ではないか。」と仰って居られます。

私達の学園も満 14 年存続することが出来て、第 15 年目を迎えることになりました。今日までお護りの中にあり得た事は大いなる感謝であります。創立の時に県では直ちに認可してくれましたが、私立の高等学校は財団法人が経営しなければならない事に定められて居り、その認可を掌る文部省が余り小さくこれでは直ちにつぶれてしまうだろうからといって認可を渋って居りました。利権でも取るように文部省の役人に頭を下げる必要はありませんので高等学校を止めて各種学校でやっていこうと決心して廃校届けを一年たった時に出しました。ところが当時の山形県知事の村山道雄様がそれを握ったまゝ文部省と交渉してくれてようやく財団法人の認可をとってくれました。それで廃校は取り止めとなり高等学校として続ける事になったのであります。

そして文部省の役人の予期に反して 14 年続いてきました。これまで護り給うた神はこれからも護り給うでありましょう。職員一同の犠牲的献身によって続いたのでありますが、一つには山の中で生活費が少なくてすんだからでありまして、小さかったからこそ続いたのであります。

社会に必要なものなら必ず続くという確信は持って居りました。御旨ならば雀以上に護って下さるのでありますから文部省の役人の評価等は問題でありません。ただ御旨に適う学校となる事が大切であります。第 14 回の創立記念式に当たり、私共の理想を益々高く掲げ、使命に向かって邁進する決意を新たにしましょう。

「独立時報」第 45 号 1963 年

10-1-13　クリスマス所感

聖書にはクリスマスが何日に起こったかはっきり記されていない。普通 12 月 25 日に祝われているがこれには何の根拠もない。星の話があるので星のよく見える冬であろうという位のものである。それで 1 月に祝われたことも 3 月に祝われたこともあるという。特定の日に意味があるのでなくて、キリストの御誕生そのものに意義があるのである。日を祝うのでなく御誕生を祝うのである。人はその本来の意義を忘れてその付随物に捕らわれる。そしてクリスマスもその例に漏れずクリスマスの意義も知らずただ騒ぎ遊ぶ。これは不信国の日本のことだけでなく米国においても同じである。ジングルベルズをクリスマスの歌としていることがこれをよく示している。クリスマスの真の意義を忘れてただ喜び騒ぐのである。聖書に日を明示していないのはこのことを戒める為であると思う。日は何日でもよい、度々クリスマスを通して示された神の最大の愛を記念し、真の喜びをもつことが大切である。

聖書はどうでも良いこと、記して害になるようなことは記してないが大切なことはちゃんと記してある。クリスマスについて大切なことの一つはユダヤのベツレヘムに生まれ給うたということである。マタイ伝においては東方の博士達の物語もベツレヘムで生まれ給うたことを強調するための如くでさえある。内村先生の文章に「ローマの帝都においてにあらず、ベツレヘムの僻邑において人類の救い主は生まれ給えり、美服を着たるものは王宮にあり（マタイ伝 11 章 8）然れども人を救う者は僻陬より出づ、神は其の独子をベツレヘムに下し給いて村里を祝し給うと同時に都会を詛い給えり[22]」というのがある。都会を詛うといって単に都会そのものを詛うのではない。都会をもって代表される神を忘れた人間的なものを詛うのである。田舎にあっても神を忘れてしまってはならない。都会にあっても神を慕うならよいのである。

ベツレヘムはパンの家という意味で、荒蕪地[23]の多いユダヤにあっては比較的豊饒な地である。ルツ記に現されている如き農村である。キリストは人に侮られる如き地に生まれ給うて苦しめる人、悲しめる人に真の喜びを与え給うことを示されたのである。キリスト御降誕後二千年、世界は少しもよくなっていないという声が叫ばれるのを聞く。しかし多くの苦しめる者、悲しめる者が真の喜びと慰めとを得、それまで侮られ卑しめられた者が尊ばれるようになったことは確かな事実である。

人類の救い主はベツレヘムに生まれ給うたのである。これによって神の愛が、神の教えが万人に及ぶこと、が明らかにせられたのである。これは大きな福音である。特定の人、特定の才能のある人々だけでなく、むしろそういう人々ではなく、平凡な人々が救いにあずかるのである。キリストは私共のような平凡な取るに足らない者にも降

り給(たも)うたのである。これがクリスマスの一番大切な意義である。

「独立時報」第 46 号 1964 年

10-1-14　創立満15年

基督教独立学園高等学校が 1948 年 4 月に創立されてより満 15 年過ぎました。この間の神のご恩寵を思う時感謝に溢るるのみであります。過去 15 年お護り下さった神はこれからもお護り下さるでありましょう。神によりすがってこれからも日本の教育に一番欠けているもの即ち信仰に基づく教育をやって行き、形式や儀式に捉われないまことの福音の真理の実証をして行こうと決意を新たに致しました。

基督教独立学園が今日あることが出来たのは 1924 年に始められた小国伝道によるものであります。その年の夏に政池仁、横山喜之の両君が内村先生によって派遣されたのであります。そしてこれが中絶せずして今日まで続いたのは政池先生の小国に対する大きな愛の結果であります。私は小国伝道に 1928 年から参加致しました。1933 年に小国に移住して、翌年 9 月に基督教独立学園の前身である基督教独立学校を始めましたが、これは謂わば政池先生の伝道地を私が奪ったようなものでありました。互いに腹蔵なく[24]話し合った結果ではありますが、政池先生がゆずり難きをゆずり、手離し難きを手離したのであります。政池先生が同時に「聖書の農村」という伝道雑誌を始めました。初めは私と共同で発行するということでありまして、小国伝道を私は小国に住んで、政池先生は東京にあって行うという風に致したのであります。「聖書の農村」は間もなく政池先生一人の責任で出すようになり、小国地方や岡山県の農村だけでなく、だんだんに広く全国的に読まれ伝道上の大きな働きをするようになりました。そして「聖書の日本」と名を改めて今日に至りました。この 5 月で 323 号に達し、多くの人々を福音の信仰にまで導きました。

神はゆずり難きをゆずった政池先生の柔和を嘉し給い、政池先生に「聖書の日本」という大きな働きの場を与えて祝福して下さいました。「聖書の日本」と独立学園の歴史が柔和なる者はさいわいであるという聖書の真理を実証して居ります。

独立学園の満 15 年を記念するに当たりこれが今日まで続き得た歴史を思い起こし、ここに神の真理が働いている事実を確認し、神のご恩寵を感謝すると共に私共神の真理に従って生きて行こうとの決意を確かに致しましょう。

「独立時報」第 47 号 1964 年

10-1-15　エホバを恐れることは知識の始めである

基督教独立学園の依って立つ真理はこれである。この箴言 1 章 7 節の言は私が自分で聖書の中から見出したのではなく内村先生によって教えられたものである。

普通にはエホバを恐れることは信仰の始めであるとか、道徳の始めであるというなら理解されやすい。信仰と学問とは対立するものと考えられている。しかし聖書はエホバを恐れることは信仰の始めとも道徳の始めとも教えずに学問の始めであるといっている。

学問の基は謙遜である。人は謙遜にならなければ真の学問は出来ない。学問の前に、真理の前に膝まづくようにしなければならない。偏見や先入観があっては学問は出来ない。学問で一番いけないことは結論を決めてかかることである。神学やマルクス主義の学問にこの欠陥が多い。マルクス主義が知性的であるように見えて多くの欠陥を含んでいるのはこの為である。

人間が勝手に真理を造り上げるのではなく、真理そのもので在し給う神の御前にひざまづいて、神に啓示されて初めて真の学問が出来るのである。ソクラテスは真の神エホバを知らなかったが真の学問のわかった人である。学問は philosophia でなければならぬといった。

学問の中で最も真理を重んずる自然科学がキリスト教国で発達したのは偶然ではない。

学問の目的は真理を悟り、神を信ずることが出来るようになることである。このようにして人間として完成し、神と人間とに仕える為である。真の学問をすれば人は信仰に至らざるを得ない。信仰の母体を教会という組織にしないで真理を学ぶ学校にすることは意義深いことである。

学問の目的は就職の為、金もうけの為ではない。日本中の学校が進学就職の為の教育をしておっても基督教独立学園はこんな教育はしない。エホバを恐れることを始めとするまことの学問をすることをその使命とする。

基督教独立学園が 16 年つづいて来たのはこの使命があるからである。16 年間神に護られて今日まで来ることが出来て第 16 回創立記念式を行うことが出来ることは大いなる感謝であり、喜びである。16 年お護り下さった神はこれからもお護り下さるであろう。

Expect great things from God[25]. 神にのみ依りすがり、私共勇気と確信とをもって前進いたしましょう。

（第 16 回創立記念式式辞）

「独立時報」第 47 号 1964 年

10-1-16　真理を愛し、求めよ――卒業生を送る

イエスは言われた、「私は道であり、真理であり、命である。誰でも私によらないでは父のみもとに行くことは出来ない。」

基督教独立学園の精神は真理を何物よりも重んずることである。真理を愛し、真理を求め、真理に従って生きることが真の人生であると信じている。学問をするのも受験の為、就職の為ではなく、真理なるが故に学問をするのである。学問をすることは真理なるが故に喜びである。三角形の内角の和が二直角であることを証明できると大きな喜びを感ずる。私共は学問をする喜びを知って貰いたく一同で一生懸命になっている。

福音的信仰もこれが真理なる故に信じ、これによって生きて行くのである。真理を真剣に求めて行けば最後には必ず十字架の信仰に到達する。達しないなら、真理を求むる真剣さが足りないといっても過言ではない。真剣に真理を求むるなら十字架の信仰に到達すると信ずるが故に学校を信仰の母体とする。そして信仰は強制しないで真剣になることを要求する。

今年の卒業生の教育の効果は思うように上がっていないように感ずる。今社会を覆うている金銭万能、物質主義に負けたのである。学科の成績は明らかにあらわれる。しかし信仰は他よりの評価を許さないものである。けれども信仰の現れである所のお互いの間の愛の少ないことを感ずる。昨年の卒業式に愛がまことの卒業証書であると申したが、果たして諸君が愛という卒業証書を持っているかどうか真剣に反省して貰いたい。そしてこれからもっと真理を愛し、真剣に真理を求めて行こうという決意をもって新しい門出をして欲しい。

諸君を神のみ手に委ねる。神は諸君を手をとって導いて下さる。

He leadeth me; O blessed thought[26]

友人の好意により、合同国語で習った「神に献げよ」の内村先生の筆跡の複写を卒業生に贈る。ここに大きな人生の真理が含まれている。この真理をこれから先の諸君の生涯を通して汲みとって欲しい。

（第 14 期生卒業式式辞）

「独立時報」第 52 号 1966 年

10-1-17　第16回卒業式の辞

本日一年生 27 名、二年生 26 名がそれぞれ二、三年に進級いたしました。若干名は勉強が少し足りない為に仮進級ということでありまして、それぞれ本人に通知いたしまして、補習の勉強をしてもらうことになっております。三年生（ABC 順に氏名を読み上げ）の 29 名が卒業いたしました。やはり若干名は勉強が足りないために何か仮卒業ということにすべきでありますけれども、その後の指導のことが十分に出来ませんので、それは各自の自覚に待つことにいたしまして、何の条件もつけないで卒業することにいたします。

勉学のことはなんとか程度を示す方法はつきますが、道徳的水準の問題は形に表しがたいので、特に各自の自覚に待つのであります。少なくとも基督教独立学園高等学校の卒業生は、他の人にみつけられなくても悪いことはしてはならない。他の人が同じようなことをしているからといって悪いことをしてもよいと思ってはならない。この二つだけはどう考えてもはっきりわかってもらわなければならないことであります。しかし三ヶ年この学校で学んでも、まだそのことがわからない者があります。これは日本の道徳的水準が低いための害でありまするけれども、ここの卒業生はそれではこまるのであります。年ごとに教育の効果が上がらなくなるように感じます。しかし私どもは失望はいたしません。教育とは教え育てると書きますけれども、育てるのが主でありまして、育てるために教えるのであります。英語やドイツ語では、引き出すという意味の言葉を教育という言葉に使っております。それによって教育というものは、何であるかという事がわかります。「たとい人が全世界をもうけても自分の命を損したら何の得になろうか」とイエス様が仰っております。人間は誰でも全世界よりも貴い物を持っております。それを引き出して完成させるのが教育であります。それ故に教育は学校卒業をもって終わるものではありません。学校で受けた教育をもとにして自ら育成して行くものであります。むしろ本当の教育は卒業と共に始まるといっていいのであります。それですから、アメリカでは卒業式の日を Commencement day と申します。始まりの日であります。これから本当の人間作りが始まるんだという意味であります。それ故に教育の効果が予期したごとくあがらなくとも、私どもは失望しないのであります。この学園で注がれた真理が肥料となりまして、霊魂とか人格とかいうべきものが育てられ完成されてまいります。何時をもって本当の卒業の時とすべきかということは人によって異なるでありましょう。形式的な卒業証書は今日手渡しますが、本当の卒業証書はコリント後書 3 章 3 節に「あなたがたは、自分自身が私たちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず、生け

る神の霊によって書かれ、石の板にではなく、人の心の板に書かれたものである」とあります如く卒業生諸君の心に書かれたものであります。人の心の板とありますのは、少し訳がまずいのでありまして、旧い訳では心の肉碑にとなっております。肉の石碑であります。普通の言葉は石の石碑に書かれるけれども、心の肉碑に、生きている切れば血が出る肉碑にかかれたというのであります。まあ肉という字を人と訳したのでありましょうけれども、本当の意味がでておりません。やはり旧い訳の心の肉碑という方がよいので、諸君の心の肉碑に書かれたもの、それが本当の卒業証書であります。神の霊によってある重要な真理が心に、心の肉碑に書かれた時、即ち、わかった時、それがほんとの卒業であります。さきほどもいったように、みつけられなくても罪を犯してはならない。他の人がしていてもそれが罪の軽減にならないということがわかった時が、ほんとうの卒業証書が手渡される時であります。罪の赦しの十字架の福音が信じられ、十字架に示されたキリストの愛、ご自分を犠牲にしても私達を救って下さる、その愛のいかに大きいかということがわかり、その愛に励まされて、少しでも愛が行えるようになった時、それがほんとの基督教独立学園高等学校の卒業生となったときであります。そういう人その物が卒業証書であります。

この世の習慣に従って、紙に書かれた卒業証書を渡しまするけれども、これは形式に過ぎないのであります。それで少しでも本当の意味を持たせたいために、校長自身がまずい字ではありますけれども、一枚一枚諸君の心の肉碑に書く思いをもって書きました。この卒業証書を思う度に、真の卒業証書は、心の肉碑に書かれなければならないことを強く思い起こしてもらいたいのであります。なお古き信仰の友人、山本泰次郎君の好意によりまして、今年も内村先生の文章「神に献げよ」の肉筆の原稿の模写を記念として一人一人に贈ります。これは今学年の初め頃に合同国語の時に教えたものであります。

汝の財産を神に献げよ、然らば、神は己が有として、之を守り、如何に紊乱せるものなりと雖も能く之を整理し、再び之を汝に委ねて己が（神の）ものとして之を使用し給うべし。

汝の身体を神に献げよ、然らば、神は己がものとして之を養い、疾病の重きに拘はらず、能く之を癒し、再び之を汝に与えて己が（神の）ものとして之を使用し給うべし。

汝の霊魂を神に献げよ、然らば、神は己がものとして之を聖め、汝の罪は緋のごとくなるも雪の如く白くし、再び之を汝に還して己が（神の）ものとして使用し給うべし。

神に献げよ、神の有とせよ、神をして自由に其能力を施さしめよ。然らば困難として免れざるはなし、疾病として、癒されざるはなし、罪として潔められ

ざるはなし。

乱れし其儘、病みし其儘、汚れし其儘、今之を神に献げよ、而して神をして其の大能を以て汝に代わりて整理、治癒、救済の任に当たらしめよ。

この大きな真理が諸君の心の肉碑に強く書きこまれ、諸君が一日も早くほんとの意味の基督教独立学園高等学校卒業生となられる事を、心から願う次第であります。

「独立時報」第 55 号 1967 年

10-1-18　第17回卒業式の辞

本日一年生 26 名が二年に、二年生 27 名が三年に進級し、三年生（氏名を ABC 順に読み上げ）の 26 名が卒業いたします。

日本では学校の勉強を終了することを卒業といいますが、この言葉は少しよくないのであります。業を終えると言うことを勉強してしまったという意味にとって、学校卒業と共に勉強を止めてしまうという傾向を生じます。一般の日本人はそれ故、ものをよく知りません。第一教育ということを知りません。今日日本の教育が試験のための教育になってしまって、重大な危機に瀕して居りますが、これは日本人が教育を知らないからであります。学校を職業紹介所と考え、学校に入るのは楽をして収入の多い職業に就く為であります。大学の入学案内に卒業生の就職先のよいことを誇示する有様であります。学生も学問をすることが目的ではなくて、卒業免状を得るのが目的であります。しかし人生の目的は人格の完成にあります。よい就職をすることではありません。所謂よい就職先を得ても小林章参議院議員[27]のように人格の腐った人間になってしまったらおしまいであります。こんな教育が行われているようでは、日本の社会が根底からひっくり返る心配があります。受験地獄の中にいる日本の青少年が可哀相であります。

教育は人生の目的を達成する為のものであります。人間は人格的存在であります。全世界ともかけがえのない無限の価値を持ったものであります。各人が持っているこの貴いものを引き出し、発展させるのが教育であります。これが人格の完成であります。ヨーロッパの言葉では引き出すという意味の言葉が教育の意味に使われて居ります。日本語では教え育てるといいますが、多くの学問を教えてそれでもってこの無限の価値を持ったものを引き出して育てて行くのであります。それ故に学問が面白いのであります。

勉強を試験の為にするのではなくて、学問のおもしろさの為にするようにと私共は諸君を教育して参りました。諸君は学校を卒業しても勉強をしつづけなければなりません。学校で学んだことを基礎として勉強するのであります。教育が一生続けられるのであります。職業というのも単に生活費を得る為ではなく、これを通して勉強するのであります。教育が行われるのであります。よい職業とはそれを通しての教育がよく行われるもの、言いかえれば人格の完成によく役立つものであります。それ故職業選択には非常に真剣でなければなりません。

学校における教育はこの広い意味の教育の基礎となるものであります。それ故学校卒業と共に勉強を止めてしまってはなりません。むしろ真の勉強がこれから始まるの

であります。それでアメリカでは卒業式の日を Commencement　Day といいます。韓国のプルム学園では創業式といって居(お)ります。卒業生諸君は卒業と共に新たな勉強を始めるのだという自覚を強くしなければなりません。卒業証書は習慣によって渡しますが、独立学園で学んだのはこれを得る為ではなくて勉強の基礎を建てる為であります。卒業証書にも銘記(めいき)してありますが、卒業したのは高等学校の課程であってすべての勉強を卒業したのではありません。これから真の勉強が始まるのであります。

人生の勉強で一番大切なものは信仰であります。これから先の人生を通して諸君はこの学校で学んだ信仰の真理が一層(いっそう)大きな真理であることを学ぶでありましょう。時によると疑いの雲に覆(おお)われることもありましょう。しかし在学中に繰り返し繰り返し教えられた如(ごと)く真剣にごまかさないで考えるならば、真理を求めて行くならば必ず罪の赦(ゆる)しの十字架の福音(ふくいん)に到達します。清く正しくなって神の懐(ふところ)に行くのではなくて、汚(けが)れしそのまま神の御許(みもと)に行き、神に潔(きよ)めて戴(いただ)くのが信仰の奥義(おうぎ)であります。今年も内村先生の「神に献(ささ)げよ」の原稿の複写を贈ります。これもこの真理を教えた文章であります。

「独立時報」第 56 号 1967 年

10-1-19　第19回創立記念式

神のお守りの下に第 19 回の創立記念日を迎えるに当たり、私共は身をもって真理を守ろうという決意をしたいと思う。

最大の真理は信仰の真理である。真理としての基督教を実証するのが基督教独立学園の使命である。そのために他の真理をも守ることが必要である。学問上の真理を守ること、道徳上の真理を守ること、政治上の真理を守ることも皆集まって真理中の真理なる信仰の真理を守ることになる。学問上の真理を守ることは比較的容易である。学問そのものが真理の探究であるからである。勿論学問を曲げて世におもねるものもあるが、それは政治的、経済的利害にからまれるからである。従って政治的、道徳的真理の問題である。政治的、国際政治的真理、経済的真理は与えられた手段方法で社会に真理を示すより他に守る方法がない。与えられた手段というのが限られているから、はがゆいようであるがこれは止むを得ない。

しかし教育の真理は教育にたずさわっている私達が、受けているものも授けているものも、身をもって守らなければならない。

日本において教育上の非真理が今日ほど横行している時はない。教育は就職の為になってしまった。大学が職業斡旋所に堕落してしまった。学校において受験準備教育に夢中になって学問をおろそかにする。それで受験技術は優れているが学問の出来ない学校卒業者がふえて来ている。ほんとの教育が行われないで、利己的唯物的なる、目前の利益のみ求めてあくせくしている動物のような人間ばかり多くなって、種々な困った問題が生じて来ている。学問は考える力を養うものである。考えて真理を求め、真理に従って生きるようにさせるものである。ところが考える力のない人ばかり増えて困るのである。世の中がどうなって行くのかと心配になる。そしてこれは教育の真理を曲げて、ほんとの教育を行わない為に起こったのである。学問は真理であるから、自然科学のような学問でも人間形成に役立つのであるが、その学問をおろそかにするので困った状態が起こって来るのである。

この時にあたり教育の真理を守ることは独立学園の使命である。この学園では受験準備教育はしない。勉強も試験の為にするのではなくて、学問の貴さ、学問のおもしろさの為に勉強するようにと一生懸命になっている。しかし小学校中学校以来、勉強とは試験の為にするものだという考えにかたまっているので試験をしないと復習をしない癖がついていて困っている。第 19 回創立記念日を迎えるに当たって、試験の為に勉強するのでなく学問の貴さの故に勉強するという決意、真理を尊び、真理を愛する決意を新たにして欲しい。

三月末に西川先生が召(め)された。西川先生はほんとの勉強をし、ほんとの教育をしようと、その一生を捧(ささ)げられたのである。今日(こんにち)の誤(あやま)った教育を受けない方がほんとの生き方が出来ることを身をもって実証されたのである。多くの人は今日(こんにち)の教育は間違っていることは確かであるが受験勉強をしなければ大学へは入れないし、自分の理想とする職業につけないから止(や)むを得(え)ない、必要悪(ひつようあく)であるといっているが神の支配し給(たま)う世界に必要悪(ひつようあく)ということはない。教育の真理を曲げないでも立派にやって行けることをその短い美(うる)わしい生涯(しょうがい)をもって示したのである。

もう一つ私共を励(はげ)ますことを報告する。今年の卒業式に来てくださった石森先生が40余(よ)年前に四国の高松で一年半教えられた。そしてほんとの教育を、心と心の触れ合う教育をなさった。先生のその教育を受けた人々が 40 余(よ)年たってもそのことが忘れられず、昨年秋、屋島(やしま)に石森先生教育文学句碑(くひ)というのをたてた。本当の教育をすべての人が求めている。ただ物欲(ぶつよく)に捉(とら)われてそれを捨てて、教育でない教育を受けて不幸に陥(おちい)っているのである。そういう時にこの句碑(くひ)が出来たことそれ自身が本当の教育をすべての人が求めていることを示している。

私達は 19 年もの間私達を守り育(はぐく)んで下さった神の愛を思い、西川先生や石森先生の例に励(はげ)まされて、身をもって日本の教育を守ろう。試験の為の勉強でなくて、真理を愛し、ほんとの勉強をしよう。そういう決意を新たにして 20 年目を踏み出そう。

「独立時報」第 57 号 1968 年

10-1-20　卒業式の辞（18期）

コリント人への第二の手紙 2 章 2、3 節

わたしたちの推薦状はあなたがたなのである。それはわたしたちの心に記されていて、すべての人に知られ、かつ読まれている。そしてあなたがたは自分自身が私たちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることをはっきりとあらわしている。

一年生 27 名、二年生 26 名は今日それぞれ二年と三年に進級いたします。三年生（氏名を ABC 順に呼び）の 26 名は高等学校の課程を卒業いたします。卒業という言葉は悪いので、ほんとは始めの日であって新しい門出である。高等学校で学んだことを基にして、真の学問をこれからやって行くのである。これから真の勉強が始まるのである。このまことの卒業の意義を確く認識するのが卒業式の意義である。これは昨年の卒業式の時にも申したことであるが、今年はなお一層このことを深く解って貰いたい。というのは日本の社会が乱れ、唯物思想に捉われ、金もうけばかり考えるようになり、従って教育も乱れ、ほんとの学問が学ばれない。大学が職業紹介所になり下がって就職率のよいことを第一に考えるようになってしまった。卒業式を社会一般に卒業証書授与式と呼んでいることはこの事をよく現している。卒業証書販売所である。これは私立大学のことのみいうのではない。公立大学において一層ひどいので、出世という物質的利益のために教育を行っている。日本の教育を乱した責任のほとんどすべてを公立学校で負わなければならない。私立学校は公立学校の真似をしているに過ぎない。

独立学園においては真の教育をしようと努力しているが、小学校の時から勉強とは試験でよい点をとるためという考えに染まっているので勉強のおもしろさのために勉強するよう一生懸命に指導しているが、試験をしないと勉強しない。ようやく三年たって卒業するに当たってもっと勉強しとけばよかったと思うようになるようである。そしてその傾向が年とともにひどくなって来る。学問とは考える力を養って真理を、ほんとのことを探求することである。ところが大学卒業者が考える力がない。非常に困ったことが起こりつつある。その考える力のない大学卒業者が教師になって日本の教育にたずさわっているので益々日本の教育が乱れ、中学校を卒業して高等学校に入ってくる生徒が中学校卒業程度の考える力がないので、ここでの教育が年々困難になってくる。それで今年は考えることをもっと学ぶようにといってきたが、思うとおりに考

える力を持ってくれない。紙切れの卒業証書は何の価値もない。真の卒業証書は卒業生自身である。聖書で先程(さきほど)読んだ如(ごと)く諸君の心という紙に書かれたものである。諸君がほんとに考える力を身につけ、よく考えてほんとの学問をすることが出来るようになる時に真の卒業証書を身につけたことになる。今からでも遅くない。どうか一生懸命に考える力を養って欲しい。考える力を養わなければならないということに気付くことが卒業の第一歩といえる。そしてほんとの勉強を一生涯(しょうがい)やるという真の始めの日に相応(ふさわ)しい決意をするのが卒業式の真の意義である。このことがわからずに証書のみ貰(もら)っても何の意味もない。人生とは一生かかって真の学問をすること、これが真の人間形成であることを思って力強くこの始めの日を踏み出して欲しい。

よく考えると真の神への信仰に到(いた)らざるをえないのである。それで卒業に際し卒業証書と共に内村先生の自筆の原稿の写し「神に献(ささ)げよ」を贈る。ここに最高の真理である罪の赦(ゆる)しの十字架の福音(ふくいん)の真髄(しんずい)が示されている。諸君が考える力を真(まこと)に養(やしな)う指標となることを確信する。

「独立時報」第 59 号 1969 年

10-1-21　第20回創立記念式

20 年の間、主の御手に護られて、今日まで来ることが出来て、感謝にたえない。十字架の福音は真理であるから、真剣に真理を求むるなら必ずキリストの信仰に達することを実証してきた。ほんとの信仰は、真理とキリスト教とどちらを選ぶかといえば真理をとる、キリスト教が間違っていることがわかればいつでも捨てるという覚悟がなければならない。それでなければ霊と真とをもって神を礼拝する信仰より落ちてしまい、形式化の恐れがある。真理を探究する学校が信仰の母体となるならば、信仰を形式化より護り、信仰の純粋さを保つことが出来易い。この事を 20 年に亘って実証することが出来て感謝に溢れるのである。

内村先生が亡くなって 38 年たって、無教会の信仰が形式化しないで来た。内村先生が死ねば内村派の教会が出来るであろう。メソジスト教会も、長老派教会も宗教の改革運動から出来たのだといわれてきた。しかし内村先生が死なれると「聖書之研究」は廃刊され、聖書研究会も解散した。けれども先生の伝えた真理は残って、形式によらない、霊と真をもってキリスト教を信ずる信仰は益々さかんになった。矢内原先生がなくなっても、その主宰された雑誌と集会がなくなって真の信仰が残った。これは真理なる罪の赦しの十字架の福音が、真理なるが故に形式的な支持物がなくなってもいつまでも存続することを示す。このように個人が伝道する場合には伝道者が死ぬ時に伝道雑誌と集会を止めればそれでよい。残した真理が働いて伝道が行われる。真理は永遠になくならないので、形式に捉われない純粋の信仰が残る。こうして無教会的信仰が確立されてきた。しかし学校が信仰の母体となる場合は少し事情が異なる。果たしていつまで形式化されないであろうか。学校の場合は学校という組織は残る。これはなくすることは出来ない。この残された組織が形式化の基になるかも知れない。信仰のなくなった学校は信仰のなくなった教会のような弊害はない。これが私が学校を信仰の母体としようと決心した第一の理由である。しかし信仰の形式化は恐ろしいことである。真の教育も真の信仰なしでは行われない。現在の日本の教育は危機に瀕している。真の信仰のあり方を示すための独立学園が、真の教育のあり方を示す学校ともなった。信仰のなくなった学校は学校としての存在理由をも失う。それで独立学園は真の信仰を失ってはならない。学校という形式的な組織を持つ独立学園が如何にしてその依って立つ信仰を形式化しないように出来るか。これが創立 20 周年を迎え得た独立学園の課題である。私はこれまで学園の運営に当たって出来るだけ鈴木のカラーを出さないようにして来た。統率という点において不手際と思われるように敢えてして来た。これは形式化を防ぐための努力であった。その他あらゆる点において純

粋の信仰を保つように一生懸命にならなければならない。一番大切なことはキリストにのみ依り縋ることである。世俗的力に頼ってはならない。物質的利益は得られないようにしなければならない。

> しかし私たちはこの宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、私たちから出たものでないことが現れるためである。

とコリント後書 4 章 7 節にある。自分たちが土の器であることをよく知って、神の御力に依り縋らなければならない。

「独立時報」第 61 号 1970 年

10-1-22　入学式の辞（23期）

新しい一年生 26 名を迎えて、総勢 77 名で新しい学年を発足いたします。前年度は 78 名であって、1 名だけ定員数 75 名に近づいたことは大きな喜びである。大きくなることは容易であり、多くの学校が大きくなりすぎて真の教育が出来ないで困っている時に少数定員を保つことは大切なことである。何でも大きくなることはわけなく、波に乗ればどんどん大きくなる。これを押さえて行くことは困難である。今日我が国が大きな経済成長をしているが、そして政治家はこれを自分の功績のように宣伝しているが、実は政治が悪いからである。現在のような儲かりさえすれば不必要なものでも生産するという経済成長は害あって益のないものである。これを押さえて歪みのない成長をするように導くのがよい政治である。

今日の日本の教育は崩壊してしまったといっても差し支えない。学校において真の学問が学ばれず、真の教育がなされなくなってしまった。それ故に大学紛争が起こったのである。社会をよくすべき教育がこのように駄目になってしまったので日本の将来が心配になる。

このように教育を悪くしたのは今日の日本社会を覆っている唯物思想である。唯物思想は必然的に金儲け主義になる。教育を受けるものも名目だけの学歴をつけてよい就職口を得るために受ける。教育をする方も職業として収入を得るためにする。それで出世したいから社会や上司におもねて教育を放棄して受験準備教育を行い、進学率を高めて名声を揚げようとする。学問を教えることによって教育が行われるのであるが、今日の学者は学問を愛してではなく名声を揚げるために学問をするので、これも金儲けに他ならない。これでは本当の学問も学ばれず、本当の教育も行われないのは当然である。本当の学問とは真理を求めて真理を愛することを身につけ、真理に従わなければ生きてゆけないことを悟らせるものである。嘘やごまかしでは生きて行けないことを教えるのが学問の本当の貴さである。これが学問の偉いところである。学問を応用していくら金儲けが出来ても人間は幸福になれない。学問の貴さはその応用にあるのではなく人間を真実にするところにある。それ故学問を教えることによって教育が行われるのである。教育は人格の完成であるというのはこの事をいうのである。

学問とは、よく物事を見てよく考えて真理を獲得することであり、得た真理を実証する事である。自然科学なら実験をする、社会科学ならそれによって社会がよくなって行くかどうかをよく見る。社会が悪くなりつつあるから現在の経済学や社会学や政治学が間違っているといってよい。

独立学園では人格教育をするから学問の勉強をしなくてもいいと考えたら、それは大きな誤りである。学問を学ぶ事によって人格教育、道徳教育が行われるのである。外の学校よりも一層本当の勉強を一生懸命にしなければならない。試験によい点をとって自慢したり、入学試験に合格するために勉強するのではなく、学問の貴さ、面白さがわかって勉強して欲しい。学問というものはこのように人間を作るものであるから貴いものである。よく考えて、真理を得て行く事は本当に楽しい事である。これに反して受験勉強は理解してない事を無理に暗記させられるから苦しい。試験地獄という言葉さえも出来ている。真の学問は考える力を養うものであるが、受験勉強ではよく考えていると時間が経って問題が沢山やれなくなるから、考えないで丸暗記や勘で答を出すことを練習する。それ故学問が出来ないようになる。今日の大学入学試験は学問の出来る人を締め出して、出来ない人を入れる試験である。それ故大学卒業生が学力がなく、大学紛争が起こるのである。

学問をするのには謙遜な心を持つ事が大切である。人間というものは間違いをしやすいものであるから、他の人の意見を聞いて誤りがあったら正して行くという事が必要である。特に教師の言う事をよく聞かなければならない。謙遜になるならば理解力が遅い者でも充分学問は出来る。学問の出来ない人とは教師の言葉に耳を傾けない人である。よく人のいう事を聞いて考えて、考えを養うのが学問の道である。自分の無力さ、愚かさ、弱さを悟って、神に依り縋って本当に強く、賢くなるのが信仰である。真の信仰のある所に学問が発達したのはこのためである。一年生のみでなく、二、三年生もこの事をよく理解して欲しい。

「独立時報」第 62 号 1971 年

10-1-23　第21回卒業式

第 21 回の卒業式に当たりまして、三年生 25 名が卒業いたします。それから同時に二年生 26 名、一年生が 26 名それぞれ三年および二年に進級いたします。

今日の日本の教育は崩壊してしまっているといってよいのであります。学校の紛争や人間性に反するような犯罪や不道徳の増加その他いろいろの事が日本の教育が駄目になっておるそのことを示しております。社会を良くしていくべき教育が崩壊してしまうことは恐るべきことであります。日本の社会がどんなになるか心配であります。日本の教育がみんな駄目になっても独立学園だけは本当の教育をしていこうと努力してまいりましたけれども、高等学校に入って来ます中学卒業生の学力が年々劣ってきております。中学卒業程度の学力がないのであります。特に学問のもとであります考える力が段々劣ってきております。それで学園で教育いたしますのにも年々その教育に困難を感ずるようになってまいりました。教育の成果が年々十分にあがらないようになってまいりました。独立学園もその被害者であります。それで私は教育行政者に機会あるごとに抗議をし、改善の要求をいたしますけれどもなかなか改まらないのであります。そのうちに父兄も社会も教育の崩壊に苦しむようになります。そして教育者に対して何故こんな教育をしてくれたかといって抗議をいうときが当然来ると思います。そういうわけで今年度の卒業生も学力が十分であるとはいえないのであります。

それにもかかわらず今日卒業することにいたしました。それには理由があるのでありまして本当の卒業ということの意義を考えるからであります。卒業ということの意義、それは悪く解釈されまして、もう勉強をおしまいにすることというふうに考えられやすく、日本の学校卒業者ほど学力のないものはないのであります。学校を卒業すると勉強しない。立派な学歴のある人が人間として知らなければならないことを知らない例を沢山見せつけられております。それは勉強とは学校のときだけでいいので、卒業すればしなくてもいいと考えるからであります。学校で勉強するのも本当の学力を身につけるためではなくして学校卒業の資格を得さえすればいいと考えております。それで今日日本中の人が日本が学歴偏重ということで困っているといっていながらみんな学歴を求めること卒業証書をもらうことを勉強の目的としております。それで本当の勉強ができなくなって本当の教育が行われなくなったのであります。どこの学校にまいりましても卒業式に呼ばれていきますというと卒業証書授与式といっておる。それはもちろん本当の意味は勉強して、その成果があがったことを証明するためにその証書を作り、その証書を授与するというのでありましょうけれども、ただ卒

業証書をもらいさえすればいいんだという考えがいきわたってまいりまして、そして本当に卒業式というものは卒業証書授与式だということになってしまって、ますます日本の教育が悪くなっていくことに拍車(はくしゃ)をかけております。

いくら卒業証書をもらっても学力がなければ何にもならない。ところが卒業証書さえあれば学力がなくってもいいというように日本の社会がなってしまっておりますのでますますそういう傾向がひどくなってきたのであります。けれども本当の卒業という意味は学校で勉強したことをもとにしてこれから本当の勉強を始めるんだというのであります。卒業証書にすべての勉強を卒業したとは書いてない。高等学校の課程を卒業したことを証明すると書いてあるのであります。高等学校で勉強したことをもとにしてこれから本当の勉強を始めるというのが卒業の本当の意味であります。卒業式というのはその決意を新たにする時として意味があるのであります。紙切れをもらったところで何の役にも立ちません。単に証書を授与する時ではなくしてこれから本当の勉強をするんだという、そういう決意を新たにする、それが卒業式の本当の意味であります。それですからアメリカでは卒業式の日を commencement day といいます。これは始めの日という意味であります。これから本当の人生が始まるそういう日だと言う意味であります。今日はるばる韓国のプルム学園の崔(チェ)先生[28]がこの卒業式に列席してくださいましたけれどもプルム学園では卒業式のことを創業式といっております。業(わざ)を創(はじ)める、創作創造の創ですね、業(わざ)を創(はじ)める式といっております。それは本当の卒業の意味を理解してそういっておるのであります。卒業式というのは勉強を止(や)める時ではなくしてこれから本当の勉強をするときであります。それですから今年卒業の卒業生諸君が高等学校の学力が十分になくってもこれから本当に勉強するんだというそういう決意を新たにしてくれるならば卒業していただいて十分意味があります。たりないところはよく勉強することによって補(おぎな)っていただきたい。これから本当の勉強を始めるのだ、という決意をつけて欲しい。一生勉強する、それが人間の生涯(しょうがい)である、本当の勉強をして人間として完成する、それが人生の目的であります。そのことが理解できるならば、よく理解するならば、真の意味の高等学校卒業程度の学力がなくっても卒業していくことができると思うのであります。ですから諸君は卒業式にあたりましてこれから本当の勉強をするんだというそういう決意を新たにしていただきたいのであります。卒業証書という紙切れは何の意味もないものでありまするけれども、本当の卒業というのはそういう意味だという意味をこめて、まずい字ではありまするけれども私が自分で書いた卒業証書を諸君にさしあげることにしております。その証書をあげることが式ではないのでありますからここでは渡しません。ことに卒業生諸君に一人一人卒業にあたっての所感を述べていただくことにしておりますので時間がないからここではさしあげません。あとでさしあげますけれども、卒業証書を見るたびに、あるいは今日の卒業式を思うたびに、卒業というのはこれから本当

の勉強を始めるものであることを思いおこして、諸君に本当の勉強をしていただきたいのであります。そういう決意を本当に強く持っていただけるならば諸君を安心して卒業させてあげることができるようになります。そういう意味で今日諸君に卒業していただくのであります。卒業式というのはこれから本当の勉強を始める、その記念すべき日であるということをよくおぼえて、忘れないで、そしてこれからさきの諸君の生涯(しょうがい)を本当に立派な生涯(しょうがい)としていただきたいのであります。どうかそういう意味でこれから一生懸命になって人生を立派に生きていってください。

「独立時報」第 63 号 1972 年

10-1-24　第24回創立記念式式辞

サムエルは戦争の準備よりも神様の御旨に適うことをすることを先にした。戦の準備ができていないときにペリシテ軍が攻めてきた。イスラエルは敗北するかと見えたが、神は大いなる雷をとどろかせ給うたので、ペリシテ人が敗走した。その勝利の記念にサムエルは一つの石をとって、ミヅパとエシャナの間にすえ、その名をエベンハアゼルと名づけ、そして「ここまでヤハウエが我らを助けられた」といった[29]。エベンハアゼルというのをなまってエベネゼル[30]と普通いっておりますが、エベンとは石で、ハは冠詞で、アゼルは助けでありますから助けの石であります。今の時に至るまでと時間に限らずこれまでという意味にとってもよく、これまでといってもよい言葉であります。人生においてすべては神の助けによって行われるのでありますが、時々普通では行われないと思われることが行われることがあり、神の助けを強く感じます。サムエルは準備が充分出来ていない戦さに勝ったので神の助けを強く感じて助けの石を建てたのであります。人生は助けの石を建てるべき時が度々あります。

独立学園が神の助けにより 24 年続いて来ることができまして 24 回目の創立記念日を迎えて、これから第 25 年目を出発することは大いなる感謝であります。特に今日は私立学校経営の最も困難な時であります。公立学校の給料がベースアップで上がってまいりますので職員の給料を上げなければならないのに授業料は上げることができないというので非常な困難に陥っているのであります。公立学校では税金でその不足を補っているのでありますから私立学校にも税金を必要なだけ廻してやるべきであります。以前は成績が悪くて公立学校へは入れないのだから税金の二重払いは当然であると考えられましたが、今日では公立学校でちゃんとした教育をやってくれないから、私立学校へ行くという人が多くなりましたから、成績が悪いから税金を沢山出せという論理は成り立たなくなりましたがそれでも私立学校助成ということは仲々出来ないでおりまして、私立学校経営が非常に困難になっております。政治家が私腹を肥やすことに多く用いて公共の用に少なくするからであります。

これは当然、私立学校の標準経営を考えてそれから算出した授業料と公立学校の授業料との差額を政府で負担すべきでありまして、問題解決の道をこの方向に進めて行くべきであります。

独立学園はこの困難な時に困らないでおられます。文部省であまり小さくてすぐにつぶれるであろうと財団法人の認可を渋った程経営困難なはずの独立学園が困らないで、大きくって経済的にしっかりとした基礎の上に立っていると考えられている学校が経営困難に陥っているのであります。これは人間的な助けは助けにならず、神の

助けのみが頼(たよ)りになることを示しております。

独立学園が今日(こんにち)困らないのは、辺地(へんち)にあること、少数であること、借金をしないことを守っているからで、一口(ひとくち)にいえば日本の経済に巻き込まれないようにしているからであります。これらはいずれも私立学校経営にマイナスなことと考えられていることであります。要は人間の経済に頼らず、神の経済によって立つことであります。

それ故(ゆえ)に今日独立学園が存在し得ることは神の助けであり、本来なら真っ先につぶれるべき学園が経営困難に陥(おちい)らないということ自身が一つの大きなエベネゼルであります。

「独立時報」第 72 号 1977 年

10-1-25　第29回創立記念式

独立学園が戦後新制高等学校として再出発してより今年で満 29 年が過ぎ、第 30 年目を迎えた。山形県により 1948 年 4 月に高等学校として認可されたが、財団法人の認可は文部省がするのであって、規模があまり小さいので認可をしぶっていたのを時の山形県知事村山道雄氏が斡旋して一年遅れて認可されたのである。しかし文部省の危惧にも拘わらず、神の助けにより 29 年続いた。今日、日本中の私立学校が困っている。教職員の給料は公立なみに上げなければならずそれに見合うように授業料を上げることが出来ないからである。独立学園はまだ授業料を上げる余裕があるが、給料を増やす必要がないから上げないでいる。

これはすべて世間普通の考えに反することをしているからである。学校を建てるには都会に建てるのが常識であるが、こんな山の中に建てた。生徒数を増して授業料収入を多くすることが経営の秘訣であるのに少数定員を守り通そうと一生懸命になっている。受験準備教育をやって、進学率をよくして、所謂名門校になることが普通であるが、ここでは受験準備教育は一切やらないでいる。このように世間普通の考えに反して歩んできたから、困らないで 29 年続いてきたのである。人間的なものに頼らないで、神に頼ってきたからこれまで来られたのである。まことに「我が助けは天と地とを造られたヤハウエから来る[31]」（詩編 121 篇 2 節）である。天地万物を創造なさった真の神を知りその真の神に助けて戴くに優る幸いはない。

一節に「私は山に向かって目を上げる」とあるが、これは複数で、山々であって高い山が峰を連ねている光景の雄大さを思い、その雄大な宇宙を創造なさった神に全身全霊をもって縋るという意味である。人間は神に従って、初めてほんとに生きることが出来るのであるが、学校も神に従って初めてその存在の意義を全うすることが出来るのである。独立学園は信仰の純粋を護るために建てられたのであるが、教育の純粋を護るための学校にもなった。

今日、日本の教育が荒廃してしまっている。人間不在の教育が行われている。これは受験準備教育のために本来の教育を放棄したからである。国民が受験地獄のために苦しんでいる。学生の自殺が増加しつつある。大学卒業生が学問が出来ない。どうしてこんなバカなことになったかというと、人々が金銭の奴隷になってしまったからである。金銭を崇拝するという最も幼稚な偶像教信者になったからである。これは唯物思想のためである。どんなに学問らしく飾りたてても唯物論は昔の素朴的唯物論といわれたものから脱しきれない。今日金銭万能主義が行われていることが唯物論が誤っている証拠である。世の中がこんなに悪くなったのは真の信仰を捨てた故である。教

育も金儲(かねもう)けのために行われている。教育を受ける者はよい就職をするためであり、教師もよい給料を得るためである。時代の趨勢(すうせい)だからといって受験準備教育をやり、必(ひつ)要悪(ようあく)だといっている。金銭よりも大切なものがあることを教えるのが学問であり、教育である。教育が社会を引っ張らなければならないのに、社会に引っ張られて堕落(だらく)してしまったのである。人間は唯物論(ゆいぶつろん)を捨て、金銭の奴隷(どれい)たることを止(や)めなければならない。

「独立時報」第 73 号 1978 年

10-1-26　第28回卒業式式辞

三年生 26 名がこの度卒業致します。1 名は病気のため長期欠席致しましたので卒業延期となりました。大変よくなりましたので足りない勉強を補うことが出来てやがて卒業できることと思います。

二年生 26 名、一年生 26 名、それぞれ三年及び二年に進級致します。先程もお祈りの中にありましたけれども、私たちの教育の歩みは本当にたどたどしいものであります。日本の教育が乱れてしまっておるので、その影響を受けているのでありますが、本当の勉強ができていない、卒業生の学力も充分でない、本当は卒業させられないような状態であります。しかし世間一般の学生はもっとひどいのでありまして競争に勝って有名大学に入り、成績がいいと思われている人々は学問が出来ないのであって、そういう学生が大学に入っておりますので本当の学問が出来ないで困っているという状態であります。それに比べれば遥かによい状態でありますので不充分ではありますけれども卒業ということに致します。しかし年々日本の教育が悪くなってきて、成績の足りない卒業生を出さなければならないということは、まことに残念なことであります。

日本は今、教育が悪いために非常に困った状態になっております。実は先日東京で山形県選出の議員が文部政務次官になっておりますので会ってきました。次官は、「実はこの間滋賀県に行ってきました」と申しました。何故滋賀県にいったかというと中学生の殺人事件があって大変なことだと思って行ったというんです。大変と驚くには時期が遅いのであります。そういう生徒の出るような教育をずっとして来たのであります。言いかえれば本当の教育をしないのであります。それ故不充分でありますけれども、本当にたどたどしく申し訳ないのでありますけれども、まだまだはるかに優っておりますので卒業ということにしたのであります。

残念なことには学園の生徒の中にも、勉強をしないことを誇りとする人がいる。勉強をする人を嘲笑うという気風がある。というのは、世間では勉強というのは、本当の勉強ではなくて、受験勉強であって、試験にいい点を取って人に誇るために勉強しておりますから、そういう勉強は愚かでありますが、この学園ではそういう勉強をしていない。本当の学問を学んできたのですからほんとうの勉強を嘲笑うというのは悪いことであります。何よりも残念なことは、諸君の中に信仰の勉強をしたくないという気風があることであります。ある生徒は朝礼の時に「聖書の勉強は致しません」といった。そういう人は約束を破ったことになる。入るときに聖書の勉強を一生懸命にいたしますと約束して入ってきたのです。約束をやぶることではないかというと、入

る時にはそう思ったけれども、入ってから勉強しない方がよいと考えが変わったという。

約束を破ってはならない。考えが変わって約束を破る時には、約束する時の前に戻らなければならない。学校を止(や)めなければいけない。やめもしないで平気で約束を破るのは人間としての値打ちを捨てたことであります。もちろん熱心に信仰を求めて聖書を勉強して、これが真理とは思えないから信じませんというのはいい。信仰は強制すべきものではないから決して真理とは思えないものを真理と思えということはいいません。けれども信仰を熱心に求めて勉強することだけは要求いたします。そういう約束で諸君に入ってもらった。その上(うえ)聖書を勉強しない人は他の勉強もしない。信仰を持たないこと、聖書の勉強をしないことを誇りに思うような人が出て来たということは本当に残念なことであります。何か信仰を求めるのは他の人のため、先生に気に入られるため、両親に気に入られるためと考えている人があるかも知れないが、それは大きな間違いで、信仰をもたないということは本人にとって、どの位(くらい)大きな困ることかもわからない。今の世の中に出て、信仰をもたなかったらどうなるかわからない。誠(まこと)に恐ろしい世の中であります。

それ故(ゆえ)に卒業の資格はないのでありまするけれども、卒業させます。諸君は考えを入れかえて、一生懸命勉強して欲しい。勉強することを喜びとし、特に聖書の勉強をして欲しい。先程(さきほど)歌いましたルターの讃美歌[32]にもありました通り悪魔世(よ)にみちて私たちを虜(とりこ)にしようと牙(きば)をみがいて爪(つめ)をみがいて待ち構えている。そういう中に入ってゆくのに信仰なしで入ってゆくというのは恐ろしくて、いても立ってもいられないことであります。そういうことを考えないで信仰をもつのは、先生に気に入られるためだ、両親を喜ばすためだというようなことを考えておることは自(みずか)ら滅亡(めつぼう)の淵(ふち)に飛びこんでゆくようなものであります。何の勉強をする時でも、あるいは讃美歌をうたう時でもその歌の意味を考えてうたわなくてはならない。人の誉(ほまれ)を求めてはならない。そういう風(ふう)に諸君は人の誉(ほまれ)を求めて、聖書の勉強とか試験のためでない勉強とかは人の誉(ほまれ)にならないからと思ってしまうのだと思うのですね。何でもいいかげんにしてはいけない。毎日歌う讃美歌でもその意味を考えて学問の示す真理に従(したが)って生きてゆかねばならない。そのために勉強をしているのでそのことをよく考えて、これからは本当の勉強を一生懸命やってほしい。

「独立時報」第 75 号 1978 年 11 月

10-2-1　宇宙完成の大経綸[33]　エペソ書3章1－13節研究

エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、ピレモン書の四つを獄中書簡と呼んでいる。パウロが使徒行伝の終わりのローマの獄中で書いたものだからである。近頃の多くの学者はエペソ書はパウロが書いたものでないといっているが、その根拠はいずれも不確実でそう断定することはできない。パウロが書いたものとして差し支えない。3章1節から読んでいく。

1　こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているこのパウロ―

もとの言葉の順序ではまず初めに「こういうわけで私パウロは」と強く書き出している。そしてそのパウロがキリスト・イエスの囚人であること、そしてあなたがた異邦人のために囚人になっているのであるといっている。14 節にもこういうわけでという言葉があって、祈りの言葉が続いているから、ここでも祈りを書くつもりでこういうわけでといったが、異邦人のためのキリストの囚人ということの説明をしたくなって、いわば脱線して 13 節までにそのことを述べている。パウロは脱線した時によく偉い真理を述べている。

2　わたしがあなたがたのために神から賜った恵みの務めについて、あなたがたは確かに聞いたであろう。

パウロは神から恵みにあふれた務めを受けている。その務めは異邦人に伝道するということである。エペソのキリスト信徒たちは大部分異邦人であるから、エペソ人に伝道することは実に神から受けた恩恵である。そしてそのために囚人になっているから、囚人であることが神の大きな恵みの務めである。そのことはあなたがたは確かに聞いたであろうといっている。ここで務めといっている言葉はオイコノミヤというのであって、英語式にすればエコノミーで普通経済と訳している。それで文語訳では経綸と訳している。神の大御業という意味である。オイコスというのは家であるから一家の経済という意味で務めとしたのだと思うが、ここではそうでなくて、大きい意味の務めであって経綸と訳すべきである。人の住むところという意味で家をオイコスというので、オイクウメネーといえば人の住むという意味から世界とか天下とかの意味になる。それでオイコノミヤも一家の経済の務めから、一国の経済、全世界の経

済という意味にまでなる。大きな政策、大きな経綸という意味になるのである。

3　すなわち、すでに簡単に書きおくったように、私は啓示によって奥義を知らされたのである。

すでに簡単に書きおくったようにと訳すと前に短い手紙を書いたことになるが、必ずしもそうではなく、原文は単に書いたとあるだけである。それである学者は 1 ～ 2 章で述べていることを指すといっている。しかし今は伝わっていない簡単な手紙を書いたのかも知れない。言葉の上ではどちらともいえないが、どちらでも大した問題ではない。

4　あなたがたはそれを読めばキリストの奥義を私がどう理解しているかがわかる。

キリストの奥義とは、ここでは 6 節で述べている如く異邦人もユダヤ人と同じく救われるということである。そのことを唱えたから、パウロはユダヤ人から憎まれた。ユダヤ人から殺されそうになった。ユダヤ人は自分たちは神に選ばれた民である。故に救われるのである。それをパウロは異邦人でも信仰だけで救われるといっている。ユダヤ人の伝統を無視したので国粋的[34]ユダヤ人から憎まれた。ユダヤ人が、4,000 年もの昔に創造主なる唯一の神を知ったということは実に偉いことである。またそれからのユダヤ人の歴史も偉いものである。しかし救いはユダヤ人だけのものではない。パウロはそのことを論じて唯血統によるユダヤ人がユダヤ人でなく、アブラハムの信仰に従う者が救われるのであるといっている。（ロマ書 4 章 16 節、9 章 6 節～ 8 節参照）

ユダヤ人だけが救われると思ったのはユダヤ人だけの欠点ではなく、人間というものは兎角自分をよいとし、正しいと思いたがる傾向を持っている。それが罪の根源であるといっていいのである。外の人は間違っている、自分は正しいと思う事が人を神から遠ざける。罪の自覚がなければ信仰はわからない。神を知る事も出来ない。日本人も日本人が一番偉いと考えて、八紘一宇[35]等といって世界征服をしようと考えた。ユダヤ人を笑う事は出来ない。しかしユダヤ人の誤りは誤りである。創造主なる神を知ったことは偉いことであるが、ユダヤ人だけが救われるのだと考えてしまった時にほんとの信仰を捨てているのである。他国人を異邦人といって蔑視し、食事も共にしなくなった。せっかく、万物の創造主なる神を知ったのに、神をユダヤ人の民族神にしてしまったのである。それをパウロは、神は宇宙万物の創造主であるから万国民の神である。異邦人をもユダヤ人と同じに救い給う、そこには何らの差別はないといって、異邦人伝道をなしたのである。それでユダヤ人に憎まれたのである。

5　この奥義は、いまは御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに啓示されているが、前の時代には人の子らに対してそのように知らされてはいなかったのである。

前の時代とあるが、原語は他の時代というのであって、後の時代にもこの奥義を啓示されないで間違った考えを持つ人々が出るであろう。大部分のユダヤ人は現にこの奥義を知らないでパウロを殺そうとする。

6　それは異邦人が福音により、キリスト・イエスにあって、私たちと共に神の国を嗣ぐ者となり、共に一つのからだとなり共に約束にあずかる者となることである。

異邦人もユダヤ人と同じ信仰によって神の国を嗣ぐ者となり一体となるのである。聖書で教会と訳している言葉はエクレシアであって、信者の集合をいう。信ずる者が一体となっていることを意味する。

7　私は神の力が私に働いて、自分に与えられた神の恵みの賜物により福音の僕とされたのである。

福音というものはこういうものである。誰でも信仰だけによって救われるということである。福音の僕とあるが、これは奉仕者、デヤコノスという意味で、普通に僕と訳されている言葉とは違う。福音の奉仕者という意味である。パウロはイエス・キリストの僕とロマ書の初め等にいっているが、普通僕と訳されているがこれは奴隷と訳すべきであって、すべてを神に捧げてしまっていて、神様にすっかりしばられている、奴隷が主人にしばられている以上に神に、イエス・キリストにしばられているものである。

8　すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者である私にこの恵みが与えられたが、それはキリストの無尽蔵の富を異邦人に述べ伝え

これはほんとに偉い恵みで、こういうことをさせて戴くというのは最も大きな恵みであるが、それを受ける私は最も小さい者であるといっている。パウロはコリント前書 15 章で復活を論じているときに、最も小さい私にもキリストが現れてくださったといっているが、それよりももっと強調して最も小さい者といっていて、その小さい者にこんな大きな恵みが与えられているが、それはキリストの無尽蔵の富を異邦人

に述べ伝えるためである。異邦人も最大の恩恵を受けることが出来るのである。

9　更にまた、万物の創り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務めがどんなものであるかを明らかに示すためである

キリストが信仰によって与えて下さるものは無限大の富である。その富をユダヤ人だけでなく異邦人にも下さる。ユダヤ人でも信仰がなければ与えられないし、信仰さえあれば誰にでも与えられる。これが世に隠されていた奥義であり、これにあずかる務めがどんなに偉いものであるか明らかにする為にパウロにこの恵みが与えられたのである。ここの務めも経綸である。奥義にあずかる務めではなく、奥義の大経綸である。

10　それは今、天上にあるもろもろの支配や権威が教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためであって、

支配とか権威とかいうのは天使の階級であって、パウロの書いたものにはよく出ている。天使たちもキリスト信徒の働き、特に万民が救われて、完成した宇宙を構成するそのすばらしさを知るようになる。そのすばらしさは神の英知から生まれるのであるから多種多様な知恵といっている。多種多様でもよいが、もっと原語の意味をよく表すには多種多彩といったらよいと思う。ただ多様というのではなく、立派であって色とりどりの美しさを表した言葉である。

11　私たちの主キリスト・イエスにあって実現された神の永遠の目的にそうものである。

異邦人が救われるということは神の永遠の目的にそうものである。神は万人を救い給うて宇宙を完成し給う。どんなつまらないと思われる人であっても、その人が欠けると宇宙は不完全になるというものらしい[36]。他の人で代用することの出来ないものだから無限大の価値をもっているのである。キリストがいった如く全世界ともかけがえのない値打ちをもっている。こう考えてくると、どうしても万人救済ということは否定出来ないものである。万人救済論の根拠は二つある。第一は自分が罪人の頭であるから、もし救いに漏れる者があるとすれば、それは自分である。自分が救われるなら万人が救われるはずである。第二は一人でも救われない者があるならば神の愛が不完全であることになる。神の愛が完全ならば万人が救われるはずである。この二つの根拠からして、万人救済ということは否定出来ない。勿論聖書は信仰がなければ

救われないと教えている。これとどう調和するかということは不完全な人間の知恵ではわからないが、神の英知においては美事に調和していると思われる。神の義と愛とは矛盾するように見える。人を罪の故に滅ぼせば、義は成りたつが愛が成りたたない。人の罪を見逃せば愛は成り立つが義は成り立たない。それを人間が想像もしなかった方法で、ご自身を犠牲にして人を救うという途をとられた為に、神の愛と義が調和した。キリストの十字架によって神の愛と義が共に全うされたのである。その如く一見矛盾する如く見える、万人救済と信仰がなければ救われないということと調和しているのであろう。万人救済と信仰によって救われるということと共に真理である。万人救済によって宇宙が完成するのである。異邦人伝道は宇宙完成のためである。獄につながれるような人の信仰なんて駄目ではないかと思うかも知れないが、牢に入れられていることが実は栄光なのである。異邦人も救われるということのために獄につながれているので、宇宙の完成のためである。

13　だから、あなたがたのために私が受けている患難を見て、落胆しないでいて貰いたい。私の患難はあなたがたの光栄なのである。

といって、イエス・キリストのための囚人、それは異邦人であるあなたがたのための囚人である。異邦人も救われて、それによって宇宙が完成するための神の御業である。務めと訳するような小さなことではなくて宇宙完成のための大経綸である。
黙示録21章に完成した宇宙の姿を垣間見ることのできる言がある。

24　諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは自分たちの光栄をそこに携えて来る。
25　都の門は、終日、閉ざされることはない。そこには夜がないからである。
26　人々は諸国民の光栄と誉れとをそこに携えて来る。

国というグループがあり、そのグループの中で一人一人が光栄をもっているという風になるらしい。宇宙がすばらしいということは、それぞれ個性のある、自由意志を持った人間をもって構成されるからである。その自由意志をもって、神に叛いて罪を犯す人間がその自由意志をもって、罪を悔い改めてキリストを信じ、義とせられて天国の民となって、宇宙を飾るわけである。一人一人個性をもっていて他の人をもって代用させることが出来ないものである。その人が欠けると宇宙が完全でなくなるというものである。それ故、人は無限大の価値を持っているのであるが、その無限大の価値を持った人をもって宇宙が構成されるものですばらしいのである。
秋になって全山紅葉して、すばらしい景観を呈するが、もみじの葉が一枚一枚異なった形と色をしていて、そういうものが集まって一本一本の樹になりその樹がまたそれ

ぞれ異なっているから美しいのである。これが皆同じ形、同じ色の紅葉であるなら美しくない。人間が罪は犯さないが自由意志のない、個性のない、人形のようなものであるならば、宇宙はつまらないものになってしまう、それ故、神は人間に自由意志を与え給うた。それ故に人は罪を犯すが、キリストの十字架によって救われる。十字架がなければ、万物は滅びるから十字架を第二の創造ともいう。御子を犠牲にしなければならなくなってもなお自由意志を人間に与え給う程に自由意志、個性は宇宙完成に必要である。諸国民は光栄とほまれとを携えて天国に入るということの中にすばらしい意味が含まれている。このように天国が完成するために異邦人も救われることを伝えることは大事なことであり、そのために囚人となったのであるが、これは宇宙完成の大経綸に参加することである。それだけの確信を持ってパウロは異邦伝道をなしたのである。私共も一人一人はつまらないものであるが、神の宇宙完成の大経綸の一端を担っているという確信を持たなければならない。内村先生が亡くなられる時に、日本国の隆盛と宇宙の完成を祈るといって亡くなられたのであるが、その宇宙の完成とはこういう意味のものである。そしてそのためには異邦人もユダヤ人と同じに救われるという奥義が大事なことである。

「独立時報」第 76 号 1979 年 5 月

10-2-2 第29回卒業式式辞

一年生 26 名、二年生 26 名それぞれ二年、三年に進級致します。三年生 24 名が卒業致します。三年生は実は 26 名でありましたが、二名脱落致しました。私共は罪を罰する資格のないものであります。私共自身が罪人であります。けれども罪を自覚して貰うために退学という処置を取りました。人間にとり最も美しい、貴いことは、詩篇 51 編 17 節にあるように、砕けた悔いた心を持つことであります。この度の失敗により砕けた悔いた心を持つことが出来れば、この失敗が恩恵になります。

他の生徒諸君も自分は失敗しなかったと安心しておれない。同じ罪人であります。罪の卵を内に持っておるのであります。これが罪の形をとって外に現れなかったのは天路歴程を書きましたジョン・バニヤンの言の如く、神の恩恵によるのであります。バニヤンが鎖につながれておる囚人を見て自分があのようにならないのは神の恩恵によるので、自分はその囚人と同じだと申したのであります。他の生徒諸君も同じように考えなければなりません。退学した人と同じであります。砕けた悔いた心を持つことが出来ないなら退学した人よりも不幸であります。退学した二人は今真剣にこの問題と取り組んでいます。

それ故皆砕けた悔いた心を持って神の御前に罪の赦しを願うようにと指導してきました。そういうことが解って来そうになりましたけれど、しかし人間の弱さの故に、どうも時が経つに従って砕けた悔いた心を持とうとしなくなったように見えます。目に見える罪を犯した人も、あれは大した罪ではないのだとか、犯さない人は自分はあんなことをしなかったとか、安易な気持にだんだんなってきたように見えるのです。それではなりません。この学校はキリスト教を基にして立っているのであります。普通の学問も教えますが、一番大切な、学問のうちの学問である信仰を最も強く教えているのであります。この信仰の真理が本当にわかった人が本当の卒業生であります。

法律に従って紙に書いた卒業証書は渡しますが、それはほんとの卒業証書ではありません。先程読んで戴いたコリント後書 3 章の如くに諸君一人一人が卒業証書であります。卒業証書のほんとの言葉は諸君自身の体に書かれているのであります。もう一度読んで見ます。

2 私達の推薦状はあなたがたなのである。それは私達の心に記されていて、すべての人に知られ、かつ読まれている。

この人がどういう人かということはすべて現われていて、他の人が見てよくわかる。

いくら卒業証書を持っていてもそれは卒業ではない。諸君が信仰の真理が解(わか)って、それが全生活に現(あらわ)れ、人に知られるようになる。これが真の卒業であります。

3　そしてあなたがたは自分自身が、私達から送られたキリストの手紙であって、墨(すみ)によらず、生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく、人の心の板に書かれたものであることをはっきり現わしている。

昔(むかし)紙が発達しない時は石にきざんだり、粘土板にほったりしました。人の心の板というのは意訳で肉の心の板であります。命のない石にでなく、生きた人間の心に書かれたものという意味であります。本当の卒業証書は諸君自身であります。諸君が砕(くだ)けた悔(く)いた心を持つことが出来た時に諸君自身が卒業証書となるのであります。

もう既(すで)に持っている方もあるかも知れません。あるいは何年もかかるかも知れません。自分の罪を自覚し、罪を恐れ、神に赦(ゆる)しを願うようになった時が卒業であります。二名の退学者にも何時(いつ)か適当な時に紙に書いた卒業証書が渡されると思いますが、紙の卒業証書は問題でないのであります。

どうか諸君一日も早く本当の卒業証書をもってください。砕(くだ)けた悔(く)いた心を持つということが人間として一番うるわしいこと、神に最も喜ばれることだと解(わか)ってください。それがキリスト教独立学園の卒業証書であり、そのことを真剣に考えるのが独立学園の卒業式であります。

「独立時報」第 77 号 1979 年 11 月

10-2-3　恐竜と人類

一億五千万年前[37]に恐竜と呼ばれる 20m 以上もある巨大な爬虫類が地球上を横行闊歩しておった。体が大きくて力が強いので他の動物を征服してきたのであるが、亡びてしまった。体が大きくて力が強いために亡びたのである。体が大きくて力が強いために食物が多量に要る。そういう動物が多くなって食物がなくなって亡びた[38]。それで動物が地球を征服したその特質の故に亡びるという原則があることがわかる。

人間は体も小さく力も弱いが、知恵を持っている。その知恵で地球を征服したのであるから、人間が単なる動物であるならその知恵で亡びることになる。そしてその兆候は現に強く現れている。お互いを亡ぼす戦争をしようとしている。知恵を用いて原子爆弾を作った。原子力を利用するというのはすばらしい知恵である。ところが人類は今このすばらしい知恵で亡びようとしている。地球を何べんも破壊させる程の原子爆弾をソ連とアメリカで保有している。戦争は勝っても自らを亡ぼす恐ろしいものであるのに戦争の準備をしている。戦争抑止のための軍備だといっているが、軍備が戦争を抑止した例は一度もない。それだのに軍備を一生懸命にしている。今は押しボタンを押せば恐ろしい原子力戦が始まる状態になっている。最高指揮官の命令によってのみ押すことになっているが、最高指揮官だってどんな誤りをするかわからないし、下の係りの人のちょっとした錯覚で原子力戦が始まる可能性もある。ほんとに累卵[39]の危機にあるといってよい状態である。どうしても戦争は止めなければならない。

人間が単なる動物であるなら、滅亡は免れないであろう。動物以上の知恵を持っているといっても、その知恵で自らを亡ぼすようなことをするのであるから、知恵を持っているだけでは安心出来ない。

人間が動物に勝る点は何であるか。それは人間の社会に道徳があるということである。これは遂には信仰に達する。神は人間に道徳を与え給うた。道徳が守られれば人類は亡びないであろう。道徳はすばらしいものである。それ故にカントが「度々且つよく考えれば考えるほど、新にして大いなる驚異と崇敬とをもって心を充たすものが二つある。それは我が上なる星の輝く天空と我が内なる道徳律である」と言ったのである。

世には多くの宗教がある。野蛮人の幼稚な宗教は御利益宗教である。その宗教を信ずれば現世的利益が得られるというのはインチキである。その教団に属すれば悪人でも恩恵を与え、属さないと善人でも恩恵を与えないというのは依怙ひいきの人間以下の神である。それ故宗教は一歩進めば倫理宗教になる。道徳的に正しくなれば救って

くださるというのでなければならない。道徳は信仰の基礎である。仏教も進んだ宗教であるから善根を積んで極楽往生が出来ると教える。旧約の教えも道徳教である。律法即ち道徳を完全に守れば救って下さるというのが神と人との約束である。新約に対して旧約というのである。ユダヤ人は律法を完全に守ることが出来ないことを悟って、救い主が来て人間を助けて下さらなければ救われないといって「救い主、ヘブライ語でメシア、ギリシャ語でクリストス」を待望するというのが旧約聖書を一貫した精神である。

仏教でも道徳を完全に守れないと悟って阿弥陀仏の慈悲にすがって往生するという信仰を持つようになった。これは仏教の最も進歩したもので、日本に法然上人、親鸞上人が出たということは誇りである。もう一歩進めばキリスト教の信仰になる。何が足りないかといえば阿弥陀仏の愛のみで義がないことである。義のない愛は愛ではない。親が子を愛するといって甘やかして意気地なしにしてしまっては愛でないことは明らかである。正しい人に育てるのが真の愛である。人を罪の故に亡ぼしたら愛が成りたたない。罪人をそのまま救ったら神の義が全うされない。人間なら行き詰まるのであるが、全能の神には行き詰まりはない。御自分を犠牲にして人を救うという途をとられた。神が犠牲になって亡びてしまえばすべてが無に帰する。それ故神と全く同じでもあり、別でもあるという存在がなければならない。それで父なる神と子なるキリストと聖霊の三位一体ということがなければならない。人間の親子も不完全ではあるが一体である面があるが、神の場合は完全に一体であり、完全に別の存在でもあり得る。そして子なる神が十字架に架かって死んでその犠牲によって罪より救われるのである。

道徳が守れないから、罪人であることを自覚するからキリストの十字架に依り縋るのである。御自分を犠牲にして救って下さるキリストの大きな愛に包まれている喜びの故に愛が行い易くなる。道徳が守り易くなる。道徳的に正しくなって救われるのではない。救われて正しくなるのである。

滅亡の兆しは戦争準備だけではない。他の面にも多く現れている。激動の時代といわれているが、これはすべて人間がその特徴を捨てて動物に、エコノミックアニマルになり下がっているからである。今こそ人が真の信仰を求めて、道徳的に高くならなければならない時である。国家といえども道徳を守らなければならない。強大な国家が興っては亡びている。これは国家は道徳を破ってもいいと考えているからである。後れている国際間の道徳を高めなければならない。

「独立時報」第 78 号 1980 年 5 月

10-2-4 畏神不恐人

神を畏れて、人を恐れずとは我が学園の拠って立つ基礎である。神を畏れなければ罪の自覚はなく、罪の赦しの十字架の福音は信じられない。また神を畏れなければほんとの学問も出来ない。校舎の正面に神を恐れるは学問の始めと書いてあるとおりである。畏は「かしこみおそれる」という意味で人を恐れるより強い意味であるが、人はともすれば見えない神を軽く考えて畏を恐より軽く考え易いので校舎には恐を使った。神を恐れるということは自己の愚かさを悟らなければほんとの学問が出来ないことをソクラテスが教えてくれたのである。

神を恐れて人を恐れずということはこのように大切なことであり、常にこれを教えているのに、多くの生徒も卒業生も職員もこれを理解してくれないようである。神を恐れないで人を恐れているようである。三年生にプラトンのソクラテスの弁明を教えているが、三年生が感激すると思っているのに感激しない。それは自分の愚かさを認めることが嫌いだかららしい。これは明らかに人を恐れて、神を恐れないからである。私達の心の底までご存知の神を恐れるなら自己を神の前に飾ることは無意味である。自己の愚かさを悟らざるを得ない。人に褒められようとするから愚かさを認めようとしない、自己の罪を認めまいとする。これでは真理は解らない。人間として生きて行くことが出来ない。

卒業生の間に私が忠雄先生の告別式の時に忠雄先生を人間的に褒めなかったことに対して不満があるということを聞いた。人に褒められることを欲するのは神を恐れないで人を恐れるからである。人に褒められることは一寸よい気持になるだけで、却って自分の罪を忘れるようになる心配がある。これは信仰を失うことで恐ろしいことである。褒められるのでなく人を褒めるのだと言う人があるかも知れないが、どちらでも同じことである。人を褒めるのは自分の中に勝手に作ったその人の姿を褒めるので自分を褒めることである。内村先生を大変崇拝していた人が先生に向かって「先生は世界的偉人だからそうしてはいけません」と申し上げたら先生は大変怒って、世界的偉人に指図する人は超世界的偉人だと仰ったことがある。人物崇拝ということはよくない。

人は誰でも神を恐れ人を恐れず、自分が神の御前に罪人であり、しかも罪人のかしらであると悟らなければならない。

「独立時報」第 79 号 1981 年 1 月

10-2-5 憲法を護る戦い

軍事費相当分の税金返還の訴訟を起こして憲法を護る戦いをしている。これは悪魔との戦いである。世界一すばらしい憲法が破られて、軍備が増強されつつある。日本は悪魔に捕らえられて滅亡に向かって突進しているのである。実に危ない時である。世の中の悪いことは皆悪魔が起こすのである。悪魔は人間を互いに憎み合うようにさせる。争いを起こす。そしてついには最大の悪である恐ろしい、悲惨な戦争を起こすようになる。多くの人は悪魔などないと考えているから悪魔に負けるのである。

マルクス主義者は唯物的で、悪魔など存在しないと考えるので悪魔に負けている。資本家に悪いことをさせるのは悪魔であるのに、それに気づかないで、眼前の敵、資本家と戦っていると、ほんとの敵である悪魔は背後から廻ってきて、味方同士憎み合いさせる。リンチを行わせ、内ゲバを起こし血の粛清をさせる。この点においても聖書の教えの方が真理である。エペソ書 6 章 11 節以下に

> 悪魔の策略に対抗して立ち得るために神の武具で身を固めなさい。私達の戦いは血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。それだから悪しき日にあたって、よく抵抗し完全に勝ち抜いて、堅く立ち得るために神の武具を身につけなさい。即ち立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ平和の福音の備えを足にはき、その上に信仰の楯を手に取りなさい。それをもって悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また救いの兜をかぶり、御霊の剣、即ち神の言を取りなさい。

とある。血肉即ち人間と戦うのでなく、悪の霊と戦うのであると教えている。武具は皆防御の武具である。真理によって立てば、神が戦って下さる。唯一の攻撃的武器は御霊の剣、即ち神の言である。神の言とは狭い意味では聖書の言であるが、広い意味では真理である。悪魔との戦いは真理をもって戦えば必ず勝つ。悪魔は嘘とごまかしの権化であるから、真理をもって攻めればひと溜まりもない。トルストイの民話「イワンの馬鹿」の中に出て来る小悪魔どもは聖書の言を聞くと地下に落ちてしまう。嘘とごまかしは真理の光に照らされると、雪が太陽の光に当たると溶けるようにくずれてしまう。法律専門家は皆こういう訴訟は負けるといい、弁護士は引き受けない。法律技術を持って戦えば負けるであろうが、真理をもって戦えば必ず勝つ。悪魔は真理に弱いものである。

悪魔のとりこになって真理がわからなくなるのは欲のためである。政治家でも、学者でも、経済界の人々でも欲のために悪魔に誘惑されて、真理がわからなくなり、自分を亡ぼす戦争をしようとする。イワンの国では悪魔が木の葉を紙幣に変えて誘惑しようとしても、金など欲しがらないので誘惑出来ないでしまう。どんな立派な人でも欲のために悪魔に誘惑される。悪魔は民主主義がよく行われて国がよくなると困るので、国民を欲で誘惑して、買収ということを教えて選挙を腐らせて、悪い人々を当選させて、悪い政治を行わせるようにしている。専制君主時代より悪くなっている。賢い人ほど誤った考えをもつようになるのでこれは悪魔がおってそうさせると考えなければ説明がつかない。

日本は法治国である。国民は法律を守らなければならない。法律の間に矛盾がある場合にはより高い法律に従うことになっている。特に憲法は最高法規であって、第98 条で憲法に反する政治は、一切無効であるといっている。日本国民は国税法に従わなければならないが、憲法に違反する場合には国税法に従わないで憲法に従わなければならない。自衛隊が憲法第 9 条に違反していることは明らかな事実である。政府はこれをごまかして、自衛のための軍備は持ってもいいと言っているのだとして、強大な軍備を持っている。これは明らかな憲法違反で、改めなければならない。なおこれではごまかしきれないと考えてであろう、軍備をすることは統治行為で、憲法を破ってもいいという奇態な論理を作りだして、国を守るに役に立たない軍備を増強している。

十数年前に最高裁長官だった田中耕太郎氏[40]は私の信仰の先輩で共に内村先生に師事して聖書を学んで来たのであったが、間違った考え方をするようになり、信仰から脱落してしまった。そして出世して最高裁長官になったが、二つの悪いことを日本の裁判所に残した。その一つは軍備などの統治行為は最高裁でも裁判出来ないとしたことで、最高裁は憲法の番人といわれてきたことを放棄し、三権分立を破り、悪い行政を容認する悪いことである。第二は裁判官は社会からの雑音を聞いてはいけないと言ったことである。雑音を聞いて判断を誤るような人物は裁判官の資格がない。なおこれが平賀書簡[41]の問題の時に言われたことで世論は聞かないで、上からの命令を聞けということで、裁判官が公正な裁判が出来るように特別に身分を保障されているのを破ることである。田中氏の曲学阿世の学問のために日本国が非常な禍を受けようとしている。

日本の憲法は世界に冠たる偉い憲法である。国際間の道徳はひどく遅れている。これは国家が征服によって出来た時代の名残であって、国家のためには人を殺してもよい、嘘を言ってもよいとされている。しかし国家といえども道徳を破ってはならない。道徳を破る国家は必ず亡びる。国家といえども罪を犯せば神に罰せられる。国家の犯す最大の罪は戦争である。戦争すれば勝っても負けても国は亡びる。戦争によって大

きくなった国は皆(み)な早く亡(ほろ)びている。アッシリアが亡(ほろ)び、バビロンが亡(ほろ)び、ペルシャが亡(ほろ)びた。近代において最も成功した戦争をして独逸(ドイツ)帝国を建てたプロイセンが 47 年後に亡(ほろ)びている。欧米先進国はキリスト教国と称しているくせに戦争を止(や)めようとしない。これは明らかに彼らの信仰が間違っている証拠である。この時に日本が世界に率先(そっせん)して戦争放棄(ほうき)の憲法を持ったことがすばらしいことである。欧米諸国もやがて日本に倣(なら)うであろう。倣(なら)わなければ国は亡(ほろ)びる。このすばらしい憲法を捨てようというのは何たる愚かなことであろう。憲法が大切か国家が大切かという人がある。軍備がないと国が亡(ほろ)びると考えている人がある。しかし憲法を守って軍備を持たない方が国が守られ、安全である。軍備を持って、相手国を刺激すれば相手国も軍備を強化して対抗し、遂(つい)に戦争になり勝っても負けても国は亡(ほろ)びる。何としても憲法は護(まも)らなければならない。

「独立時報」第 80 号 1981 年 6 月

10-2-6　31回卒業式の辞

一年生 26 名、二年生 26 名がそれぞれ二年、三年に進級致します。31 期生 26 名の内 24 名が本日卒業いたします。残り 2 名のうち 1 名は 10 日間の卒業延期という罰を受けて 10 日後に卒業いたします。1 名は病気のため長期欠席いたしましたので留年致します。

日本の教育が年々悪くなり、独立学園の教育も悪くなり、ほんとは卒業させられないくらいであるが形式的には卒業したことにし卒業証書は式後事務室で手渡します。日本では卒業式を卒業証書授与式というので学歴偏重の奇妙な社会になり、教育が崩壊してしまった。卒業式はこれまで習ったことを基にして真の勉強を始める決意をする式である。アメリカでは卒業の日を創めの日という。

日本の教育が悪くなったのは、進学率を高め、またはスポーツで優勝していわゆる名門校になろうとして教育を放棄したからである。独立学園では上級生が下級生に対して威張るとか暴力を振うとかいうことがなかった。それが十年くらい前から始まった。浴槽の中に沈めるとか、雪の上へ窓から落とすということが行われた。これは明らかに体育の悪が侵入して来た結果である。これを押さえるために球技を禁止し、生徒と話し合ってスポーツの害をわかって貰ったが、その害は抜けきらないでおった。

特に 31 期生の父母の中に学園の方針に反対する方が出てきたので、スポーツの害をわかった生徒もわからなくなってきた。それで 3 名が下級生に暴力を振い、たとえ僅かであっても傷つけるという事態が起こった。そして 3 名は全生徒の前で罪を告白し謝罪するということで結末を付けた。

しかし独立学園で教えている一番大切なことは自分の罪を自覚し、砕けた悔いた心を持つことである。今度のこともこれによって砕けた悔いた心を持つことが出来れば却って神の恩恵である。しかしなかなかこれが持てない。謝ればいいではないかとか大きな傷を負わせたのではないとか言って、砕けた悔いた心を持たない。私共は人を罰する資格のないものである。しかし罰せられることによって神の御前に罪を犯したということに気付くなら罰して上げなければならない。これは父兄の理解がなければ出来ない。1 名は自分がしてはならないと思いつつ悪魔の誘惑に負けたことの恐ろしさを深刻に知り、なお一層深刻になるために罰して欲しいと思うようになったので、卒業延期という処置をとることになった。2 名は神を恐れず、父兄も理解してくれないので何の処置もとらない。なお罪を犯すであろうがやむを得ない。

他になお 1 名は公にならなかったが同じ罪を犯しており、悔い改めて罰して欲しいと申し出たが家庭の事情で罰しない事にした。人は誰でも神の御前に最大の罪人

である。よく自分を見詰(みつ)めて自分の罪を知り、罪の赦(ゆる)しの十字架の福音(ふくいん)を信じなければ人間として生きて行けないものである。このことがわかって卒業といえるのである。

「独立時報」第 80 号 1981 年 6 月

10-2-7　卒業生に告ぐ

29 期生 4 名が酒酔い運転をして 2 名が非業の死を遂げた事は大きなショックであった。神に叛くことは恐ろしいことである。罪を犯すことは神に叛くことである。罪を犯すものは必ず罰を受ける。聖書に「生ける神の御手の内に落ちるのは恐ろしいことである」とある。

罰の遅い時と早い時とある。遅くとも必ず来る。遅いと思って油断していると、この度のように思いがけない時に罰が来る。なお小国で酒を飲もうと出かけたのであるが、小国までに危険なところはたくさんある。学園のまんまえで起ったことも偶然ではない。学園で学んだ信仰を捨てたからであることを示すためであろう。

29 期生は卒業の年の 8 月叶水集落センターでクラス会をして酒を飲んで大醜態を演じたとのことである。29 期生の間からこの事故が起ったことは 29 期生に対する警告である。それと共に信仰を捨ててはならないという全卒業生に対する警告である。卒業生諸君は学園を離れて時が経つに従って信仰から遠ざかるのではないかと心配になる。酒を飲み煙草を吸う人が多くなったように見える。成人者の飲酒喫煙は必ずしも罪ではないが罪に繋がる。私達が酒を飲まないのは愛のためである。君は酒を飲むとしくじるから飲むな。私はしくじらないから飲むというのは残酷である。私も我慢するから飲むなといって飲まないのである。故に酒を飲む人は愛がないという最大の罪を犯すのである。喫煙する人は他の事では人に迷惑になることはしない人でも吸い殻を投げ捨てる。品性が下劣になる。信仰を追い求める人はこういうことはしない。

今日は激動の世である。滅亡に瀕している。これらは信仰を捨てたために起ったので信仰に依らなければよくならない。どうか卒業生諸君、信仰を求めてくれ給え。

「独立時報」第 81 号 1981 年

10-2-8 忠雄先生[42]告別式の辞

忠雄先生の告別式[43]の時の私の式辞が余りに厳しすぎるといって、多くの方が批難し華子先生に同情し、それを申し上げて慰めようとしました。しかしこれは却って華子先生を苦しめることになりました。

ある方は、告別式の式辞をテープで繰り返し聞いて、校長先生がほんとに忠雄先生を愛していることがわかったと申して来ました。また、ある方は式辞の原稿を読んでわかったと申しました。それ故多くの方に式辞を読んでいただくことが必要であります。式辞は忠雄先生追悼文集に載せる事になっていて時報には出さない事にしていましたが、文集の発行がなお遅れそうでありますから時報にも載せる事に致しました。どうか繰り返し読んで下さい。そして桝本家の方々を真の愛で愛して下さい。

忠雄先生は人間として大変立派な方であった。それ故多くの人に慕われ、愛されそして褒められた。しかし褒められるということは不幸なことである。ルカ伝 6 章 28 節に「人が皆あなたがたを褒めるときはあなたがたは禍いだ。彼らの祖先も偽預言者たちに対して同じことをしたのである」とある。偽預言者たちも初めから偽預言者ではなかったであろう。多くは立派な預言者だというので王から任命されたのである。それが人々から偉い預言者だともてはやされて偽預言者に堕落したのである。

忠雄先生のようなしっかりした人は褒められても堕落する心配はないと思う方があるかも知れないが、それは人間の本性を知らない考えである。人間というものは罪には負け易いものである。人を殺せとか、盗めとかいう罪には比較的容易に勝てるが自分を正しいとせよとか、賢いと思えとかという罪には負け易いものである。つい自分を偉い者のように思い、自分の考えが正しいと思い込み易くなる。自分の愚かを悟らなければほんとの学問は出来ないと言って、今日のすばらしい学問の基礎を作ったソクラテスも、妻のクサンティッペ[44]が無かったら自分の愚かさを忘れてしまったであろう。クサンティッペは悪妻の代表、ガミガミ怒鳴る夫人の代名詞のように考えられているが、ソクラテスを褒められて堕落することから護ってくれた最もよい妻であった。忠雄先生も自分の愚かさを忘れてしまい、反省して自分の誤りを正していくということをしなくなった。これはまた自分の罪を忘れることで、罪の赦しの十字架の福音から離れることである。これは大変不幸なことである。それでこの数年の間忠雄先生と真剣に話し合ったが、中々理解して貰えなかった。このようなことを葬式の時に言うのは死者に鞭打つことではないかと言うかたがあるかも知れないがそうではない。先程の聖書の言の如く人は皆罪人の首である。私共一人一人が、最大の罪人である。それは明らかにされなければならない。忠雄先生を批難することではな

く、同時に私共自身が忠雄先生以上の罪人であることを自覚することである。これを伏せておいて褒めるのは真の愛ではない。己の愚かさを悟らなければほんとの学問は出来ない。同じように自分の罪を自覚しなければ信仰も持てず、人として生きていくことが出来ない。キリスト・イエスは罪人を救うためにこの世に来て下さったということが、そして十字架にかかって犠牲になって人を救って下さったということが最高の真理である。自分は賢い自分は正しいと思っていてはこの信仰を持つことが出来ない。それ故褒められることは禍いである。

この度の忠雄先生の御病気は、病気は罪の結果であるという事をよく示している。自分は正しいという考えを捨てきれないで、医者の見解に誤っている点があるという理由で、自分の考えは正しくて、医者の考えはすべて誤っているとしたのである。医者も間違うなら、自分も間違うかも知れないからよく検討しなければならないのによく検討しないで丸山ワクチン[45]と光線療法[46]を絶対信頼して、医者にこんなになるまでどうして放って置いたのかと言われるようになってしまった。丸山ワクチンも効果が 100%でないのであるから、効果があったかどうか確かめなければならないのにそれをしないで、癌が悪化するままにしておいた。忠雄先生は丸山ワクチン効果は30%だと言われておったという。知っていて適切な処置をとらなかったことは大きな失敗である。尿閉塞を起こして入院し、私との話し合いはとだえたが、3 月 4 日に尿道を拡げる手術をし、経過良好で、二週間くらいで退院出来るとのことで、退院したらよく話し合える、よくわかって貰えると楽しみにしていた。私は 18 日と 20 日に東京で講演することになっていたので 17 日卒業式をすまして夜行で出京したが、20 日の講演会の時に村岡先生[47]より忠雄先生の容態悪化のことを伺い、予定を縮めて 21 日に横浜と浜松[48]へ行き、浜松で潤君[49]より意識不明になられたと聞き、もう話し合いは出来ないのではないかと心配しつつ 22 日早朝浜松より帰途についた。4 時に米沢に着き、すぐに病院に行き、意識不明で死の苦しみを苦しんでいる忠雄先生に対面した。自分の罪を悟ってイエス様に依り縋りさえすればよいのだと耳もとで叫んだらわかって貰えるかと思い惑っているときに矢内原先生の死の床の烈しい苦悩を思い出した。あの苦悩によって矢内原先生の信仰が飛躍的に深められた。偉い信仰を持っておられた矢内原先生のような方に、あのような苦しみは必要がないように思われるが、それは誤りで、信仰というものは信仰が深くなればなる程信仰の不足を感ずるものである。非常な苦しみの中で罪の自覚が深刻になり、病床で奥様と手を取り合い涙を流されたのである。

私共は忠雄先生を安っぽい愛でしか愛せないで、忠雄先生を褒めたてて、忠雄先生の生涯を縮めるような罪を犯したのであるが、神は忠雄先生を真の無限の愛をもって愛して居られる。忠雄先生の苦しみは最大の恩恵であった。私が拙い言葉で耳もとで叫ぶことなどより遥かに優れたよい方法で神は忠雄先生に福音を教えられたので

ある。非常な苦しみを経験し、十字架上のイエスのお苦しみを知ることが出来て、そのようにイエスを苦しませなければならない自分の罪の恐ろしさを悟り、キリストの十字架に依り縋るより他に途のないことを悟られたに違いない。昨年四月に浜松で入院した時癌だと宣告されても平気でおったというので同室者に尊敬され、自分もキリスト教の信仰を持ちたいと言われた程偉い信仰を持って居られたが、それはキリスト教の信仰ではない。悟りを開いた偉い仏教の高僧のような信仰である。忠雄先生が罪の赦しの十字架の福音を信ずるためにはこの度のお苦しみが必要であり、この病苦が神の恩恵であったのである。このことがわかって、忠雄先生と語ることの出来ないもどかしさも消えて、安心してすべてを御手に委ねることが出来た。矢内原先生は胃癌ということであったが、前立腺肥大もあって、頻尿により膀胱の激痛があったとのことである。これは私の想像にすぎないが前立腺も肥大だけではなく癌であったかも知れない。奇しくも矢内原先生と程度は違うかも知れないが同じ苦しみを経験なさった。名も同じく忠雄である。神は矢内原先生を愛すると同じ愛をもって忠雄先生を愛された。召される前日であったか目をしばらく開けていて、私の方を見てニッコリ笑ったようであった。キリストの愛に包まれている喜びが表れていた。

私は万人救済と言うことを信ずる。その根拠が二つある。第一は私が罪人の首であるから、自分が救われる最後のものだから自分が救われるなら万人が救われるというのである。第二は神の愛が完全であるなら一人でも救いに漏れてはならない。この二つの理由から万人救済と言うことは真理であると確信する。しかし一方では聖書は信仰がなければ救われないと教えている。これはどう調和されるであろうか。神はすべての人が死ぬ時に福音を示して下さるに違いないと信ずる。人が死ぬ時に大きな苦痛を与える。この苦痛が福音をわからせて下さる神の恩恵である。そのために神は万人に死の苦しみを与えて下さるのであるということを忠雄先生の死の苦しみに接して知ることが出来た。

忠雄先生の御生涯は最後に十字架の福音を信ずることが出来たという点で最も成功した、祝福された御生涯であった。このように忠雄先生を愛して下さった神をさんびしつつ忠雄先生を天国に送りたいと思う。

「独立時報」第 82 号 1982 年 6 月

10-2-9　34回創立記念式

独立学園創立の時に文部省の役人は余(あま)り小さくてつぶれるだろうと、財団法人の認可を渋っていたのであるが、その心配に拘(かか)わらず 35 年目を歩み出すことが出来て感謝に堪(た)えない。

少数定員主義をとっているので、従(したが)って授業料収入が少ないので、文部省の役人のみでなく、私共も経済的運営が困難であると感じて、収益事業をすることにした。初め木工事業をやり、後に近くによい石材があることを発見したのでその採石(さいせき)事業をやることにした。明治の初めに士族(しぞく)の商法ということが言われたが、学校の先生の商法であるから、なお悪く、うまく行かなかった。ところが本来の教育をちゃんとやっていると学園は神に護(まも)られていつの間にか経済的にも安定してきた。

今日(こんにち)、日本中の私立学校が困っている。教職員の給料は公立なみに上げなければならない、それに見合うように授業料を上げることが出来ないからである。それで私立学校を政府が助成しなければならないということが論ぜられている。その中にあって独立学園は困らないでいる。授業料を上げる余裕があるが、給料は足(た)りているから上げないでいるのである。

これはすべて世間普通の常識に反することをしているからである。学校を建てるには都会に立てるのが常識であるがこんな山の中に立てた。独立学園のことをよく理解して何かと援助して下さった矢内原(やないはら)先生もヒンターラント（背後地）がないと不安に感じられた。また生徒数を多くして授業料収入を多くするのが私学経営の最良の途(みち)と考えられている時に少数定員を守り通そうと苦労している。また受験準備教育は一切やらない。このように常識に反することをしてきたから、人間的なものに頼らないで神に頼ってきたから、困らないで 34 年続いてきたのである。

山の中にいるから先生方の生活費も安くてすむから授業料を高くしなくともすみ、自然の中に住んでいるから都会で高給を取っている人々より遥(はる)かに豊かな生活をしている。少数定員であるから無理をして信仰のない先生を頼む必要もなく、受験準備教育をしないでほんとの教育をするので断るのに困る程(ほど)志願者が殺到(さっとう)して来る。

人間的なことに頼らずに神に頼ってきたから 34 年続いてきたのである。詩篇 127 編に「ヤーウエ（神）が家を建てられるのでなければ建てるものの勤労はむなしい。ヤーウエが町を守られるのでなければ守る者のさめているのはむなしい」とあるとおりである。殊(こと)に収益事業が失敗しても不思議に支えられて経済的に安定したことは神がこの学園を建てられたのであることの証拠である。

私共はすべて神におまかせして、神に頼って行かなければならない。これが 34 回

創立記念式を迎えるに当たっての私共の決意でなければならない。

なおつづいていうが、一節後半の「ヤーウエが町を守るのでなければ守る者のさめているのはむなしい」とあるのは人の行為の代表として、家を建てることと共に揚げているのであるが、軍備では国を守れないことを教えている。今、米ソ二大強国は愚かにも軍備で国が守れると思って軍拡競争をしている。戦争をすれば勝っても国は亡びる。昔から沢山の国が戦争に勝って、興り、そして亡びている。軍備をすることは自らを亡ぼすことである。

神に護っていただくとは正しい国になることである。世界のためになる善い国になれば決して国はつぶれない。戦争に勝って国が亡びるのは国が悪くなるからである。日本は日露戦争で勝ったが、戦後国民は悪くなった。それを戒める為に戊申詔書(50)というのが出た。それにも拘わらず益々悪くなり、遂に他国を侵略するようになり、大戦争を起こし、遂に今度の敗戦となった。この敗戦は日露戦争で勝った結果である。この大勝利はたった 40 年しか日本の国を護らなかった。

「独立時報」第 83 号 1982 年 12 月

10-2-10 憲法を護る裁判の報告

軍事費分納税拒否の裁判の報告をする。一昨年 8 月提訴、政府は徴税と歳出は関連性がないから、歳出に憲法違反があっても納税拒否は出来ないとして、棄却させようとしたが、関連性がないというのが詭弁であると原告の私が実証して、これに反論出来なくなり、弁論の終結を求めた。

詭弁でないと反論しないで弁論の終結を求めることは、日本の裁判が詭弁によって行われることを求めることで許すべからざることであると言われても反論できないで降参した。それ故自衛隊が憲法違反でないと反論しなければならないのに反論して来ない。一昨年 11 月の名古屋裁判の判決文に自衛隊は違憲ではないという政府の主張があるので原告はそれを反駁(51)した。そしてその中で、軍備ではたとえ自衛の戦争に勝っても敵のミサイルは落ちて来て、国土が荒らされ、国民は多数殺されるから国は護れないと明言してあるのに反論しない。ソ連の脅威を説いて国を護るに軍備が必要だといって憲法を破ってまで軍備をしていて、その軍備で国が護れないなら国民をだますことになると言われても反論しない。

裁判官も反論を命じない。裁判官に反論しなくともよい法律的根拠をたずねると民事訴訟法の全体の調子がそうだからという。全体の調子なら、口頭弁論を重んじていて、口頭弁論は反論し合うことであるから反論しなければならないと思うというとそれは見解の相違だという。見解の相違だと言って討論を打ち切り強行採決をするのは悪しき政治家のすることで、真理を求める学者や裁判官はしてはならないと原告が言っても、無視して 6 月の公判で弁論終結として、10 月 29 日判決となった。

それで裁判官忌避申立(52)を 7 月 14 日にし、9 月 20 日忌避申立は却下されたが、その理由が、記録を精査するも認め難いと言うだけで、精査した経過を述べていないので理由になっていないので仙台高裁へ抗告した。10 月 22 日にこの抗告も棄却されたが、これも理由になっていないので最高裁へ特別抗告をして現在審理中である。従って、判決は忌避確定まで延期されている。政府に反論させない事は司法が行政に屈従した事で三権分立を破り、国を危殆(53)に陥れる売国奴的行為である。

「独立時報」第 83 号 1982 年 12 月

10-2-11　信仰と行為

マタイ伝 18 章 21 節以下に悪しき僕の譬話がある。イエスは度々譬話をなさった。その中でもこれは典型的なたとえ話（パラブル[54]）であって、前置き（プロパラブル[55]）も、結論（エピパラブル）もちゃんと揃っている。この譬話のプロパラブルは譬話をなさった時の様子から始まる。

21　その時ペテロがイエスのもとに来て言った「主よ、兄弟が私に対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか」。

ペトロがこう言ったのは旧約聖書に「目には目を、歯に歯を」とある位で、目をつぶされたら相手の目をつぶす位の仕返しをしてもよいと、ユダヤ人は考えていたから、それに対して 7 たびもゆるすと言えばイエスから褒められるかという考えも少しはあって、7 たびといったのではないかと思う。それに対して

22　イエスは彼に言われた「私は七たびまでとは言わない。七たびを七〇倍するまでにしなさい。」

とイエスは言われた。7 たびを 70 倍すると 490 回までは許すが 491 回から許さなくともいいという意味ではなく、無限に許せとイエスは仰ったのである。この時イエスは創世記 4 章にあるレメクの歌を思い浮かべて仰ったに相違ないということは多くの人が気がついた。レメクというのはカインから六代目アダムから七代目の人である。

創世記 4 章 19 節　レメクはふたりの妻をめとった。ひとりの名はアダといい、ひとりの名はチラといった。

23 節[56]からレメクの歌が始まる。この歌はヘブライ特有の歌で、同じことを少し言葉を変えてくり返して意味を強めるという形をとっている。詩編にもたくさんある。こういう歌の最古のものと言われている。

23　レメクはその妻たちに言った。
　　アダとチラ[57]よ、私の声を聞け、レメクの妻たちよ、私の言葉に耳を傾けよ、

私は受ける傷の為に人を殺し、受ける打傷の為に私は若者を殺す。
24　カインのための復讐が七倍ならば、レメクのための復讐は七十七倍。

これがレメクの歌である。アダムの堕落によって罪が人間に入り込んで、愛がなくなって、憎しみが入ってきた。レメクは無限の復讐をするという歌である。この 77 倍という原語は 70 と 7 という言い方をしているが、この「と」というのは 70 プラス 7 か 70 カケル[58]7 か、どちらにもとれるので旧約聖書をギリシャ語に翻訳した有名な七十人訳と呼ばれているものを訳した人々は 70 カケル 7 と訳した[59]。先程のイエスの言は七十人訳に従って「七たびを七十倍するまでにしなさい」と言われたので、77 倍とは違うがレメクの歌を思い浮かべて仰ったことは確かである。レメクのために罪が人間に入り込んだ。その罪を除くためにイエスはお出でになった。罪が臨んで人間の間に憎しみが生じた。愛のないのが最大の罪である。その罪を除いて、愛をこの世に持ち来たらすためにイエスが地上にお出でになった。そのことを示すためにレメクの歌をお引きになったのである。愛を教えるのがこの譬話の主眼である。譬話の本文が 23 節[60]から始まる。

23　それだから天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。
24　決算が始まると、一万タラントの負債のある者が王の所に連れられてきた。
25　しかし返せなかったので、主人はその人自身とその妻子と持物全部とを売って返すように命じた。

一万タラントを今日の価格にしますと、一番よい換算方法は、1 タラントは 6,000 デナリで、1 デナリは一日の賃金であるから 5,000 円とすると、その 6,000 倍で 3,000 万円で、1 万タラントというと 3,000 億である。これは大変な額で、とても一生働いても返せる金額ではない。

26　そこでこの僕はひれ伏して哀願した。「どうぞお待ち下さい。全部お返しいたしますから」。
27　僕の主人は憐れに思って彼をゆるし、その負債を免じてやった。

一万タラントの負債を全部棒引きにしてくれた。3,000 億円の負債をゆるしてやった、普通には考えられない恩恵である。

28　その僕が出て行くと、100 デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて「借金を返せ」と言った。

29　ここでその仲間はひれ伏し、「どうか待ってくれ、返すから」と言って頼んだ。
30　しかし承知せずに、その人をひっぱっていって、借金を返すまで獄に入れた。

これは誰が考えても不合理な最も悪しきことである。自分はゆるして貰ったのに、人はゆるさない。3,000 億円の借金をゆるして貰っていながら、その 60 万分の 1 の 50 万円の貸金をゆるしてやらないのである。こんな不合理なことが世にあろうか。なお、イエスの譬話が大変よく出来ておって、悪い僕が王にお願いした「どうぞお待ち下さい、全部お返しいたしますから」という言葉と全く同じ言葉で「どうか待ってくれ、返すから」（全部という言葉はないが）と懇願されたのにゆるしてやらなかった、と悪い僕の不合理なことが強く示されている。日本語に敬語というのがあって、目上の人には敬語を使う習慣があって、翻訳する時に王様にいう言葉と仲間に言う言葉と違えて訳してあるが、もとの言葉は全く同じである。同じの方が悪しき僕の悪が強く現れる。自分が願ってゆるされたその同じ言葉で願われたのにゆるさないのである。私は日本語に敬語があるということは悪いことだと思う。同じ言葉でも話す人に尊敬の念があればそれは現れる。尊敬の念がなくて敬語を使うのは慇懃無礼で却って失礼になる。なお日本語の口語が文語より長いというのも日本語の欠陥である。言語[61]というものは母音が中性母音[62]になり、消えてシラブル[63]が減って短くなるのが普通である[64]。そして短くなる方が表現が力強くなる。聖書も各国の口語に訳されて力強くなり、その国の言語をよいものにして来た。ドイツ語もルターが聖書を口語に訳したので立派なドイツ文学を生んだドイツ語になった。聖書を口語に翻訳するとよく親しまれるようになる。ところが日本の口語訳聖書は長ったらしいので日本では却って文語訳の方が親しまれている[65]。この長ったらしいというのも敬語を多く使うと同じくへつらう心から生じたものである。殊に明治になって官尊民卑[66]の風が起こって、人民が役人にへつらうようになったからである。東京の言葉が標準語になったことは不幸である。関西弁が標準語になった方がまだよかったろう。

東北で暮らしていると東北の言葉の方がよいことに気付く。山形の人は東京の人が目下の人に言う「お前」という語を私に対しても使うけれど尊敬の心をもって言うから軽蔑されたとは感じなかった。東北の方言の方が短くて力強くて、標準語より遥かにいい。「わたくしは存じません」などと言うよりは「おらしんね」という方がどの位きれいで力強いか知れない。東北の人が信仰を持ってくれて、聖書を東北の方言で訳してくれたら日本人がもっと聖書を読むようになり、日本語も立派な言語になるであろう。20 年近く前のことであったが上山温泉[67]の在[68]の山元村の中学生が方言で綴った作文の文集「山びこ学校」を出版したらベストセラーになった。

わき道にそれたが、この所を標準語で敬語を使いわけて訳したのでイエスの譬話の妙味[69]が減らされた。悪い僕の不合理さが、充分伝わらなくなったが、こんな

不合理なことをするとは誰が見ても憤慨することである。

31　その人の仲間たちは、この様子を見て非常に心をいため、行ってそのことを残らず主人に話した。

勿論主人は怒って、

32　そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、「悪い僕、私に願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ、
33　私が憐れんでやったように、あの仲間を憐れんでやるべきではなかったか。」

ここでイエスが悪い僕と仰ったのでこの譬話を「悪い僕の譬話」と普通いっている。人間であるなら、自分がこんなに大きな借金をゆるして貰ったなら、自分の貸した少し位の貸しはゆるしてやるのが当然である。この譬話のエピパラブルは35節である。

35　あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、私の天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう。

ゆるさない人を神もゆるさない。兄弟を愛さないなら、神も愛して下さらない。
この譬話の教えていることは、私共は神の前に大きな罪を犯している。どんなに努力しても救われない罪人のかしらである。一生働いても返すことのできない借金をしているのと同じである。それを神はキリストの十字架の犠牲によって値なくして神の恵みにより赦してくださったのである。イエスは仰った。「人がその友のために自分の命をすてること、これより大きな愛はない」と。愛とは自分のことを犠牲にして人のために尽くすことである。イエスはご自分の命をすてて私たちを救って下さった。このイエスの最大の愛に包まれているのであるから、一万タラントの借金をゆるしていただいた以上の愛を受けているのである。
こんな大きな愛を受けている者が少しの愛を行えないわけがない。十字架の福音を信ずる者はイエスの大きな愛に包まれている喜びに溢れて、その万分の一でも人に分けたいと思う。それが罪の赦しの十字架の福音を信ずる者の当然の行いである。愛という実を結ばない信仰は口先だけの信仰でほんとの信仰ではない。大切なことは自分が一万タラントの一生かかっても返せない借金をしていることを悟ることである。
昔から信仰と行為の問題が神学者によって論ぜられてきた。聖書はロマ書 3 章 28 節に

28　人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によるのである。

とあって、ルターがドイツ語に訳す時に原文にないのに信仰のみに依ると「のみ」を加えたので有名なところである。ところがヤコブ書 2 章 14 節以下には次のごとくある。

14　私の兄弟たちよ。ある人が自分に信仰があると称していても、もし行いがなかったら、何の役に立つか、その信仰は彼を救うことが出来るか。
15　ある兄弟または姉妹が裸でいて、その日の食物にもこと欠いている場合、
16　あなたがたのうち誰かが「安らかに行きなさい。暖まって、食べ飽きなさい」というだけで、そのからだに必要なものを何ひとつ与えなかったとしたら、何の役に立つか。
17　信仰もそれと同様に、行いを伴わなければそれだけでは死んだものである。

これは全く矛盾しているように見える。ルターは信仰を重んずる余り、行いを重んずるヤコブ書を藁の書簡だと言った。しかしヤコブは行いだけでよいと言っているのではない。信仰には愛という行いが伴わなければいけないと言っているのである。愛という実を結ばない信仰は信仰ではない。100 デナリをゆるせない人は一万タラントの借金をゆるされたことを信じない人である。パウロは愛という実を結ぶ信仰のみによって救われるのだといい、ヤコブは愛という行為を伴わない信仰は駄目だといっているのである。パウロもヤコブも同じことを教えている。決して矛盾していない。

学者は理論だけで学問が出来ると思って言葉のほんとの意味を汲みとらないで、勝手な議論をするのでこういう誤りを多く犯す。例えば贖罪の信仰はパウロが考えたので、福音書にはないとか、パウロとヨハネとは神学思想がちがうとか、いろいろなことを言うがそれは思想を勝手に解釈して自分の説に都合のよいように並べて、違うといっているのである。

なる程福音書には贖罪のことは「人の子が来たのも仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして自分の命を与えるためである」の他には述べられていないが、イエスの生涯そのものが贖罪のためであることは明らかである。エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ（わが神わが神、どうして私をお見捨てになったのですか）の十字架上の叫びは、たとえ一時であっても人類の罪に対する神の怒りを自身に受けられる苦悩を表している。贖罪はパウロのはじめて考え出した信仰ではない。自分だけが何でも知っていると思っていては学問は出来ない。謙遜にならなければならない。パウロが律法の行いによらずといっているのは、義しくなって

救われるのではなくて、救われて義しくして戴くことを言っているのである。信仰だけで救われると言っているパウロもコリント前書 13 章で、どんな強い信仰があっても愛がなければ無に等しいと言っている。

ヤコブ書は藁の書簡どころか非常に大事な書簡である。ルターも後には藁の書簡と言ったことを取り消している。キリスト教が始まって間もなく異端が出て来た。一番ひどい異端は罪の赦しの福音とは、どんな大きな罪でも皆赦されるから、罪は犯した方がよいというのである。大きな罪を犯した程赦されての感謝が大きいから、罪は犯す程いいというのである。

これは大きな誤りである。罪が赦されるといって、ただ赦されるのではない。キリストの犠牲によって赦されるのである。キリストが私たちの受けるべき罰を受けて十字架で苦しまれて死なれたので、私たちが赦されるのである。私たちの罪がキリストを苦しめている。私たちの罪がキリストの足に釘を打っているのである。私たちを大きな愛で愛しているキリストを私たちの罪が苦しめていると思うと罪を犯せなくなる。泥棒しようと出した手も引込んでしまう。ヤコブ書は罪を犯す方がいいのだという異端から護ってくれたであろう。愛という実を結ぶ信仰でなければいけないと教えているから。

ロマ書とヤコブ書とはよく調和しているし、福音書とも調和している。ヨハネ文書ともよく調和している。聖書全体はよく調和していて、聖書全体が罪の赦しの十字架の福音を教えているのである。ヨハネ文書の内ヨハネ第一書の 4 章 7 節以下を読む。

7　愛する者たちよ。私たちは互いに愛し合おうではないか。愛は神から出たものである。すべて愛する者は神から生まれた者であって神を知っている。
8　愛さない者は神を知らない。神は愛である。

神は愛であるという言葉はここにある。

9　神はその独り子を世に遣わし、彼によって私達を生きるようにして下さった。それによって、私達に対する神の愛が明らかにされたのである。
10　私達が神を愛したのではなく、神が私達を愛して下さって、私達の罪のためにあがないの供え物として御子をお遣わしになった。ここに愛がある。

み子をお遣わしになったというところに神の愛が最もよく現れている。

11　愛する者たちよ、神がこのように私たちを愛して下さったのであるから、私たちも互いに愛し合うべきである。

悪い僕の譬話と同じく、愛という実を結ばない信仰はほんとの信仰ではないと言っておる。

12　神を見た者はまだひとりもいない。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにいまし、神の愛が私たちのうちに全うされるのである。

私たちが互いに愛し合うことによって、神の在すことを実証することが出来る。

このようにヨハネ文書も悪い僕の譬話と同じことを教えていて、聖書全体が調和していて、創世記のはじめからヨハネ黙示録に至るまで一つのことを、即ち罪の赦しの十字架の福音を教えているものである。ある所では信仰が大事だと教え、ある所では行為が大事だと言っていて矛盾しているようであるが、信仰という語、行為という語のほんとの意味を理解すれば、少しも矛盾しないということを悪い僕の譬話が教えてくれている。

「独立時報」第 84 号 1983 年 4 月

10-2-12　33回卒業式の辞

今日、教育が崩壊して恐ろしい世の中になっている。この直接の原因は受験準備教育にある。学問に従って問題を解くと時間がかかり、問題を全部解く事が出来ない。考えないで答えを丸暗記している人が全部の答えを書いて合格するということになる。それ故考える力を養うに最もよい数学でさえも暗記物といわれている。考える力のない人ばかりになる。暴走族のようになって、考えなしの事をする。それでこのような恐ろしい世の中になったのである。

なぜほんとの教育を放棄し、学問を教える事を止めたかというと、日本人が金銭の奴隷となって、金儲け主義になったからである。教育を受ける者も有名大学に入り有名会社に就職したいから受けるのだし、教える方も出世したいから受験準備教育をやり、進学率を高めて名門校になろうとする。生徒の意向など無視して進学率をよくするように進学先を割り当てる。それで生徒や父兄から怨まれている。大体教育委員を任命制にし、勤務評定をするようになって悪くなった。教師が受験準備教育に専念して自分の成績を上げるようになった。このように教育を悪くしたのは自由民主党とこれに追従した文部省である。その責任は徹底的に問われなければならない。

なぜこんなに金銭の奴隷となって、金儲け主義になったかというと、これは信仰を捨てたからである。今日は自由主義経済終焉の時である。自由主義経済はアダム・スミスから始まった。アダム・スミスは人間の経済活動は各人の儲けようとする考えに任せてよいと言った。アダム・スミスは信仰を持っていたので、後は神様がよいようにして下さるとしていた。マルクス主義の経済学によると資本主義が発達すると、行き詰まってひっくりかえり共産主義の社会になるとのことである。ところが資本主義の国は益々発展してロシアとか中国とか資本主義の発達しない国が共産国になった。これは明らかにマルクス主義の誤りである。何故間違ったかというとマルクスは信仰を無視したからである。欧州や米国の資本家がお金を儲けてもこれは神から預かったものだからといって、大学に寄付するとか、病院や福祉施設を建てるとか、よい事に使ったので資本主義が倒れなかった。ところが今日は資本家が信仰を捨てた。聖書の教えに反することをするようになった。聖書は「各々自分のことばかり考えないで、他の人のことも考えなさい」と教えているのに皆自分さえ儲ければよい、他の人のことなど考えてはいられないというようになったので、今日の経済的困難が生じたので、自由主義経済終焉の時である。皆が金儲け主義になったので経済的危機になり、また教育も学問も駄目になった。今日ほど人々が信仰に帰らなければならない時はない。

独立学園では信仰に基(もと)づくほんとの教育をし学問を教えてきた。学問をするのは学問を利用して金儲(かねもう)けをするためでなく、真理を愛し、嘘(うそ)やごまかしの嫌な、真実な人間になるためである。すべての学問は人を信実(しんじつ)にしてくれるが、特に信仰の真理が大切である。先ほど読んでいただいた聖書の言葉にあるとおり種はまかれたのである。諸君がそれをよく育てなかった為にほんとの勉強が出来なかった。これからよく育てるように努力して欲しい。そうしてくれればいま学問が充分(じゅうぶん)でなく、教育が充分(じゅうぶん)でなくとも安心して諸君を卒業させることが出来る。

アメリカでは卒業式の日を Commencement day と呼ぶ。始めの日の意味である。卒業というのはいままで受けた教育をもとにしてほんとの勉強を始めることであるからである。日本では卒業すると勉強しなくなる。これは日本の教育が間違っていた証拠である。法律で定めてあるのか、どこの学校でも卒業証書授与式と言っている。それで公立学校がまっさきに卒業証書販売株式会社になって、金儲(かねもう)けのための教育をするようになった。ほんとの卒業証書は紙切れではなく卒業生自身である。コリント後(こう)書(しょ) 3 章 3 節に「あなたがたは自分自身が私たちから送られたキリストの手紙であって、墨(すみ)によらず生ける神の霊によって書かれたものである」とある。卒業式は卒業証書授与式であってはならない。これからほんとの勉強を始める決意を新たにする時でなければならない。

「独立時報」第 85 号 1984 年 1 月

10-2-13　神に依り頼む

――鈴木弼美・ひろ伝道教育50年記念講演――

私共の小さき仕事に対して、かくも大勢の方々がお集まり下さって、祝って下さることを本当にありがたく感謝いたします。はじめにローマ書 3 章 22 節を読みます。

> それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。そこにはなんらの差別もない。

これはキリスト教の真髄は罪の赦しの十字架の福音であるという事を述べている、そしてそれを信じるのが唯一の条件で、他には何らの差別はない、人は皆平等であるということを教えている。またキリストは、「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、何の得になろうか。」と、言っておられる。人は誰でもこの無限大の価値を持っておるので、皆平等である。偉い人とか、つまらない人間とかいうのは、みんな人間的考えであって、神より見れば人はすべて平等である。リンカーンが「凡人が世界で最善である。だから神が凡人をこんなにたくさん造られた」と言っておる。これは、リンカーンでなければ言えない実に偉い言葉である[70]。神は全能であるから天才や偉人がお好きならば、人間を全部、天才や偉人に造ることもおできになるのである。天才や偉人はお嫌いだから少ししかお造りにならないで、凡人がお好きだからこんなにたくさん凡人をお造りになったのだ、と言うのである。私たち凡人の方が神の会心の作である。天才や偉人という人間的価値は、人間であるがゆえに誰でもが持っている無限大の価値に較べれば無に等しいのである。それ故人間は真に平等である。聖書が何らの差別がないと言っている通りである。宇宙の創造者なる神の子が御自分を犠牲にしても救うに値する、そういう価値を人間が人間であるならばすべての人が持っているのである。それゆえに人は誰でも神に依り頼めば、立派に信仰を全うすることが出来る。法王とか大司教とか、学者とか、そういうものはいらない。牧師、伝道師もいらない。神に直接導かれて信仰を持つことができる。山の中の人でも神に頼って導かれて行けば信仰を全うすることが出来る。このことを内村先生は教えて下さった。このことを実証したくて山の中に学校を建てたのである。

また信仰は形式的に流れやすいものである。信仰を失った形式だけの教会は中世のキリスト教のように、害を及ぼす。それで教会を信仰の母体とせずに学校を母体とすることは意義のあることであると考えて学校を建てることにしたのである。

1932 年（昭和 7 年）に大学を辞め、準備をし、その年の 12 月から 1 月にかけて初

めて雪の小国に来た。小国の他の所は青年や子供たちと友人になったが、叶水では渡部弥一郎氏など成人した人と知り合いになったので弥一郎氏のところにしばらくおって叶水に土地を買い、建物を建てることを始めた。村に電灯がないので、小型の水力発電の設備をしなければならず、そのために仙台に行ったり、また小国と東京の間を往き来していて、1933 年（昭和 8 年）の間に準備をして、12 月に叶水に移住した。1934 年（昭和 9 年）に家族を呼び寄せ、1934 年（昭和 9 年）9 月に基督教独立学校として発足した。

しかし、50 年前には山の中の人は、義務教育を終わって、それ以上の教育を受けようとしない。それで半日働いて半日勉強するという学校をつくることにした。そのころある著名な社会主義者が、ヨーロッパ旅行をして、英国でジェームス・ワットの墓の前に立って、人類に福祉をもたらすべきワットの発明した蒸気機関が、産業革命を起こし、人類にわざわいをもたらしたことを思って深い感慨にふけったと書いたのを読んだことがある。これは自然科学が悪いのではなく、経済機構が悪いのである。機械設備のための投下資本[71]の利潤を見なければ半日働いて一日分の給料をやれるから、一生勉強できるわけである。それで半日働いて半日勉強する学校をつくった。事業として木工を選んだ。良いものをつくることが難しく、よい売り先を見つけることが難しく、ちゃんと代金を取り立てることが難しい。それで東京の友人が心配してくれて、藤倉電線会社[72]に、細い電線を巻く枠をつくって出すことにした。良い物さえ作れば売り先の心配もないし、代金の取れない心配もなくなる。それで試作をしてこれで良いということになった時に、日中戦争[73]が始まって私は 1937 年（昭和 12 年）9 月に応召した。従って学校を休校しなければならなくなった。家内が留守を守ってくれたので、福音の旗を降ろさないですんだ。また渡部弥一郎氏が信仰を確立してくれたので、応召は悪いことばかりではなかった。

1943 年（昭和 18 年）9 月に召集解除になり、一休みしている時に 1944 年（昭和 19 年）6 月に渡部弥一郎氏と共に、特高警察員に連行されて、天皇を神としないことと、平和主義のために八ヶ月拘置された。国王を神として拝むということは、国が悪くなって乱れてくるとおこることで、歴史上、たびたび起こっておる。日本では明治の初めにはそんなに悪くなかった。明治天皇が軍人勅諭の中で「朕が国家を保護して上天の恵に応じ祖宗の恩に報いまいらする事を得るも得ざるも云々」と言っておられる。祖宗即ち神代の神以上の上天の存在を信じて居られた。内村先生の第一高等学校不敬事件以来、井上哲次郎[74]、加藤弘之[75]等の曲学阿世の学者が「キリスト教徒は天皇の上位に天父とか唯一真神と言う一種の化け物を置いて天皇を神としないからいけない」と言い始めて、これが昭和の初め頃に国体明徴運動となって日本中に拡がり、侵略戦争を始めるようになって満州事変、日中戦争[76]となり、遂に米国との戦争が始まった。初戦の大勝に酔って、日本中が勝った、勝ったと有頂天になってい

た時に、私はこの戦争は日本が悪いから負ける、日本は亡びると言っておった。この国難は神でない天皇を神として拝ませたためである。応召中始めの四年は航空本部監督官という日本の航空工業の指導監督の仕事を、後の二年は航空工廠技能者養成所という工業専門学校の教官をさせられておって、いろいろな事を言っておっても別に問題にされなかった。鈴木は非戦思想を持っているから困難な戦場へやって戦死させたらいいと考えた者もあったということを戦争が終わってから聞いたが何事もなかった。軍の中にいる間は何も差し支えなかったが召集解除になって家に帰ると、特高警察で帰還軍人の動静調べをしておって、検事の令状で渡部弥一郎氏と共に山形警察署監房に留置された。取り調べて見て罰することも出来ず、釈放することは面目上出来ないと困って、12 月に検事が転任になり、1945 年（昭和 20 年）2 月に釈放になった。

釈放されて 6 ヶ月たって戦争に負けて、無条件降伏をした。私共日本国民は敗戦で絶望のどん底に陥ったが平和憲法を与えられて敗戦の哀れな国から平和国家として再生し、世界をリードし戦勝国に勝つことが出来るという希望を持った。平和憲法が与えられたということは非常な光栄である。当時の私たちは非常に喜んだ。敗戦の打撃で、みなが押しつぶされておる中から、本当の希望を持つようになった。今日悪い政治家が平和憲法を改悪しようとしておるけれどもそれは再び戦争の苦しみを招くことである。勝っても同じである。政治家にだまされてはならない。

戦前の若い友人は病死したり、戦死したりしたので、学校も新規まき直ししなければならなくなった。折から新しい高等学校の制度が行われるようになったので、1948 年（昭和 23 年）新制高校の発足と同時に、基督教独立学園高等学校として再出発することになった。高等学校の認可は県でするのであるが、高等学校以上の学校は個人ではいけない、法人がしなければいけないということになっておって、教育関係の財団法人の認可は文部省でするのであるが、文部省は余り小さいという理由で、認可をしぶっていた。教育は少数ほどよいではないかと言っても、常識的に限度があるとかなんとか言って、認可しない。一年近くたっても認可しないので、文部省でできない教育をしてやろうとしているのだから、文部省に頭を下げる必要はないから、大学へ行きたい人は検定試験を受ければよいから、といって廃校届けを出した。当時の村山道雄知事が、その廃校届けを握りつぶして、文部省と交渉してくれて、高等学校として続けてゆくことになった。

少数定員主義をとっているので、授業料収入が少ないので、文部省の役人のみでなく私どもも経済的運営が困難であると感じて、収益事業をすることにした。はじめは戦前やっていた木工事業を、後には近くに良い石材があることを発見したので、その採石事業をやることにした。明治の初めに士族の商法ということが言われたが、教師の商法であるから、なお下手で、うまくいかなかった。収益事業は学園を支えるよう

にはならなかった。ところが本来の教育をちゃんとやっていると、学園は神に護(まも)られていつの間にか経済的にも安定してきた。今日(こんにち)、日本中の私立学校が困っておる。教職員の給料は公立がベースアップで上がっていくので、それに従(したが)って上げなければならない。しかしそれに見合うように授業料を上げることができない。それで有力な私立学校ほど困ってきた。それで私立学校助成ということがやかましく言われるようになったのである。その中にあって独立学園は困らないでいる。授業料を上げる余裕はあるけれども、給料が足(た)りているから上げないでいるという状態である。これは全て世間の常識に反することをしておるからである。学校を建てるには都会に建てるのが常識であるがこんな山の中に建てた。また、生徒数を多くして授業料収入を多くするのが私立学校経営の最良の道と考えられておる時に、少数定員を守ろうと苦労しておる。また受験準備教育をして、進学率を高めて、いわゆる名門校となろうとするのが普通であるが、ここでは受験準備教育は一切やらない。このように常識に反することをしてきたから、人間的なものに頼らないで神に頼って来たから困らないのである。山の中にいるから、先生方の生活費も無駄(むだ)がなくて安くすむから、授業料を高くしないでいられる。先生方も自然の中で生活しておるから、都会で高給を取っている人よりも、遥(はる)かに豊かな生活をしてくることができた。

今日(こんにち)、日本の教育が乱れて日本中の人々が困っておるが、これは受験準備教育のために、本当の教育を放棄(ほうき)したからである。学問ができると試験で良い点が取れないので、学問のできないように、考えないように、考える力がない人になるように、そういう教育をしてきた。考える力を養(やしな)うのに一番良い数学でさえも、今日(こんにち)は暗記物(もの)だということになっておる。本当の教育が行われない。それで世の中がこんなにひどくなった。こんな山の中の名もない学校にことわるのに困るほど志願者が殺到(さっとう)するというのが、他で本当の教育をしていない証拠である。人間的なものに頼らず、神に頼ってきたから今日(こんにち)までやってくることができたのである。日本中の私立学校が困っているのに、困らないで、神に守られて安心してほんとの教育をやって来た。これは人間的なものに頼らず、神に頼ってきたからである。まことに先ほど読んでいただいた詩編 127 編の

> 主(しゅ)が家を建てられるのでなければ、
> 建てるものの勤労はむなしい。
> 主(しゅ)が町を守られるのでなければ、
> 守る者のさめているのはむなしい。

という言葉のとおりである。神に全てお任(まか)せしてきたから、今日まで続くことができ、本当の教育を守ってくることができたのである。神に頼ることが一番確かであって、

普通には確かと思われる人間的なものに頼ることが一番愚かである。50 年こうして神に頼って、神に守られてくることが出来て、ただ感謝あふるるのみである。

「独立時報」第 86 号 1984 年

10-2-14　34回卒業式の辞

教育の荒廃が年々進み、独立学園の教育もその影響を受けて、ほんとの教育が行われなくなってしまった。大部分は卒業させられない状態である。しかし、全員卒業ということにした。これは不十分であってもここで学んだことを基にしてこれからほんとの勉強をしていくというならば卒業の意味があるから、卒業させることにした。我が国の荒廃した教育では卒業とは業を終えること、勉強をやめることだと考えられておる。日本の学校を卒業した人は、卒業と同時に勉強をやめてしまう。学力を無視した学歴偏重の日本の社会においては、卒業式のことを卒業証書授与式という。教育というのは、卒業証書を授与するためというふうになってしまって、これが今日の教育の荒廃の原因の一つとなった。

卒業生諸君がそういう日本の悪い風潮に毒されないで、これまでの勉強がたとえ不十分であっても、ここで学んだものを基にして、これからほんとの勉強をしていくという決意を新たにするならば、卒業する意味は十分にある。それで全員卒業ということにした。

現代人は楽で給料の多い職業がいいと考えておるけれど、それは間違いであって、ほんとの勉強のできる職業がいい職業である。卒業生諸君がそれぞれ進路を定めたけれども、果たして、この決意を持って進路を決められたかどうか疑問である。しかし、これまで好い加減な気持で決めたとしてもこれからは、そうではなく、与えられた職業が金を儲けるための職業でなくてこれがほんとの勉強が出来る職業であるように諸君は一生懸命に勉めなければならない。

学園で学ぶ真理のうちで、一番大切なものは信仰の真理である。殊に、今日は信仰がなければ生きていけない時代になりつつある。世界中の最も良識のあると思われる人々が自らを亡ぼすことを一生懸命にやっている。国を守るに役立たない、自らを亡ぼすものである軍備を拡張しようとして一生懸命になっている。いま世界には広島に落ちた原爆の、ある人は 100 万倍、ある人は 400 万倍と言っておるけれどもそれだけの原子爆弾が造られていて、いつなんどきでも発射できるようになっている。ほんとに今の世界は危ない世界である。危ないことを「累卵の危うきにある」と昔の中国の人は言った。「累卵」というのは、卵を積んで重ねた時のことで、ちょっとしたことで崩れる。いま世界は累卵の危うきの状態にあるのである。これを防ぐには信仰がなければ駄目である。

今日、経済状態が険悪になって困っておる。これは決して良くならない。大経済学者の学説によっても大政治家の政策によっても決して良くならない。これは信仰に帰

らなければ救われない。今はそういう時である。今こそほんとに皆、信仰を一生懸命に学んで、信仰の真理に従って生きなければならない時である。それ故、真剣に諸君は信仰の真理を求めなければならない。特に卒業生諸君は一生懸命に信仰の真理を求めなければ、卒業の資格が無いどころではない、ほんとに亡びるのである。是非信仰の勉強を一生懸命にしてほしい。

初めに読んだ聖書のことばは、非常に偉いことばである。パウロが食べ物のことについていろいろ教えておって、脱線してこのことばを言ったのであるが、これは非常に偉いことばである。

> すなわち、わたしたちのうち、だれひとり自分のために死ぬ者はいない。わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。
> （ロマ書 14 章 7 節、8 節）

これはキリスト信徒の麗しい、尊い生涯を述べたものである。キリスト信徒はこのことを自覚して、そして苦難の中にあっても喜びに溢れて生きているのであるが、これは信仰のない人にも当てはまることである。この宇宙万物は神が創造し給うて、神がこれを御心のままに支配していた給うのである。それ故、信仰のない人でも、いくら自分のために生きようとしても、全ては神の御心のままになるのであるから、自分勝手な生き方は出来ない。ただ、「だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない。わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。」と、そのことを自覚して生きていくのと、それを自覚しないで知らないで、そういうふうに生きていくのとの違いである。そのことを自覚しないで苦しみ悩み生きていくのは、ほんとに哀れな状態である。このことを自覚して、苦難の中にあっても、なお喜んで生きていくことの出来るのは、それはキリスト信徒の特権である。

このことを悟ることが出来れば、人生は真に成功と言える。このことが分からなければ、いくら出世しても、巨万の富を積んでも、失敗の生涯である。豊臣秀吉は非常な才能をもっておった人間であったから、人間として、最大限の出世をした。けれどもこのことが分からなかったために自分の生涯は詰まらない生涯だと言って死んでいった。

合同国語の時に教えた

> 世の中に　われにも似たる人もがな　生きて甲斐なきことを語らん

という歌を作った。いくら出世しても詰まらんと言っても誰も相手になってくれない。けれども、秀吉のように百姓から関白太政大臣になったような人があれば、その人とはいくら出世しても詰まらんと語り合って慰め合うことができるから、いいなあという歌である。秀吉は利口だから、いくら出世しても詰まらんということが分かったが、多くの人は秀吉程利口でないから出世しても詰まらんということが分からないで苦しんで死んでいくのである。

神は全宇宙を創造なさって、これを御心のままに支配して居給い、しかもその神が人格的な存在であって、そして私達を愛しておって下さるということを知ることは、どんなに偉いことかよく考えれば分かることである。是非、私達はキリスト教の信仰をもたなくてはならない。もたなくては生きていけないのである。そのことを考えて、今まで不勉強だったことを後悔して、これからほんとの勉強をしてほしい。殊にほんとの信仰の勉強をしてほしい。そうしてくれるならば安心して諸君にここを卒業して貰えるのである。

「独立時報」第 87 号 1984 年 12 月

10-2-15 第6回叶水夏の学校開校式講話

今年も叶水夏の学校を開校することができて喜ばしく思う。今は最も信仰を求めなければならない時である。信仰のない故にこの世界は滅亡に瀕しつつあるといってよいと思う。

今から約一億年前には恐竜という 20m から 30m もある大きな爬虫類がこの地球上に住んでおった。身体が大きく力が強いというために世界を征服してこの地球で我が物顔に振る舞っておった。それがいつの間にか絶滅してしまったのである。どうして絶滅したか分からない。いろいろ学説があるけれども、どうも本当に滅びてしまった理由をうまく言っていない。結局身体が大きくて力が強いために世界を征服したのだが、その特徴の故に滅びたのだろうと言うことが言われている。身体が大きくて力が強いから食べ物も沢山いる。そういうのが沢山に増えてしまったのだから、食べ物が足りなくなって滅びてしまったのだろうと言われておる。ですから生物がこの地球上で覇をとなえるようになったその同じ特徴の故に滅びる、というのが生物学上の原則のようである。

人間は身体が小さく、力も弱いけれども知恵を持っている。知恵を持っているが故に他の生物を圧倒して、今日は人間の時代である。人間が我が物顔に振る舞っているという状態である。もし人間が単なる動物であるなら、この知恵のために滅びるということになる。そして今人間は、知恵のために滅びそうになっているのである。

原子力利用は最大の人間の知恵である。原子力を利用するようになって、原子爆弾を作った。ソ連とアメリカでは広島に落とした原爆の百万倍から四百万倍の原子爆弾がいつでも発射できるように備え付けられていると言われている。原子爆弾をこしらえてそれで戦争すれば勝っても負けても、敵も味方もみんな滅びてしまう。それだのにそれに気がつかないで一生懸命相手より強くなろうとして、核軍備拡張競争をしておる。核戦争が始まると、敵も味方も勝った方も負けた方もみんな滅びてしまうということがわかっておるのに、それでもなお核軍備を拡張しようと夢中になっておる。人間の愚かさは計り知れないと言わざるを得ない。賢いと思う人ほど愚かになってしまっている。アメリカの大統領になるのは最も賢い人である。その最も賢い人が最も愚かなことをしている。今、アメリカでは核軍備に予算を多くとられるので大変困っておる。道路とかダムとかそういった物は壊れそうになってもそのままにしておいて核軍備をしている。第一にしなければならないことをさしおいて、自分たちを滅ぼすことが確かである核軍備を拡張しようとしている。本当に人間の愚かさは計り知れない。賢いと思われている人が愚かな事をする。ですから先ほど読んだ「神

の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強ければなり」ということばのとおりである。

人間はいくら賢くとも馬鹿なことをしている。賢いと思う人ほど馬鹿なことをしている。例えば、三菱商事は日本一の会社でそこの社長になるという人は最も知恵が優れた賢い人である筈である。その人が愚かなことをした。北海道でにしんが取れなくなったので数の子も外国から輸入しなければならない。それには大資本がいるので数年前に三菱商事の大資本を使って数の子を買い占めて大儲けしようとした。ところが数の子がちっとも売れなくて三菱商事は大損をしたという話である。必需品なら高くても買うであろうが、数の子は必需品ではない。少し食べてお正月気分を味わうために買うのです。それが非常に高ければ誰も買わない。数の子が一粒いくらなんて考えながら食べたらお正月気分なんかいっぺんに吹っ飛んでしまう。必需品でないものは高くすれば売れないぐらいの事は子供でもわかると思うのに、それが日本一の大会社の社長である賢い人には分からないので馬鹿な事をする。本当に人間というのは賢い人ほど馬鹿なことをするものである。

今非常な経済的な危機にあると言われておる。時々新聞に、もう景気は底をついたからこれからはよくなる、という記事が出るけれども、さっぱりよくならない。経済界の人々が聖書の教えに反することをしているからよくならないのである。これは経済学者の学説によっても大政治家の政策によっても決してよくならない。聖書は「各々自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい」（ピリピ書 2 章 4 節）と教えておるのに、日本の経済界の人々は、三菱商事の社長を始めみんな他の人の事などかまってはいられない、自分さえ儲かればよいというようにやっておるからますます悪くなる。聖書の信仰に帰らなければ決してよくならないのである。

先ほどもお話ししたように、人間が人間でなくなって単なる動物であるならば、人間は知恵のために滅びる。人間が動物ならば自分が世界に覇を唱えるようになったその特徴の故に滅びるのである。けれども人間が信仰をもてば、他の動物と違うならば滅びない。自分の愚かさを悟り、自分の罪を知り、罪の赦しの十字架の福音を信ずるなら滅びない。信仰がなければ、賢い人程愚かになる。そしてその賢さの故に滅びる。今こそ人は聖書に帰らなければならない。そして他の動物と違うものにならなければならない。人間は本当の信仰を持たなければならない。信仰を持てないならば、いくら出世しても、金を儲けても失敗の生涯である。キリスト教を一言で言えば、罪の赦しの十字架の福音である。それ以上でもなくそれ以下でもない。自分が最大の罪人であることを悟り、キリストの十字架に依りすがって神の前に義とせらるるのである。それ以外に人間の生きていく道はない。

アメリカやヨーロッパのキリスト教国も滅びそうになっている。これはその信仰が形式化して、生命のない死んだ信仰だからである。レーガン[77]のような好戦的な人

が大統領に再選されるのである。信仰が死んでいる証拠である。戦争をやめさせることができないような信仰は本当の信仰ではない。唯物的(ゆいぶつてき)な経済学の理論に負けそうになるというのも本当の信仰でないからである。今は私達も信仰が形骸化(けいがいか)してしまわないように、本当に生きた信仰を一生懸命求めて人々に伝えてあげなければならない時である。その意味において第6回叶水(かのみず)夏の学校が開かれて、聖書を一生懸命学ぶ機会を得ることができたのは大いなる恵みである。どうか私共一生懸命神様の御恵(みめぐ)みによって学び、受けたものを人々に分けてあげて、この夏の学校が大いに役に立ち、力となることを切に願うものである。

「独立時報」第 88 号 1985 年 6 月

10-2-16 無教会信仰の確立

1984年9月30日 YWCAにおける石原兵永先生告別式にて述ぶ

無教会の信仰は一つの教派ではなく、キリスト教そのものである。主イエスがいわれた如く「神は霊なれば、拝する者も霊と真理とをもって拝すべきなり」と言う信仰である。罪の赦しの十字架の福音を真理なりと信じ、この真理に従って生きていくことである。儀式や形式のないものである。

それにも拘わらず時代が移りかわると共に形式や儀式が出来て来て、精神よりも形式が重んぜられ、信仰が堕落して中世の暗黒時代となった。これに対してルターが宗教改革を行い、形式を取り除き信仰を元に戻し、真理と自由の尊ばれる近代が出来たのである。

しかしルターは洗礼と聖餐式と教会制度の三つの形式を残した。この残った形式の故にキリスト教が無力になり、戦争をやめさせることが出来ないし、唯物論的経済学に負けそうになっている。

この時に内村先生は残った三つの形式を取り除き、信仰を完全に始めのキリスト教に戻し、信仰を純粋にした。神の真理の欠乏の故に死滅にひんしつつある世界を救う力を取り戻した。内村先生のなさったことは大きなことである。

ところが制度化された現在の教会は恐れを感じ、旧体制を護ろうとして、内村が死ねば内村派という一つの教派になると考えた。多くの教派はこのような宗教改革運動が固定して出来たものだからである。固定というのは形式化である。改革運動の真理だけによってつながるエクレシアならよいが、私的な関係、形式的な関係によってつながるので教派になるのである。

無教会の場合でも教会側の人々が期待した如く、形式化して、無教会派が出来る心配はあった。塚本先生が主流で誰々先生は亜流であるというような声があった。

塚本先生独立後内村先生を助けられた石原先生は、内村先生の後継者として、無教会派の中心に祭り上げられる心配が多分にあったのである。それを拒否なさって無教会が一つの教派とならないように護られたことは大きなことである。内村先生の教えられた真理だけを受け継がれて伝道なさりこの世的、形式的なものを一切しりぞけられた。

内村先生没後多数の無教会伝道者が現れたが、皆内村先生とのこの世的関係を離れて内村先生の信仰そのままを、二千年前に始められたままの純粋の罪の赦しの十字架の福音を伝道なさっておられる。これで無教会信仰が、純粋のキリスト教の信仰が確立されたのである。このようにして確立出来たことについて石原兵永先生の功績

は大きい。

「独立時報」第 89 号 1985 年 12 月

10-2-17 弔辞

1985年4月27日政池先生告別式にて述ぶ

政池仁は類いまれな正義の士であった。不義を嫌い、正しいことを実行する人であった。それ故、人々から尊敬された。従って罪を犯さない人と思われておった。しかしこれは誤解である。自分では最大の罪人であることを自覚して、罪と取り組んで血を流す程戦って来たのである。罪は心の問題である。剣をもって人を殺さなくとも、人を憎むなら殺したと同じであると知って自分の心の中から出る悪い思いと戦って、打ち負かされて、キリストの十字架に依り縋って初めて勝つことが出来たのである。それ故、罪の赦しの十字架の福音を単純に信じた。十字架に縋るより他に生きる途がないことを知った。常にキリスト教は、十字架教であると言っておった。人間は、誰でも自分の力で完全に潔くなることは出来ないことを、専門の化学の例を引いて説明しておった。純粋な水と言われている蒸留水でも、不純物を完全に取り除かれてはいないと言っていた。化学者は 100%純粋とは言わないで、99.99…%純粋だと言い 9 の数で純粋度を示している。科学者として真理を愛し、真理を重んじていたが、罪の赦しの十字架の福音が、最高の真理であることを知って、一層真理を重んじ、真理に従って生きるように努力した。それ故類いまれな義人と見られたが、こう見られることを嫌っておった。先程歌った讃美歌 511 番[78]が、彼の特愛の歌であることがこれを示す。

無教会は形式に捉われないものであるから、偉い信仰の先生の許に集まって、信仰の真理を学ぶという形になって来る。そして我等は内村先生という偉い先生を与えられて、真理なるキリスト教を学んできたのであるが、これには弊害も伴う。信仰の先生を尊敬する余りに、先生を偶像視するようになることである。内村先生も偶像視されないように気を配って居られた。ある時は「俺の下手な字まで真似する者がある」と言われたことがある。内村先生の言だから真理だとしてはならない。内村先生が真理を教えて下さるから尊敬し、愛するのである。人は神にだけ頼って、人間的なものに頼らず、内村先生にも頼らず、立派に信仰を持って行くことが出来るという大きな真理を教えて下さったから、内村先生を愛し尊敬するのである。しかし、尊敬し、愛するのと偶像視することと紛れ易いものであるから、一生懸命に先生を偶像視しないように努力しなければならない。これを思う時に、信仰の友人を与えられたということは有難いことである。内村先生という偉い先生を与えられたことにも優る恩恵である。内村先生の下に集められた同じ信仰の友人として、共に力を合わせて、信仰の真理を求めて来た。友人は愛し合い、尊敬し合っても、偶像視する心配はなかったか

ら神から直接教えられ、導かれることが出来た。内村先生を偶像視することなく、内村先生から信仰の真理をたくさん学ぶことが出来た。純粋のキリスト教から逸脱することなく、内村先生から教えられた信仰を守り通すことが出来た。これは信仰の友人を与えられたからである。私達より少し前の内村先生の弟子達から偉い先生が沢山輩出したが、大抵の方が一度か二度内村先生と衝突したが、私達の仲間、内村先生の最晩年の弟子達は内村先生と衝突しなかった。これは先生を偶像視しなかったからである。この点についての政池仁の力は大きかった。私達はいずれも 80 歳代になって、次々に召されて行った。残るものは少なくなった。しかしそれだけ天国が近くなったのである。残る者は一層まことの信仰から離れず、天国での再会の喜びを待ち望んでいる。天国と地上に別れても、主にある交わりは続くであろう。内村先生の好きなワーズワース[79]の駒鳥を友とする養老院の老人の詩[80]の最後に、That friendship lasts though fellowship is broken.[81]という語がある。肉の交わりは絶たれても、主にある友情は永遠に続く。

（『みめぐみに応えまつりて』 1985 年）

「独立時報」第 91 号 1986 年 12 月

10-2-18 宋斗用兄を憶う

宋斗用兄は私の数ある韓国の友人の中で最も親しき方である。青年時代に共に内村先生の門下で聖書を学んだ。内村先生は韓国の青年達を褒めておった。日本の悪い統治の故に多くの苦難にあい、その苦難の故に霊的に鍛えられて、内村先生が感心なさったような立派な信仰を持ったのである。

宋斗用兄は純粋なキリスト教の信仰を、即ち罪の赦しの十字架の福音を信じ、ご生涯を通して信じ続けられた。「人がその友の為に自分の命をすてること、これより大きな愛はない」というキリストの最大の愛を受けて救われたという信仰である。従って愛という実を結ぶまことの信仰である。それ故、隣人を愛し、祖国韓国を愛した。韓国の救われんことを願ってすべてを捨てて伝道と教育を行った。敵をも愛する愛を持った。北朝鮮の共産主義者を憎まなかった。韓国のクリスチャンがほとんど全部が共産主義者を憎んでいる時に愛したのである。朝鮮戦争の時の北朝鮮[82]軍の残虐ぶりを見れば憎むのも無理もないが、それでもなお、キリスト信徒は敵をも愛する愛を持つべきである。キリスト教がローマ帝国に勝ったのは、キリスト信徒が敵を愛する愛を持っていたからである。ローマ帝国はキリスト教を迫害した。キリスト信徒を捕らえて殺しても、彼らは自分を殺す人々の為に祈りつつ殺されて行った。その敵をも愛する愛に感動して信仰を持つ人が出て来るので、キリスト教をつぶすことが出来なかった。遂に 300 年たってコンスタンティヌス大帝の時にキリスト教を公認するようになった。

宋斗用兄の信仰はこの最高の愛という実を結んだほんものの信仰である。韓国の方々が北朝鮮を憎んでいることを悲しく思って居られた。韓国の人々が、キリスト信徒までが北朝鮮を憎んでいて、憎まない者は非愛国者と言われた時に、信仰による真の愛を守り通したことは偉いことである。

宋斗用兄は韓国に帰って、金教臣兄、咸錫憲兄等と共に「聖書朝鮮」を発行して純粋のキリスト教を伝えた。命がけの伝道であった。1942 年 3 月聖書朝鮮事件が起こって金教臣、咸錫憲両兄と共に一ヶ年警察に拘置されて、ひどい苦しみを味われた。金教臣兄はこの苦しみが原因であろう 1945 年、解放を待たず病死された。

宋斗用兄は 1930 年自宅に梧柳学園を創立し、小学校教育をした。解放後、公立学校にされたので手を引いたが 20 数年後、離島の長峰島のプルン学園という中学校を経営された。政池仁兄が 1964 年に日本が韓国に対して犯した罪を謝る為に韓国を訪ねた。その翌年宋斗用兄が日本を訪問された。独立学園にも来て下さるのであるが、私は待ちきれないで東京まで会いに行って信濃町教会で 36 年ぶりにお会い出来た。5

月 27 日独立学園創立記念式に政池仁兄と共に来て下さった。

1968 年 9 月の私の第一回訪韓の時は宋斗用兄は金浦空港で韓国に足を踏み入れた時より釜山空港で韓国を離れるまで、10 日間共にいて下さった。

1973 年の第二回訪韓の時は長峰島のプルン学園まで案内して下さった。

1980 年の第三回訪韓は宋斗用兄に会う為に計画したのであるが、間もなくアメリカに行かれ、そして帰りには日本に寄って下さるというので、一旦は中止したが、旅券も取ったし、他の韓国の友人にも会いたいので 9 月に家内を連れて訪韓した。

ところが翌 1981 年、宋斗用兄は病気になられて日本に寄らないで韓国に帰られて後病状がよくないとのことで、急に韓国にお見舞いに行くことにした。6 月 19 日出発、新潟空港より金浦空港へ飛び、午後ソウル市内で韓国の友人達と会い、夕方まだ明るい内にソウル南端の銀馬アパート団地の宋斗用兄宅に着いた。宋兄はアパートの入口までお迎えに出て居られて、心配していたよりお元気で嬉しかった。八年ぶりの再会で、つもる話をして泊めて戴いた。翌日は光州に朴碩源兄を訪ねた。21 日は早朝光州を出発し、プルム学園を訪問し、夜宋兄の宅に着いた。22 日朝宋斗用兄に別れを告げて、金浦空港より新潟に向かって離陸し、夕方帰宅した。

あれより五年、お会いしたく思っていたが訪れることが出来ないで、五年前の別れが最後の別れになってしまった。悲しみにたえない。しかし私達は復活の希望を与えられている。天国にて再び会うことができるのである。内村先生の歌に「天地もゆるぐラッパの一声によみがえるらん春の曙」[83]というのがある。これが我らの慰めの基である。

「独立時報」第 94 号 1988 年 6 月

10-2-19 第38回卒業式[84]の辞(ことば)

日本の学校ではほとんどすべての学校で卒業式のことを卒業証書授与式といいます。教育というのは卒業証書をやればいいのだということになって日本中の学校が卒業証書販売株式会社になってしまいました。それで日本の教育が今日(こんにち)のように乱れて困った状態になっておるのです。日本の社会の一番困った状態といわれている学歴偏(へん)重(ちょう)の社会の中で学問などできなくてもとにかく卒業免状を持っていればいい、有名大学の卒業免状を持っていればいいということになって、今日(こんにち)の教育の荒廃(こうはい)、乱れが起こっているのです。卒業式というのはこれまで勉強したことをもとにして新しい本当の勉強を始めるというのが本来の意味であります。アメリカでは卒業式の日のことを commencement day というのです。始めの日ということです。ところが日本では卒業式という業(ぎょう)を終える式で、勉強をおしまいにする日、これからはちっとも勉強をしなくてもいいという日になってしまった。日本の大学卒業生は学問ができない。相当(そうとう)に優秀な卒業生だと思う人でも卒業してしまうとちっとも勉強しない。なぜ勉強しないかというと文献がないとか指導者がいないとか何だとかそんなことを申します。卒業式は勉強を終わる日ではなくてこれから本当の勉強をする日なのです。アメリカでの[85] commencement day という意味をよく悟れば、人生は一生勉強するべきものとわかるはずです。諸君はこれからが本当の勉強を始める日だという決心をもって卒業式を迎(むか)えてほしい。そのことをよく教えている言葉が先ほど読んでいただいたコリント後書(こうしょ)の言葉にあります。そこには推薦(すいせん)状と書いてありますけれど、卒業証書というのも一種の社会に対するその人の推薦(すいせん)状であります。昔ですから石に書くとかありますが、今なら紙に書かれます。しかしそんな推薦(すいせん)状は昔の石の板に彫ったものでも、今の紙に書いたものでも何の意味もないもので人間そのものに書かれたもの、それが本当の推薦(すいせん)状だと申すのです。ですから本当の卒業証書は諸君という人間に書かれたものでなければならない。諸君が卒業してそしてどういう人間になったかということが、それが一番大事な卒業証書です。やはり法律に卒業証書を出せと書いてありますから卒業証書は出しますけれども、それは後で事務室で渡してもらいます。大事なのは卒業生各自がどういう人間になったかということ、卒業生各自に書かれたものそれが本当の卒業証書です。紙切れや石きれや木のはしに書かれたものではなくて人間という生きたものに書かれた、肉の板とも書いてありますが、肉の板というのは生きた人間という意味です。切れば血が出るそういう体に書かれたものでなければならない。そういうことで勉強して、諸君がどういう人間になったかということ、それが一番大事な卒業証書です。きょうのこの卒業式にあたりまして一年生 27 名、二

年生 27 名がそれぞれ二年生及び三年生に進級いたします。三年生 26 名のうち一名は病気のために長期欠席いたしましたので、この学校では非常に珍しいことでありますけれども留年ということになりまして、今の二年生と一緒に三年生の勉強をすることになっております。残りの 25 名のうち 5 名は罪を犯しまして家に帰っております。このことについては多くの方のもっている誤解を解かなければなりません。日本では罰というのは懲らしめのためにするのだという考えがひろく行われております。それですから刑務所に入っている人は懲らしめのために刑務所に入れられているのだということで必要以上に苦しい生活をさせられている。必要以上に自由を拘束するだけでなくて中の生活が非常に苦しいようにできています。これは非常に悪いことであります。人間が人間を罰することはできない。人間が罰を行う場合は教育刑でなければなりません。人間にとって一番大事なのは自分の罪を悟り悔い改めてイエス様に罪の赦しを願うそれが一番大事なことです。どんなに立派な人、人格の立派な人だといわれても自分の罪を自覚しないならば、それは極悪の罪人と同じ罪人であります。どんなに立派な人と言われても神様から見ればそれは極悪の罪人です。罪に大小はありません。すべての人がみんな最大の罪人です。ですから聖書にもパウロの言葉として私はその罪人の首であるということが書いてあります。キリスト教最大の伝道者でキリスト教を世界に広めるために一番大きな力になって働いたそのパウロが自分は最大の罪人だとそういうことを言っているのです。ここに深い意味があります。どんな人でも自分は偉いと思っていたらその人はだめです。どんなに人から見られて、そしてあれは悪いやつだと言われている人でも罪を自覚して、そしてイエス様の十字架にすがれば完全な人になれる。人間にとっては自分の罪を自覚して自分が最大の罪人だということが分かることが大事です。人間は一生かかってもそのことが分かるように努めなければならない。人からほめられる事ばかり求めていたら、そういう人はそういうふうにはなれませんから不幸な人であります。学校でも罰と思われることを行います。それは悪いことをしたからその仕返しに苦しめてやるのだ、そういう意味で罰を行うのではありません。その人が罪を自覚して本当に悔い改めるようにするため罰と思われることをするのです。今年の 38 期生は荒れているということを人がよく言います。そして今 5 人の 38 期生が家に帰っています。これを多くの人が停学だとか、退学だとか言いますが、そのことを分からない人がそういうので、それはいけないことです。家に帰っているのは、罪を犯したから、その罪であることを自覚するように、親の元でいろいろ考え、自覚して本当に罪を悔い改めるようにと帰っているのです。その家に帰っている人達の方が悪くて、後に残っている人達がいいというのではない。みんな同じ罪人なんです。家に帰っている人たちは罪を悔い改める機会が与えられたので非常に幸いなのです。家に帰ってもらうように処置したときに、そのことを諸君達の前にあらわして、「家に帰った人の方が不幸であって残っている人が幸いな

のじゃない。家に帰った人がかえって幸せなのだ。それが罪を自覚して、本当に悔い改めることができるようになる道だから」と申しました。残っている人たちのある人は私達も同罪であるからその人達だけを帰すというのは不公平である、そういって学園の処置に対して抗議をした人がある。同罪だということが分かったら、悔い改めなければならない。家に帰らなくても本当に同罪だということが分かったならその人は非常に幸せです。けれども罪を自覚しても悔い改めようとしないのですから、そういうことを考えている人は不幸ですね。このことがよく分かるということは非常に大事なことです。この卒業のときだけではなくて世の中に出てもですね。誰でも罰というようなことを受けないで罪を自覚して悔い改めること、そのことが一番大事です。家に帰った人々の方が学園の愛を受けて、そして本当に悔い改めることができる。何が本当に一番幸せなことかどうか、そのことをはっきりと考えなければならない。ただ人前にあの人は立派な人だとか何とかいわれればそれでいいと、そういうことが幸せだと思うかも知れませんけれども、そういうことはちっとも幸せにはならない。人に喜ばれるよりも神に喜ばれることの方が大事である。家に帰った人々がまだすっかり分かってはいないでありましょうけれども、自分は家に帰らせてもらったために幸せだったとそういうことだけはみんな気が付いているようです。家に帰ってもらうのは本当にこのことを分かってもらうためですからもうここへ帰ってきて一緒に卒業してもいいのです。けれども、本人たちはそれを望まないでもっと真剣に考えなければならないと言っています。最近家に帰りました 3 名はかえって自分は幸せだったと喜んでそういう所感を書いてよこしています。それで卒業式がすんで適当なときに学園に来てもらい、本当の意味で罪を悔い改めるということがよく分かって、多分一週間か十日遅れで卒業ということになります。去年の 1 月に問題を起こして家に帰っている人たちにはそのことがよく分かりかけて一人は家に帰って家が農家でありますので百姓をしながらこれから本当の勉強をすると喜んでおります。ただ残念なことには一人はどうも分からないで、始め分かりかけたのですけれども、学園に残っている友達なんかが早く帰ってこられるようになど色々なことを言ったりする、つまり教育刑だと言うことが忘れられて、どうもうまく指導にのってくれません。それで結局二年で退学して自分の家の方の高等学校に入るということになりました。それで、留年する方を除いて 20 名が今日、ここで卒業ということになり、残りのものはだいたい一週間十日の後に卒業ということになります。くれぐれも卒業というのは勉強をやめるときではない。本当の勉強を始めるときです。家に帰った人たちはその機会をよく活用して、本当に罪の悔い改めを得ようとして、残っている人よりも幸せになろうとしています。みんなも同じ罪を犯しているのです。みんなが罪人の首なんです。ただそれを自覚する機会を失っておるから気の毒ですけれども、そういう機会が与えられなくても神の前に罪を悔い改めて家に帰った人以上に幸せになれるよう本

当の人間になって下さい。パウロは捕(と)らえられて囚人(しゅうじん)としてカイサリアに2年、ローマに2年、監禁されていましたが、多くの人々に「みんなどうか私のようになってほしい。ただなわめだけは別だけど[86]」と言っております。そういう縄目(なわめ)なしで罪を悔(く)い改(あらた)めることができる人は幸せですね。縄目(なわめ)があろうがあるまいが、大事なことは罪を悔(く)い改(あらた)めてキリストによって救われることが一番大事なことです。あなたがたもそういうことをよく考えて自分は家に帰らされるようなことをしなかったから幸せだなんて思わないで、罪を悔(く)い改(あらた)めて家に帰った人たちに早く追いついてください。38期生は大変荒れたクラスだといわれますけれども、決して不幸なクラスではない。他の人たちよりも早く悔(く)い改(あらた)める機会を与えられて幸せな人たちです。人生にとって何が幸せか、何が大事かということを諸君はいろいろ考えていただきたい。そして本当の卒業証書はそれは紙切れではなくて、諸君自身だと、そういうことを自覚して、そして立派な信仰を持つように一生懸命やっていただきたいと思います。これが私の卒業式の言葉です。

「独立時報」第 98 号 1990 年 5 月

10-2-20　ネパール紀行

高津亮平兄[87]は早くからネパールへ行って教育をもって援助しようと考えておられ、大学卒業後渡航の手続きが完了するまで、約二年独立学園で教育に従事し、1981 年にネパールのポカラの近くのリャレチョール村[88]の中学校の教師となった。村の生活にとけ込み、よい教師として喜ばれておった。84 年に帰国し、独立学園 26 期卒業生の小関妙子さんと結婚し、ネパールに骨を埋めるつもりでリャレチョールに帰った。

ネパール政府の方針として、教育は外国人にさせないことになったので、86 年カトマンズ[89]の各国伝道団（UMN[90]）の本部に移り働いている。今度休暇をとって数年日本で暮らすことになった。それで高津兄のいる間に急にネパールを訪れることになった。家内と高津兄の岳父小関充兄の三人連れである。ビザ、航空券の予約、購入などの面倒な渡航手続きは一切小関兄がしてくださった。

11 月 20 日午後出発、成田空港の近くで農業をしている菅野康夫（25 期生）君宅に泊まり、21 日 8 時 30 分空港で小関兄と一緒になり、10 時 30 分離陸、タイ国バンコクに 15 時 25 分着、エアポートホテルに泊まる。22 日 10 時 55 分離陸、12 時 55 分カトマンズ空港に着陸、高津兄の出迎えを受けてパタン地区のホテルグリニッジヴィレッジに一旦落ち着き、歩いて五分位の距離の高津兄宅に行き、ご家族と会った。小関兄はふたりのお孫様に日本からのお土産をたくさん差し上げたので喜びの声が家に溢れた。

ちょうど JOCS[91]の会議があって、オカルドゥンガ[92]から伊藤邦幸医師[93]、日本から田村光三理事[94]が来て居られて高津邸に来られた。高津夫人の心からの御馳走を皆で戴いて楽しい夕を過ごした。オカルドゥンガは不便で、今度は行けないと諦めていたのに伊藤兄にお会い出来て喜ばしい。

23 日午前は、カトマンズの東部のハシュパティナートのヒンドゥー教の本山をバグマティ川に沿うているので対岸の丘から見る。多数の人々がお参りして居り、川岸にはコンクリートの台が沢山出来ていて、火葬が行われていた。附近に小さな、皆同じ型のストゥーパ[95]が何千と建てられている。ヒンドゥー教は迷信的な低級な宗教である。

午後は、西の外れの丘の上の仏教のスワヤンブナート寺院を見に行った。カトマンズを見下ろす景色のよい所である。インドの仏教も堕落した偶像教である。

24 日飛行機でポカラに行く。高津兄が案内してくださるので四人連れになった。霧のため出発が遅れポカラ空港に昼少し前に着陸、ポカラの西にフェワ湖という人造湖

があり、景色が大変よい。湖の南端に近く細くなった対岸にあるフィッシュテイルロッジという大変綺麗なホテルに泊まる。ドラム缶を浮きにした筏で渡る。

よく手入れされた庭から北方を見ると、6,993 メートルのマチャプチャレ（魚の尾という意味でホテルの名もこれに由来する）が見え、その両側に 8,000 メートル級のアンナプルナ連峰が遠いので低く両手を拡げたように見える。実にすばらしい光景である。特に日の出、日の入りの時が赤く染まって美しいので朝早く起きたり、夕暮れに寒くなっても外に出て美しい光景を三日間満喫した。

25 日は対岸のポカラの町を散歩した位でマチャプチャレを眺めつつ休養した。

26 日は今度の旅行の一番の目的である高津兄が五年間の教師をしておったリャレチョール村と中学校を訪ねるために早朝出発。ジープで行ける所まで小一時間走る。

それより約 20 分石ころの坂道を上ると村に達する。村の中央にある学校に行く。休日であって授業は見られなかったが、教師は校長始め約 10 名が運動場の一隅に腰掛けを並べて待っていて下さった。挨拶の後、校長が各教師を紹介して下さった。高津兄が村の人々のためによいことをしていて下さったので、私達をも喜んで迎えて下さった。その上、農村は耕地も整備されて居り、未完成の家屋が多く、埃っぽく汚いカトマンズの町より遥かに気持がよい。

27 日午後飛行機でカトマンズに帰る。洗礼を受けたために一ヶ年の入牢の判決を受けた青年が相談に来た。「使徒たちは御名のために恥を加えられるに足る者とされたことを喜びながら議会から出てきた」（使徒行伝 5 章 41 節）という所を読んで、貴方はかえって幸せだと励ましてあげた。今日、信仰の自由を認めない国があるとは驚きであるが、これは先進国が悪い。通商してもうけさせて貰えば信仰の自由を認めなくてもよいとしているからである。1853 年アメリカのペリー提督が浦賀に上陸するときに、軍艦上で詩篇 100 編[96]を讃美歌にしたもの（現行讃美歌 4 番[97]）を歌って上陸したことは有名な事実である[98]。今日のアメリカが昔の信仰を捨てたからいけないのである。

28 日マウンテンフライトに乗ろうと空港に行ったが霧のため休航。所用のため空港に来られた伊藤医師と再び会うことが出来たので無駄ではなかった。伊藤兄は、奥様を亡くされて気落ちなさっているかと心配していたが、伊藤兄はネパールに来ると魚が水を得たように元気になられて活動して居られて安心した。午後はパソコンをネパール語で使えるように改造しているサッキヤ氏を訪ね、工房を見せていただいたり、御馳走になったりした。

夕は宣教師ディック・スミス氏[99]宅によばれて御馳走になった。近くアメリカに帰り、今度はインドに伝道なさるとのこと。

29 日 10 時 30 分マウンテンフライト離陸、北に向かってヒマラヤを 20 キロまで接近して、6,000m の高度でヒマラヤに平行して東に進み、8,463m のマカールあたりで U

ターンし西に進む。座席が右側であったので、帰りの飛行では、よくヒマラヤが見えた。ローツェ（8,516 メートル）、ヌプツェ（7,855 メートル）などをよく見ることが出来た。ついでに言うが、エベレスト測量の結果、これが世界最高峰と確認された時の英国のインド陸軍測量長官の名で英語ではこう呼ばれているが、ネパール語ではサガルマタと言う。11 時 30 分着陸、国際空港ターミナルの方に移り見送りにきてくれた方々と共に昼食をし、13 時 55 分離陸、バンコクに 18 時着陸、23 時 45 分離陸。機内で寝て、30 日 7 時過ぎに成田空港着。入国手続きを済まし、リムジンバス（大型上等のバスをここではこう呼ぶ）で羽田空港に行き、羽田発 11 時 30 分で山形空港に向かった。

太平洋側は快晴であるが、日本海側は天候悪しく、着陸できないときは仙台へ着陸するかも知れないとおどされたが、濃い、厚い雲の中から下降して、地表近くなると雲がなくなり無事に山形空港に着陸出来た。小関道子夫人を始め、ホームセンタージョイの方々に迎えられた。荷物の仕分けをし、空港ビルの食堂で昼食をすまし、ジョイの方の車で学園まで送って頂いた。

満 90 才と 82 才の老夫婦が疲れもせず、世界一高い山を見る大旅行をすることが出来たのは、高津兄と小関兄とが作られた余裕のある綿密な旅行計画のおかげである。高津兄の働きの場を見られたことが最大の喜びであった。

【 註・X章 】

(1) 学校や教育に関する制度。

(2) 文字が読めないこと。

(3) 1953 年 5 月 26 日に、原木伐(げんぼくき)り出しを行った。1950 年 10 月の最初期の修学旅行（1 期から 3 期までの合同）から毎月の積み立て金の他に、生徒らが営林署の下刈(したが)り作業や植林作業（初期は下刈(したが)り作業で、後(のち)に植林作業となった）を行った際の賃金の一部を、修学旅行の費用に充(あ)てていた。このような形の資金調達がどの学年まで実施されていたかは正確には不明だが、30 期代までは行われており、40 期代前半（1990 年代前半）には行われていない。植林作業は 42 期生までが従事した。

(4) 藤井武の「代贖(だいしょく)を信ずるまで」（藤井武全集 10 巻 p.313、引用は p.316）という文書にあることば。藤井の文章に対する内村の付言(ふげん)は、内村鑑三全集 27 巻 p. 554 にも収録されている。藤井自身の言葉か、藤井が聖書などから引用した言葉かは不明。

(5)（新共同訳）「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。」（マタイによる福音書 10 章 29 節～ 30 節）

(6) 元はロシア語で intelligentsiya、インテリゲンチャ。知識階級、学問や教養のある人、の意。

(7) 英語のスペリングは intelligent。知能が高い、理解力がある、聡明な、の意。

(8) 1955 年 1 月 1 日の朝日新聞（山形版）に、「辺地(へんち)に実る文化の種」という 1 ページ全面の記事が掲載された。さらに、同年 1 月 17 日の朝日新聞（全国版）の夕刊に、「雪深い飯豊山中にキリスト教の高校」という記事が掲載された。

(9) 西川勇平。本書 7-3-21 の註も参照のこと。

(10) 山形の募金会の会長は、当時の山形県知事、安孫子藤吉(あびことうきち)。

(11) スエズの戦争は、エジプト対イスラエル、イギリス、フランスの戦争のこと。第二次中東戦争とも言う。1956 年 6 月、エジプト政府がスエズ運河会社の国有化を宣言すると、イスラエルが 10 月 29 日に、イギリスとフランスが 10 月 31 日にエジプトに侵攻した。イギリス、フランス、イスラエルの 3 国は、セーブル秘密協定により、対エジプト共同参戦を約束していた。イスラエルはシナイ半島を、英仏は運河地帯を占領し、エジプトは降伏寸前まで追い詰められたが、アメリカとロシアが、停戦と三ヶ国の軍の即時全面撤退を通告。11 月 2 日の国連の合安全保障理事会において、イギリスフランス、イスラエルに対し即時停戦を求める決議が採択された。これを受け、11 月 6 日にイギリスとフランスが、11 月 8 日にはイスラエルも決議を受諾し、停戦が実現した。

　ハンガリーの戦争は、1956 年にハンガリーで起きた民衆による全国規模の蜂起と、ソ連軍によるその暴動の武力鎮圧のこと。ハンガリー動乱、ハンガリー事件、ハンガリー暴動、ハンガリー革命ともいう。1956 年 10 月 23 日、新内閣の樹立とソ連軍の撤退を要求してデモを行った民衆が治安警察と衝突。その際、ソ連軍が二度にわたり軍事介入を行い、暴動を徹底的に制圧した。さらに、ソ連は新たなハンガリー政府を任命するなど、ハンガリー人による改革を阻止する施策(しさく)を実行した。約二ヵ月続いたこの動乱で、数千人の市民が殺害され（ハンガリー側の死者は 17,000

人とも言われる)、20 万人以上（25 万人近くとも言われる）の人々が難民となり国外へ亡命した。

(12)（新共同訳）「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」（ルカによる福音書 2 章 14 節）イエスの降誕を羊飼いに知らせる天使と、その天使に加わった天の大群が語った言葉。

(13) ヨハネによる福音書 3 章 16 節。

(14) 内村鑑三全集 17 巻 p.140 ～ p.142。

(15) 内村の原文は評定官。謀計者への変更が意図的であるかは不明。

(16)（新共同訳）「闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。／あなたは深い喜びと／大きな楽しみをお与えになり／人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように／戦利品を分け合って楽しむように。／彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を／あなたはミディアンの日のように／折ってくださった。／地を踏み鳴らした兵士の靴／血にまみれた軍服はことごとく／火に投げ込まれ、焼き尽くされた。／ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる。／ダビデの王座とその王国に権威は増し／平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって／今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。（イザヤ書 9 章 1 節～ 6 節）

(17)（新共同訳）「万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。」（イザヤ書 9 章 6 節）

(18)（新共同訳）「そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」」（ヨハネの黙示録 21 章 3 節～ 4 節）

(19) ヨハネの黙示録 21 章 26 節。

(20) 仏教用語で、煩悩によって汚れているこの世のこと。

(21) 内村鑑三全集 15 巻 p.278 ～ p.279。

(22)「村里の祝福」内村鑑三全集 14 巻 p.364 以降に収録。

(23) 土地が荒れて、雑草が生い茂るところ。

(24) 心の中に包み隠すことなく、の意。

(25) William Carey(1761 ～ 1834)の言葉。ケアリーは、イギリスのバプテスト派の宣教師で、非キリスト教国への伝道の先駆者。ケアリー自身は、1793 年にインドに派遣され、聖書をベンガル語など 6 カ国語に翻訳したり、キリスト教主義の大学を設立するなどして宣教を行った。鈴木は "Expect great things; attempt great things."という文の前半のみを引用している。内村はこの文を、前半と後半を逆にして、「神の為めに大事を計画し、神より大事を望め」（内村鑑三全集 2 巻 p.184） と訳している。

(26)英語讃美歌の歌詞。独立学園で長年使用している英語讃美歌では 165 番。詞：Joseph H. Gilmore（1834 ～ 1918)、曲：William B. Bradbury（1816 ～ 1868)。1954 年版の讃美歌（日本キリスト教団出版局）では 294 番。

（27）（1915 ～ 1999）、大蔵官僚、日本専売公社総務理事を経て、参議院議員。1965 年の参議院議員選挙に全国区から自由民主党公認で出馬して当選したが、選挙を支援した専売公社の幹部ら 40 数名が公職選挙法違反で逮捕、起訴され、小林は入院した。次の選挙に落選したため、在任は一期。

（28）崔成鳳（최성봉）、プルム学園の教師。農業や日本語を教えた。1982 年 8 月 24 日に独立学園を再訪した際は教頭の任にあった。

（29）（新共同訳）「サムエルは石を一つ取ってミツパとシェンの間に置き、「今まで、主は我々を助けてくださった」と言って、それをエベン・エゼル（助けの石）と名付けた。」（サムエル記上 7 章 12 節）

（30）新共同訳と聖書協会共同訳でエベン・エゼルと訳されている語は、文語訳聖書と口語訳聖書では、エベネゼルと訳されていた。

（31）（新共同訳）「わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。」（詩編 121 篇 2 節）

（32）1954 年版の讃美歌（日本キリスト教団出版局）の 267 番と思われる。

（33）経綸とは、国を治めることや、そのための施策のこと。

（34）自分が属する国家や国民の特徴的な長所や美点の優秀さを主張し、それらをさらに増そうとすること。英語の名詞形で言えばナショナリズム。

（35）世界を一つの家とすること。第二次世界大戦中、日本の海外侵略を正当化するための標語として使われた言葉。

（36）　原書では　いうのらしい。

（37）原文では一億五千年前。誤植と思われるので訂正した。

（38）福井県立恐竜博物館のホームページ（https://www.dinosaur.pref.fukui.jp/dino/faq/r02070.html）によれば、隕石衝突説が恐竜絶滅の原因を説明する最も有力な説だ。6,600 万年ほど前、直径 10.6km から 80.9km とも言われる巨大な隕石が、メキシコのユカタン半島に衝突し、チクシュルーブ・クレーターを作った。その際、大量の塵が発生し、それが太陽光線をさえぎり、地球上が寒冷化した。光合成ができないため植物が減り、植物を食べる草食恐竜が死に、草食恐竜を食べる肉食恐竜も死んでいったと考えられている。さらに、この頃インドのデカン高原で発生した大規模な噴火活動も、恐竜などの絶滅に影響を与えたと考えられている。この隕石衝突説がウォルター・アルバレズと、その父親のルイス・アルバレズによって提唱されたのは、鈴木が本稿を執筆する一年後の 1980 年であるため、本稿執筆時の鈴木はまだこの説を知らない。

（39）卵を積み重ねること。極めて不安定で崩れやすく、危険な状態にあること。

（40）（1890 ～ 1974）、法学者。文部大臣、最高裁判所長官、国際司法裁判所判事などを歴任。妻の影響で無教会からカトリック教徒となった。

（41）北海道夕張郡長沼町に自衛隊の地対空ミサイル「ナイキ・ハーキュリーズ」基地を建設するため、政府（農林大臣）が国有林の保安林指定を解除した。それに対し、基地反対派の地元住民が、憲法違反の自衛隊基地建設のための保安林解除は違法と訴訟を起こした（長沼ナイキ事件）。1973 年 9 月、一審の札幌地方裁判所・福島重雄裁判長は、自衛隊を違憲とし、原告の訴えを認め、保安林指定解除処分の取り消しを命ずる画期的な判断を下した。ただし、この一審判決は、

二審の札幌高等裁判所で破棄され、最高裁判所も二審判決を支持して原告の訴えを退けた。平賀書簡とは、この一審判決の前に、裁判長であった福島判事に宛てて、札幌地裁所長であった平賀健太が送った書簡のこと。内容は、「一先輩のアドバイスとして、参考になるようなら判断の一助にしてください」という書き出しで、農林大臣の判断を尊重し、原告の訴えを退けるべきというものだった。この書簡が発覚すると（おそらく、福島が札幌地裁の臨時の裁判官会議に提出）、裁判官の独立性に対する侵害として論議をよんだ。最高裁判所は 1969 年 9 月 20 日に最高裁判所臨時裁判官会議を開き、平賀書簡について「先輩として親切心からでたものであるといえ節度を超えるもの」であり、「裁判の独立と公正について国民の疑惑を招く」とする最高裁としての所信を明らかにした。その上で、平賀に対して注意処分を与え、東京高等裁判所判事に異動（降格）させた。

（42）桝本忠雄。

（43）1980 年 3 月 29 日召天、4 月 5 日に学園葬。

（44）原書はクサンテイベ

（45）日本医科大学の皮膚科医、丸山千里（1901 ～ 1992）が作ったワクチンで、1974 年の国際癌学会で癌患者への有効性が報告された。丸山ワクチンは抗悪性腫瘍剤として承認されていないが、厚生省（現・厚生労働省）は、丸山ワクチンを有償治験として使用することを無期限で認めている。

（46）ここでは、人工的に作った光線を人体に照射して、病気を治療しようとする療法のこと。

（47）村岡豊、独立学園旧職員（1979 ～ 1982 年まで勤務）。物理、地学を担当。子は独立学園卒業生。

（48）静岡県浜松市。

（49）桝本忠雄・華子夫妻の子。独立学園卒業生。桝本家が独立学園に赴任した際は生後 8 ヵ月だった。

（50）1908 年、桂内閣の要請をうけて明治天皇が出した詔書（天皇の文書）。日露戦争後、人心が浮ついているとして国民の勤勉や倹約を説き、国民を教化しようとした。

（51）論じ返すこと。反論。

（52）不公平な裁判が行われるおそれのある場合に、その訴訟の当事者が、その訴訟を担当する裁判官などを、その訴訟から排除するよう申し立てること。

（53）極めて危険なこと。

（54）英語のスペリングは parable。

（55）プロパラブルとエピパラブルという語については Google 検索で一致情報が見つからない。また、*Webster's Third International Dictionary* などの辞書にも掲載されていない。英語ではなくラテン語などかもしれないが、鈴木か他の誰かの造語である可能性もある。

（56）創世記 4 章。

（57）新共同訳聖書ではツィラ。

（58）原文は、かける。

（59）日本語の聖書（文語訳・口語訳・新共同訳・聖書協会訳）でも、英語の聖書（King James

Version, New Revised Standard Version）でも、すべてにおいて 77 倍（70 ＋ 7）と訳されているが、七十人訳聖書では 70 × 7 と訳されている。

（60）マタイによる福音書 18 章。

（61）おそらく、口語の誤植と思われる。

（62）一つの語に現れるすべての母音がある音声上の特徴（とくちょう）を共有し、制限の中で配列されることを母音調和という。トルコ語や（古代）朝鮮語などにみられ、古代日本語にも存在した。中性母音とは、この母音調和を論じる際に用いられる語で、母音の一種。ただし、おそらく、口語でも母音は中性母音にはならない。

（63）音節。ひとまとまりに発音される最小単位のこと。

（64）おそらく、鈴木はこの文で、口語というものは母音が弱化するなどして、消えて音節が減って短くなるのが普通である、と述べたかったと思われる。母音の弱化とは言えないかもしれないが、鈴木はここで、日本語の「あたたかい(atatakai)」が口語で「あったかい(attakai)」になるように、口語になると語が短縮され（たようにな）る現象のことを述べているのかもしれない。

（65）ヨハネによる福音書の 1 章 1 節を比較してみる。口語訳・新共同訳・聖書協会共同訳では、「初めに言（ことば）があった。言（ことば）は神と共にあった。言（ことば）は神であった。」となっている。一方、文語訳聖書では太初（はじめ）に道（ことば）あり道（ことば）は神と偕（とも）にあり道（ことば）は即（すなわ）ち神なり」とあり、確かに文語訳のほうが短い。ただし、口語訳聖書よりも文語訳を好んだ人も多くあったろうが、一般的にそうだったとするのは言いすぎだろう。

（66）政府や役員が偉く、民間の人民は卑しいとすること。

（67）原文は上（かみ）の山（やま）。現在、市名は上山市と表記するが、温泉名はかみのやま温泉と表記する。

（68）在とは、いなかや村里のこと。

（69）優れた味わいやおもむきのこと。

（70）本書 8-1-4 の註を参照のこと。

（71）企業が事業活動のために投じる資金のこと。

（72）現在の株式会社フジクラのことと思われる。創業は 1885 年で、現在は光ファイバーや電線などを製造する、東証一部上場の大企業。鈴木と藤倉電線会社を結びつけたのは、ほぼ間違いなく松前重義（内村門下、逓信省役人、東海大学創立者）と思われる。

（73）原文の表現は、現在では適切でないため改めた。

（74）（1855 ～ 1944）、哲学者、東京帝国大学教授。

（75）（1836 ～ 1916）、哲学者、教育家。東京帝国大学総長。

（76）原文の表現は、現在では適切でないため改めた。

（77）Ronald W. Reagan（1911 ～ 2004）、アメリカ合衆国第 40 代大統領。元は映画俳優。国威発揚（こくいはつよう）のため、レバノン出兵、リビア爆撃、グレナダ侵攻、またニカラグアの反政府勢力の支持など、数々の強硬策を行ったが、一方で冷戦終結に至（いた）る路線をつくったとも言われる。

（78）1954 年版の讃美歌。一番の歌詞は、「みゆるしあらずば／ほろぶべきこの身、／わが主（しゅ）よ、あわれみ／すくいたまえ。／イエスきみよ、このままに／我をこのままに救い給え。」

（79）William Wordsworth（1770 ～ 1850）、イギリスの詩人。自然を歌うロマン主義の中心的詩

人。

（80）題（書き出し）は、I Know An Aged Man Constrained To Dwell、ワーズワースの死の 4 年前の作と思われる。

（81）意味は鈴木の文の通りで、会えなくなっても友情は続く、というところだろう。

（82）原文の表現は、現在では適切でないため改めた。

（83）引用元の内村の詩は、内村鑑三全集 21 巻 p.248 に掲載されており、題は春の曙（あけぼの）。鈴木の引用と若干表記が異なるため、以下に内村の表記通りに記しておく。「天地（あめつち）も揺（ゆる）ぐラツパの一声（ひとこえ）に更生（よみがえ）へるらむ春の曙（あけぼの）」（テサロニケ前書四章十六節）

（84）鈴木が校長として述べた最後の卒業式の式辞。この年度末をもって鈴木は校長を退任し名誉校長となった。

（85）原文はアメリカで。

（86）（文語訳）パウロ曰（いい）けるは容易（たやすき）にもせよ容易（たやす）からざるにもせよ我（われ）は惟（ただ）なんぢ耳（のみ）ならず今日（きょう）われに聽（きく）ところの者みな此（この）この縲絏（なわめ）なくして我（わが）ごとき者（もの）とならんことを神（かみ）に願（ねがう）ふなり（使徒言行録 26 章 29 節）

（新共同訳）「パウロは言った。「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」」（同）

（87）本書 6-7 の訳者である小関（こせき）妙子氏の夫。

（88）原文は、リアレチョール村。発音（表記）は、今野和子氏が高津妙子氏に確認した。

（89）ネパール連邦民主共和国（鈴木の訪問当時はネパール王国）の首都。

（90）United Mission to Nepal の略。

（91）日本キリスト教海外医療協力会、JOCS は、英名である Japan Overseas Christian Medical Cooperative Service の略。

（92）ネパールの地名。伊藤邦幸（くにゆき）が活動した病院がある地。

（93）（1931 ～ 1993）、医師、JOCS スタッフ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程で倫理学を、京都大学大学院文学研究科哲学科博士課程でキリスト教学を専攻。1960 年 11 月から 1961 年 5 月まで、第五次南極観測隊に参加。1963 年から京都大学医学部医学科で学び、医師となった。京都大学大学院で免疫学を研究した妻・聡美（そうび）と共に延（の）べ 7 年 6 ヶ月、ネパールのオカルドゥンガで診療活動を行った。独立学園に度々来校し、北極学術調査やネパールでの医療活動などについて講演を行った。子の一人は独立学園卒業生。

（94）独立学園旧理事・旧監事。経済学者、明治大学教授。政池仁（まさいけじん）の聖書集会の会員。19 期生の卒業記念講演者。本書の註作成にあたり大いに参考にした『鈴木弼美（すけよし）－神に依（よ）り頼（たの）む独立人（どくりつじん）－』（シャローム図書、2000 年 10 月 10 日刊行）の著者。

（95）仏塔（ぶっとう）。日本の五重塔などの原形で、卒塔婆（そとば）や塔の語源と言われる。元は、釈迦（しゃか）の遺骨を納めた礼拝の対象となる建造物のこと。原文では、ストューパ。

（96）（新共同訳）「全地よ、主（しゅ）に向かって喜びの叫びをあげよ。／喜び祝い、主（しゅ）に仕え／喜び歌って御前（みまえ）に進み出よ。」（詩編 100 篇 1 節～ 2 節）

（97）1954 年版。

（98）ペリーが浦賀（神奈川県）に入港したのは 1853 年 7 月 8 日で、久里浜（同）に上陸したのは 7 月 14 日である。*Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan*（邦題『ペリー提督日本遠征記』、F. L. ホークス著、ペリー監修（ただし日本語版はペリー著、F. L. ホークス編纂））によれば、この間である 7 月 10 日の日曜日に、ペリーが船上で礼拝を守ったことが記されている。しかし、その礼拝の中で聖書のどこを読み、またどの讃美歌を歌ったかの記述はない。また、久里浜に上陸して大統領からの親書を手渡した後、ペリー一行が船に戻るために離岸する際、ペリーに同行していた楽団がアメリカ国歌を演奏したという記述はあるが、上陸時や離岸時に讃美歌を歌ったという記述はない。確かに、ペリーが日本に来た際に礼拝で詩編 100 編を読んだ、あるいは歌ったという資料は存在するものの、本註作成時にその出典や真偽を確認することはできなかった。

（99）原文は、ディク・スミス。発音（表記）については同上。